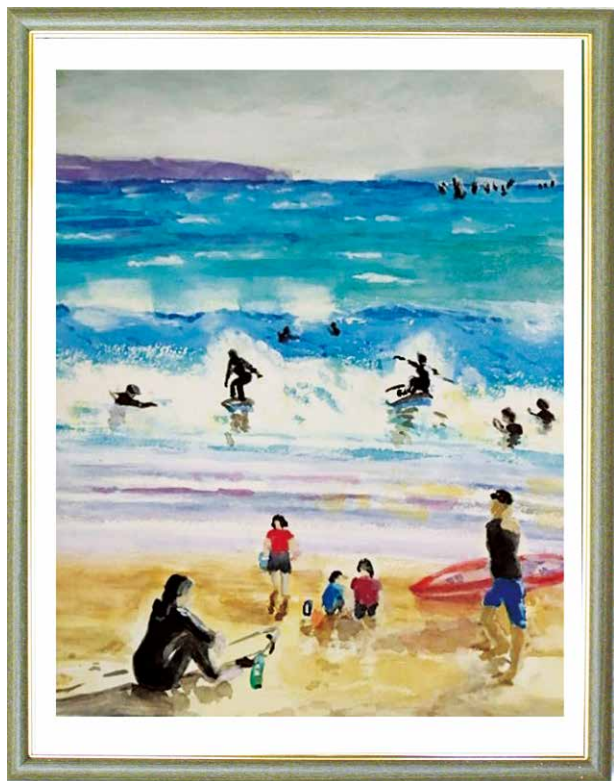


悠遊

第二十五号



企業OBペンクラブ

春の陽に 見つめられては

頬染める



長尾 進一郎

光芒や
ロマンと物理の 散歩道



池田 隆

秋の海
言い寄る男 引く女



矢澤 正二

ペンフォト句

①



中村 晃也

惜春の
吐息に揺らぐ
吊灯籠



安藤 晃二

ハナミズキ
名残の紅や
秋 深し

悠遊

第二十五号

企業OBペンクラブ

表紙の絵「江の島の卯月波」

首藤 静夫

江の島は一年中賑やかである。

橋から弁財天への道は人いきれするほどの混雑だ。

しかし、少し外れれば小さな漁港を波が洗い、隣のヨットハーバーから一帆が静かに出ていく。

4月になると「卯月波」が次々に押し寄せ、愈々マリンレジャーの季節だ。風が強く、まだ寒いのでサーファーのウエットスーツも黒づくめ。だがこれも白波にマッチするのかも知れない。

目次

▽巻頭言……………	清水	勝4
-----------	----	----

Ⅱ特集Ⅱ われら高齢世代

▽八十一歳と十八歳の違い……………	中村	晃也6
▽高齢化とはこういうことか……………	山縣	正靖8
▽暗黒時代の予感……………	大野	晃10
▽我ら後期高齢者世代……………	岩崎洋一郎	12
▽老人ホームは呆け老人製造所か?……………	新山章一郎	14
▽人生百年時代における「孫の七五三」……………	上原	利夫16
▽日本の高齢化社会は世界の先駆け……………	稲宮	健一18
▽われら高齢世代……………	上田	信隆20
▽ビッグバン以来最強運の我が世代……………	細谷	博22
▽傘寿のつぶやき〜遊行期の風景……………	西川	武彦24
▽後期高齢者の呟き……………	阿部	典文26
▽おまけの人生……………	塚田	實28
▽こんな年だった……………	都甲	昌利30
▽老人の健康保険……………	玉山	和夫32
▽自然と情報……………	市川	忠夫34
▽二度目の大嘗祭……………	森田	晃司36
▽嬉しい贈り物……………	川口ひろ子	38
▽朝粥記……………	大森	海太40
▽長生きするなら絵にかぎる……………	首藤	静夫42

▽囲碁と私……………	村谷	卓一44
▽ダメで元々……………	田中みづえ	46
▽私の「My Way」……………	鶴飼	直哉48
▽ギターをとりて爪弾けば……………	志村	良知50
▽人は世につれ……………	富岡喜久雄	52
▽最悪のプラン……………	内田	満夫54
▽抜け殻……………	児玉	寛嗣56
▽サウルフ老人ニワタシハナリタイ……………	斉藤	征雄58
▽老人と車……………	金京	法一60

Ⅱ自由テーマⅡ

▽昭和二十年に生まれて……………	木村	敏美62
▽金正恩の国連演説……………	池田	隆64
▽繰り返される世界史的愚行……………	野上	浩三66
▽続・混沌と迷路……………	大泉	潤68
▽ベシシック・インカムの源泉……………	野瀬	隆平70
▽アベノミクス万歳……………	鳥海	博72
▽对待の論理……………	浅井壮一郎	74
▽消えた町―院内銀山……………	大月	和彦76
▽日本の食肉文化考……………	大越	浩平78
▽荒波のなかの教皇ピウス……………	松浦	俊博80
▽近江商人と煉瓦蔵……………	矢澤	正二82
▽若狭の「お水送り」……………	浜田	道雄84
▽五七五の思い出……………	松田	昌康86

▽母の新盆……………	三	春	88
▽カミサマとホトケサマ……………	杉浦	右蔵	90
▽最後にもらった手紙……………	大平	忠	92
▽慈雨……………	新井	良侑	94
▽なんでやねん……………	浜口須美子		96
▽楽しい旅……………	松谷	隆	98
▽インドネシアの旅……………	原田	信	100
▽アヘマの仲間……………	濱田	優	102
▽大和路ビークハント……………	新田由紀子		104
▽マレーシア旅行の余震……………	大津	隆文	106
▽言葉と音楽の戯れ……………	藤原	道夫	108
▽バイロイト詣で……………	下山	健夫	110
▽日の出……………	安藤	晃二	112
▽あの日に帰りたい……………	八木	信男	114
▽裁判傍聴……………	廣澤	重穂	116
▽紙塑人形……………	田原	敬	118
▽企業OBペンクラブ入会記……………	長尾進一郎		120
▽鶴を折る人……………	馬場真寿美		124
▽お爺ちゃん聴くわヨ……………	清水	勝	129
▽私が作った女……………	内藤真理子		134
▽「赤い城」の夢……………	平尾	富男	139
▽白い大理石の道……………	福本多佳子		144

Ⅱ 活動報告Ⅱ

▽「ペン」活動を楽しもう！……………	【会員募集】……………	122
▽何でも書こう会……………		150
▽掌編小説勉強会……………		151
▽サロン21……………		152
▽ペン俳句のこの一年……………	佳句鑑賞……………	153
▽二〇一七年「ペン川柳」勉強会の成果……………		157
▽ペン・フォト句会……………		162
▽英語を読もう会……………		163
▽何でも読もう会……………		164
▽ホームページ関連……………		165
▽企業OBペンクラブ本年の歩み……………		166
▽会員名簿……………		170
▽編集後記……………		172

表紙制作 表紙の絵 カット

福本多佳子	
首藤 静夫	
安藤 晃二	木村 敏美
塚田 實	野瀬 隆平
福本多佳子	山縣 正靖
	(五十音順)
	首藤 静夫
	平尾 富男

巻頭言

感性の豊かさ

会長 清水 勝

「企業OBペンクラブ」は一九八九年十一月に創立されましたので、今年の秋には三十年目を迎えます。その五年後に創刊された『悠遊』は今号で二十五号となります。

ご案内の通り、国際ペンクラブのPENとはPoet（詩人）、Essayist（随筆家）、Novelist（小説家）の頭文字をとっております。

当クラブのペンも書くということでは同じですが、それに加えて、企業・団体での永年の経験で培われた多様な、人間性溢れるPersonality（個性）と、知や美に加え変化をも感じ取るEmotion（感性）、さらにそれらを基に人と人の関係を創り出すNetwork（繋がり）の頭文字でもあるのです。

近年重視されている感性とは、心の豊かさを表します。IQ（知能指数）に対し、EQ（感性指数＝心の知能指数）として示されています。

このEQは、アメリカの行動心理学者ゴールマンが唱えたもので、偽りのない自分の気持を素直に認め、心から納得できる判断を下す能力、不安や怒りなどの衝動をコントロールできる能力、窮地に陥っても自分自身を励まし楽観的な考えを維持できる能力、他人を思いやり共感できる能力、集団の中での調和と協調を重んじる社会的能力を意味しています。

感性の豊かな人の特徴は、いろんなことに感動でき、他人への配慮ができる人です。それを磨く方法は、感動、共感（汗）体験を積み重ねると良いと言われています。

当クラブには八つの勉強会がありますが、それぞれ感動体験を文章にしたり、語り合ったりして、互いに刺激し合っています。例えば、「何でも書こう会」は各人の感動体験を八百字に文章化し、かつ皆の前で順番に朗読しています。

二十五号のテーマは【われら高齢世代】ですが、高齢世代の気概を、感性豊かに『悠遊』を通じて著すとともに、これに共感する新たなネットワークが広がることを期待しております。

特 集 われら高齢世代



油彩画 福本 多佳子

八十一歳と十八歳の違い

中村 晃也

私は八十一歳の誕生日を病院で迎えた。家の近くの国立国際医療センター9階の四人収容の病室である。

カーテンで仕切られた隣のベッドの住人は、夜中じゅう意味のない大声を上げ続ける。その向かいのベッドの患者はかなりの重体だが、三カ月の入院期限を二日後に控えて転院先との連絡やら、身の回り品の整理やらで忙しい。もう一人の患者も相当な重体で、家族やお手伝いの看護師が付きつきりで面倒を見ている。

胃潰瘍で緊急入院した私はあまり手のかからない患者だ。食事や薬の配布の際、必ず氏名と誕生日を言わせられるのだが、若い看護師の一人に「あれ？ 今日の中村さんのお誕生日ですね。おめでとうございます。えー？ 八十一歳なんですか？ もっとお若いと思っていました」とお世辞を言われる始末。若いといわれてよろこぶ

年齢ではない。

八十歳になってから体調がはっきりしなかった。一年前に週三回ゴルフをやってから、脚・腰・肩に痛みを感じ、近所の整形外科や整体クリニックに通ったが、結果は思わしくなく神経・筋肉の鎮痛剤と胃薬を併用して数カ月をごまかして過した。

入院の日も体調が思わしくなく出先からタクシーで帰宅した。タクシーから降りた途端に眩暈がして心臓がバクバクするのを感じた。四年前に狭心症の疑いで心臓の冠動脈にステントを挿入してあるので心配になり、前述の医療センターに時間外診療で駆け込んだ。血液検査、CT検査の結果、極度の貧血で輸血の要あり、即入院と診断された。胃カメラで食道と胃の接合部全体に潰瘍があり、出血していることが判明した。原因は常用していた鎮痛剤による粘膜の損傷であることが判った。

おつむの退化も顕著で、物忘れがひどくなり、一日の半分を探し物に費やしたり、会合の日時を忘れ幹事から

呼び出しがかかってきたりするようになった。

自分がそうだから他人にも寛容になり、だんだんと仏様の心境に近づく自分を感じていた。

さて本題に入ろう。八十一歳と十八歳の違いである。

とりあげた年齢には意味があり、一歳あとの八十二歳と二十八歳では違いが鮮明に出てこない。まして一歳前の八十歳と八歳では比較しようがない。

(一) 世間のことをまだ何も知らないのが十八歳。一方もう何も覚えていないのが八十一歳。昔のことは覚えていたのに昨日のことは。

(二) 心が脆いのが十八歳。骨が脆いのが八十一歳。老骨とはよくいったもので、室内で転んだだけで骨折するケースもある。整形外科の患者は老人ばかり。

(三) 恋に溺れるのが十八歳。風呂で溺れるのが八十一歳。恋に溺れたことの無い人でも、風呂では溺れる資

格も素質もある。

(四) 偏差値が気になるのが十八歳。血糖値が気になるのが八十一歳。予備校でのテスト結果に一喜一憂したものだが、今では食事の度に血糖値を測り一喜一憂。

(五) 道路で暴走するのが十八歳。道路を逆走するのが八十一歳。いつまでも免許証を持ち続け、ブレーキとアクセルを踏み間違えて一生を終わるか。

(六) 自分を探しているのが十八歳。皆が自分を探しているのが八十一歳。徘徊老人にはなりたくない。

(七) 東京オリンピックに出たいのが十八歳。東京オリンピックまで生きたいのが八十一歳。口には出さないが本音である。笑って済ませる話ではない。

(出典：TV番組「笑点」)

高齢化とはこういうことか

山縣 正靖

ある飲み会で披露された十八歳と八十一歳なる詩です。人生につまずくのが十八歳、階段でつまずくのが八十一歳

一歳
心がもろいのが十八歳、骨がもろいのが八十一歳
恋に溺れるのが十八歳、風呂で溺れるのが八十一歳
道路で煽るのが十八歳、逆走するのが八十一歳

皆で大笑いしたのですが身につまされる詩ではある。
どうも周囲を見ていると、八十歳を過ぎてこの詩のよう
に急に衰える人と、ますます元気でGolden 80sを謳
歌する人に分かれる。Golden 80sは何をしているのか
というと、まずは飲み会、同期会、クラブなどに顔を出
して、気持ち良くバカ話をしている。また、好きなこと
を大いにやっていて、しかも少しでも上達しようと挑戦
している。

なんだそんなことかと言わなけれ。これが出来ない方

が大勢いらつしゃる。でもわがOBペンクラブでクラブ
ライフを楽しんでおられる方は大丈夫です。クラブのシ
ニアの方は人生の達人、Golden 80sの仙人です。我々
も及ばずながら真似をして、仙人を目指しましょう。

もうひとつ、今心配しているのは、このままでは日本
国が高齢化、衰退化して、孫の代では新興の列強大国の
中で、いじめられっ子に落ちぶれるのではないか、とい
うことです。

近年、日本は低成長で日本病と揶揄されていますが、
似たような事は歴史上何度も起きています。古くはロー
マ帝国興亡史、近くはパックスブリタニカと謳われた英
国が英国病に罹り、同じくパックスアメリカナと謳わ
れた米国が米国病になった例があります。

しかし英国はサッチャー夫人がゆるんだ企業に喝を入
れて奮闘している間に北海油田が噴出し、シティーを守
ることができた。米国はレーガン大統領の下、経営破綻
に瀕したビッグ3に喝を入れ、なりふり構わぬ再生戦略
を強行している間にIT産業が花開き、ベルリンの壁が

崩れた。ご両所が衰退化しかねない国に再生の上舵をひいた功績は大きい。

さて、日本が今直面している難題は、こんな処です。

①成長率が低い。これは企業が高齢化したのか、国内の設備投資を抑制しているからです。企業は国内では価格競争に勝てない、国内市場も伸びないので海外投資を優先し、手っ取り早くM&A投資を優先している。企業にはそうせざるをえない事情があるのですが、度が過ぎると国が危うくなる。

②国内の設備投資を抑制すると、日本の価格競争力は益々低下する。

③恐ろしいのは国内の製造現場への投資を抑制していると、肝心の新製品開発競争力が落ちてしまう。

④海外に進出できる大企業は良いのですが、国内に残った中小企業、高齢化産業は海外からの競争に曝されて苦闘している。

⑤ライバルである中国は巨額の設備投資をして質量ともに日本の企業を追い詰めつつある。

経済戦争だけでなく、軍勢力を拡大して帝国主義戦略

を展開しているのではないか。

このような日本高齢化現象、衰退化現象は情けない事だと思えます。子供の代はまだ良いが、孫の代は本当に困ってしまうでしょう。ここは日本再生戦略を国民挙げて創り上げ、代々の首相がリーダーシップを発揮して強化すべきだと思います。

小生は代案なき批判は役立たずといわれて尻を叩かれてきました。今も代案を出せとの思いは変わりませんので、日本再生戦略の強化のために国内設備投資を増やせ、特に価格競争力を奪回する投資、新製品開発力を奪回する投資、苦闘する中小企業や高齢者が扱い易い合理化設備を開発し配備せよ、という強化策を提言しています。

これについては当クラブでも発表し貴重なご意見をいただきました。これらのご意見を取り込んで、国民全体が受け入れられる再生戦略を創ることができれば、八十歳の爺としては望外の喜びとなります。

暗黒時代の予感

大野 昶

私の世代を一言で表すなら「戦争の体験はあるが責任を問われるほどの年齢ではなかった」と言えるでしょうか。終戦の年には国民学校六年生でした。

この年代では親たちがどう感じていたかなど想像すらできなかった年代でした。勿論私が鈍いということもあります。

過去を考え直すきっかけを与えてくれたのは、NHKの朝ドラ「あさがきた」でした。一番印象に残ったのは、世間と自分の育った家庭環境の格差の大きさでした。

女子が学問をすることが大変なこととは全く考えもしませんでした。母方の三姉妹は女学校を卒業するとその上の専門学校に進んでいました。いわゆる高等教育を受けさせるのが当たり前の家庭だったようです。

特に若死にして私が生まれた時にはこの世の人では無かった伯母は、奈良の女高師を開闢以来の成績で一番で

卒業したという伝説の人でした。まだ子供の私にとってはほんの少しでもそんな伯母に近づけばというのが目標でした。だから我が家では「女性が勉強するなどもつての外」という考えは想像すらできませんでした。

もう一つ問題があったのですが、それもこの年になるまで気がつかなかったのはどう仕様もない馬鹿と自分をのしっています。私の母は浅岡さんの創立した日本女子大の英文科に在籍しました。当時のことと縁退して私が生まれました。戦争末期には英語は敵性語とされ、中学でも教えなかったようです。「敵を知り己を知れば百戦危ぶからず」という孫氏の兵法にも反する日本軍部の考え方がありました。

女が高等教育を受け、その中身は英文学ですから当時の非国民の典型みたいなものです。今にして思えば母が人前に出るのを極度に嫌がっていたのはこんな世間の冷たい眼が原因だったのかも知れません。そのことに考え及ばなかったガキの自分のことが残念です。

私が外国語に違和感を持たず使えたらどんなに素晴らしいだろうと思っていたのは、家庭が置かれていた事

情もあったようです。家は中小企業ですが外国に自社で作った漁網を輸出していました。英語の手紙から切手をはがすのが楽しみの一つでした。敵性語を使わないと商売が上がったりになるというのが我が家でした。

これは父の方の商売の事情です。その上父方の伯父は私費でロンドンの大学に遊学し、軍の要請ということで上海の英国人が経営する会社に支配人として派遣されていました。こんな話を聞いていると「英語は敵性語」という世間の考えが理解できなかったのです。

今になると分からないことばかり。例えば上海に居たから軍は使ったのか。そう思っていたのですが、では何故伯父は上海に行ったのか、という疑問が残ります。

全くの謎だらけの上にこの会社がサッスーン商会と聞くと、今なら少し世の中も分かってきましたから、「阿片」と軍という疑問が湧いてきます。

私個人の上海の思い出は複雑です。私がまだ幼稚園の頃、祖父が上海に行くことになりました。伯父と叔母の連れ合いも上海で仕事をしていました。それで祖父が招かれたようです。私を連れてゆくという話があったので

すが、誰が反対したのか立ち消えとなりました。多分母でしょう。

問題はこの時の祖父のお土産でした。チエコ製の靴を貰いました。これが私にとつて後々までの大問題となりました。子供の足は大きくなるのにこの靴を履かないと名古屋の百貨店に連れて行ってもらえません。その為に足の小指が小さくなって今も地面に着いていません。

ざっと私が育った環境はこんなものでした。

太平洋戦争が始まると「鬼畜米英」などという言葉が氾濫し、私は鈍いので気づかなかったのですが、母には多分辛い日々が続いたことでしょう。その世間との溝は戦後になっても埋まらなかったのではないのでしょうか。周りの人たちと付き合うことはありませんでした。

最近の安倍内閣の動きを見ると戦中の片棒を担いでいた岸信介が二重写しになって仕方がありません。「鬼畜米英」が「イスラムとかテロ」に変わっただけではないでしょうか。また日本は暴走をはじめなのか。その片棒はいつも積極的にマスコミが担いできたという事実です。

我ら後期高齢者世代

岩崎 洋一郎

いつの間にか、齡八十を過ぎて九十も間近に迫ってきた。もはや、生産的な存在ではなくて、世間様の厄介者に成り下がっている自覚は鮮明に抱き続けている。

でも、ひとこと言わせてほしい。これまでの人生では、人並みに、いやそれ以上に世間様に尽くしてきた自信はある。それも、通常の日本人には見られない得難い角度からの思考と行動によって初めて可能になったと言える。すでに別の紙面で記したが、私の人生は、ハイブリッドという太い一本の線で貫かれている。戦前、戦中、戦後という激変する世間の中を生き抜いたばかりでなく、それも日本とアメリカという極端に異なる文化の中で生きてきた特異な経験を持つ（戦中の米国は経験していないが）。更に教育的には、旧制高校は自然科学で、大学は新制での文系という日本人としては特異な教育背景を

体験している。その所為かは分からぬが、物事や問題に直面すると、複眼で眺める癖がある。簡単な例を挙げれば、高校時代に数学の解を求める際には、常識的な方法ではなく、自分独自の手段で先ず取り掛かったもので、うまくゆけばそれで良し、上手く解けなかった場合には、常識的な王道的な手段で解を求めたものだった。

会社に就職した時も、父親の助言もあって、余り規模が大きい会社で、成長分野の企業に的を絞った。卒業の年に、日本の石油化学産業が正に産声を上げた時期に当たったので、躊躇わずに三菱レイヨン(株)に決めた。石油化学は、アメリカで生まれたようなもので、日本は同国の会社から技術導入をする手段が最も経済的で、時間的にも有利であった。英語に堪能であったが故に、私は新しい事業の種になるこの分野の技術を探索し、事業化を推挙する任務を担った。時には当時の社業とまったく異なる分野への進出を企画し、成功した。

此処においても、決して単一の観点ではなく、色々な角度から検討し、また職務の異なる同僚たちの意見を徴してことを進めた。

そんな環境にあった身であつたので、後期高齢者になつても、物事を見るときは、なるべく単一のソースではなく、複数の異なる角度からの意見を徴する習いになっている。新聞は一つしか購読していないが、マンシヨンのロビーには複数の新聞が置いてあり、無料で毎日読めるようになってゐる。海外関係の事項については、雑誌ビジネス・ウィークを購読しており、且つインターネットでニューヨークタイムズやニューズウィーク誌の電子紙面が閲覧できるので活用している。

齢九〇に近づいたので、これらの知識が役立つか否かはなほだ疑問であるが、自分の脳みそを刺激する手段として、長年の習性を維持している。いや、している心算である。老人の戯言を、どうかご寛容願います。



老人ホームは呆け老人製造所か？

新山 章一郎

僕はいまある老人ホームに関係しており、そこでの入居高齢者たちの生活を垣間見ることが多い。

まず彼らの日常を圧倒的に支配するのは「することがない」という現実だ。現役なら毎日を仕事に忙殺されるが、平均年齢八十歳前後、経済的に余裕はあるから働く必要もなければ、体力的にも、「仕事」はもう無理だ。

誰かが「仕事とは暇つぶしにはもってこいのモノだ」と言ったが、それが出来ないとなれば、一日、二十四時間の半分をどう過ごすかが問題になる。

出来れば趣味に励むということだが、今の八十歳台の人たちといえば、多くは仕事人間、全生活を仕事に捧げてきた世代の人、そしてその奥さん方だ。毎日寝食を除く一日を埋める程の趣味を嗜む人は多くはない。

ホームの方でも施設内イベント、外食ツアーなど催し

てくれるが、他にすることがないから参加する程度なので何となくお仕着せの感じで、どことなくしつくりこない。といって、海外旅行だ、豪華列車クルーズなどと言っても入居者全員が毎日何らかの薬を飲み、毎朝医者への送迎リムジンが超忙しい状態だからごく近間の観光旅行でさえ体力的にかなり制限される人が多い。

買い物ツアーだって、ホームからスーパーまで往復、ドア・ツー・ドアの園バスだから、帰りは雨かもしれないから傘を用意するなど頭をめぐらすことも無い。ますます頭も体も使わなくなる。これでは老けるなど言っても老けてしまう。元気で入ってきた高齢者が半年もたたないうちに、活気のない表情で、力なく歩くヨボヨボ老人になって行く。

住環境は申し分ない。冷暖房完備、三食、掃除付では食って寝る以外にすることはない。閑散としたロビーである老女がふと「退屈でタイクツで、毎日がつまらなくて…。このまま死んでしまうのかしら」と誰にともなく呟いた。普通なら誰かが、「そんなこと言わないで！」

と応じる場面だ。ところが誰も何も言わない。皆が同じ想いを切実に抱いているから、慰めようがないのだ。

興味深いのはホーム住民の間では会話が少ないことだ。これが定年直後の六十五歳前後の人々なら、これから先二十年位の第二の実りある人生に夢を託すことも出来るかもしれないが、八十過ぎてしまった今となつてはそんな夢を描き、語り合うことはまず無理だ。そんな具合で、ホームではやるせない諦めムードが漂う。

ホームのロビーを歩き交う彼ら、彼女らの後ろ姿にはなんとなく生きいきした職場生活、社会生活、そして人生そのものからもリタイアした人間の寂しさ、やるせなさみたいなモノの影がまわりついているようにさえ見える。会話どころか、一切の外界からの接触を拒絶しているような感じだ。朝、その日初めて会つて「おはようございます」と挨拶をしても、返事もせずうつろな表情で、通り過ぎて行く人もまれではない。

ホームにいる人たちは、皆が究極的には平穩に死を迎

えるために、いずれからかやって来た見知らぬ人たちの集団だ。それを常に意識しているとは思わない。しかしそれなればこそ、進んで周囲の人々と馴染んで楽しく暮らそうと努力すればいいと思うのだが、彼らには、なぜか周囲との関わり合いを拒否するような雰囲気がある。もしかしたらそれは、今まで悩まされた義理と人情に縛られた憂き世の人生に決別したのだ。もうそんなものには煩わされないぞ、と決め込んでいるからなのだろうか。

勿論、そのような心の奥底の淀みにもかかわらず、積極的にホームを飛び出し、地域の人々と交わりを求め、ストレスフリーの毎日を楽しんでいる人たちもいる。

彼らの特徴は与えられた状況のなかで積極的に他の人たちと関わっていることだ。まず、朝は大きな声で、にこやかに「おはようございます!」と挨拶をする。そして天気のことでも何でも、とにかく会話を交わす。そこに連帯感が生まれる。会話がすべてのスタートだ。さすれば何かが始まる。いや、自分で何かを始めるのだ。

「神は自ら助くる者を助く」だ。僕はそう信じている。

人生百年時代における「孫の七五三」

上原 利夫

私には曾孫のような五歳の孫がいる。最初の男である。外孫であるが、わが家の墓守となる候補かもしれない。

人生百年時代と言われる。私の父は八十三歳六カ月まで生き、母は百五歳まで生きたので、現在八十三歳一カ月の私は、百歳を身近に感じる。不摂生しなければ百二十歳まで生きられると松下幸之助さんがどこかに書いておられたので、百二十を目標としたが、そこまで生きると他人に迷惑をかけるからよう考えやと言われた。母は百歳頃から口は利けても寝たきりだった。今の私は、五歳の孫が成人する迄は、見守りたいと思っている。

私の祖父は、大阪で陶磁器用顔料商を興し、娘（私の母）に養子を迎えた。信仰心が篤く、浄土真宗の津村別院（北御堂）の総代を勤め、京都五条坂の親鸞聖人御廟の近くの墓地に墓を建てた。そんな経緯で私の実家の墓

は住まいの大阪から離れた京都にあった。私の両親もそこに眠っている。私は次男なので、住んでいる東京に墓を建てた。同じ浄土真宗の築地本願寺が造成した西多摩霊園である。丘陵地をバスが巡回する公園墓地で、宗派を問わない。現在は墓碑だけであるが、私ら夫婦のほか子や孫など希望者も入れるようにしたい。墓守には親子三代を知る者が相応しいと考えている。

日本の長寿企業は百年を超える。創業者の意思が三代下へ伝わらないと永続しないからだ。日本が近代国家になった明治以降、明治が四十五年、大正が十五年、昭和が六十四年、平成が三十年で合わせて百五十年になる。

今、人生百年時代と言われる意味は何だろう。昭和二十年までの八十年間は戦争が絶え間なく、終に敗けたのだが、戦後生まれが七十歳を越え、団塊の世代が続く。

あと三十年もすれば日本は新時代である。団塊の世代までが残す金融資産によって、日本が健全な財政国家になることを願う。これが人生百年時代へのメッセージの本音であろう。

昨年十一月、五歳の孫の七五三のお宮参りを、大阪御堂筋の本町西側の御霊神社ごりょうで行った。孫は東京生まれで、三歳半のときに、東京都武蔵野市の保育園から大阪府吹田市桃山台の幼稚園に入り、四歳半のときに、大阪市西區靱本町ついでほんまちに引越して、大阪市立靱幼稚園の年中組へ転入した。

この幼稚園を私は七十六年前に卒園したので懐かしい。御霊神社も氏神さんだった。園児は御霊神社の氏子が多い。御霊神社の境内には私の祖父が奉納した国債の記念碑が残っており、石碑の前で孫の袴姿の写真を撮った。私の祖父から数えて五代目である。

昨年の御霊神社の夏祭りに、昔の面影を残しているダンジリの太鼓に孫はついて回り、境内では出店の鉄砲撃ちに興じていた。今は横町の一銭菓子屋はないが、屋台が出ている。あとのくらい大阪で住めるかわからないが、東京では知りえないことを体験している。

孫には想像できないことだが、私の実家の跡地には四

階建てのワンルームマンションが建ち、一階にミシュランの星一つのレストランがある。近辺にこの種のレストランがいくつもある。東京の芝公園の風情を感じる。靱公園の一角に建つ電気科学館は大阪を商都にした五代友厚の屋敷跡である。少し北の肥後橋南詰の大同生命本社ビルは加島屋の跡地に建ち、広岡家を再興し日本女子大学校を開設した広岡朝子を偲ばせる。NHK朝ドラ「あさが来た」の主題歌「三六五日の紙飛行機」を孫は鼻唄で歌うので、これは将来、大阪の記憶とつながるだろう。

今の靱には広い靱公園があり、孫は幼稚園と共に大好きである。大阪弁も少し話せるようになり、遊び友達も増えた。母親に連れられて大阪の街を歩いているので、私の知らない大阪も覚えたようである。

私は家業を継いでいないので、五歳の孫に、私の祖父や父母が行った家業のことや人柄を伝える義務を感じる。母親である私の末娘も興味を持っている。それを伝える第一人者は私なので、孫のためにも百歳まで生きたいと思っている。

日本の高齢化社会は世界の先駆け

稲宮 健一

人口ピラミッドは横軸に人数、縦軸に年齢層を示した国の人口構成の図である。戦前の日本は典型的な開発途上国型で底辺に広い三角形だったが、今は若年層が細り、先端は百歳に達し、高齢層が部厚くなっている。長寿を達成できるようになったのは食料と衛生事情の改善による。同時に医療費の増大という負の面も課題だ。しかし人の幸福を福祿寿で端的に表すように、長寿は人類共通の願である。

そこで振り返り、他の国々を俯瞰すると、少し遅れて同様に高齢層が厚い社会を迎える国々が日本の後に雁行のようにつながっている。先達として日本の高齢層の生活様式はこれらの国々の規範になり得る。

単に寿命が延びただけでは幸せにつながらない。長寿と健康寿命の延びが同じでなければならない。人は当然年と共に劣化するが、劣化の進みを遅らせたり、病を回

復する手段が身近に講じられなければならない。健康寿命を延ばす施策について考える。

最近は多くの体の情報を取得できる微小なセンサーが登場して、検出された結果を即時クラウドのメモリに送信し記憶できる。記憶容量は膨大にできるので、総ての健康個人データが保存できる。普通に生活している間に腕のバンド、下着の中などに埋め込まれたセンサーで体のデータを監視できる。これにより密度の濃い検出データは自動的に処理され、異常の傾向が判断されれば、かかりつけ医者に伝えることが可能である。また、一滴の血液から病気の早期発見ができるので、簡単に血液を採取し、検査できる携帯用の装置が開発される可能性がある。日本では内視鏡など、多くの高度な医療機器が備えられているので、病があっても、初期段階で処置ができれば大事に至らず完治の可能性が高くなる。

さらには、山中伸弥教授が発見したiPS細胞の仕組みが発端となり、多くの細胞に関する知見が研究され、現在は画期的な治療法の萌芽状態である。高齢者が罹病

する心臓病、脳疾患、癌などの克服のため、最先端の研究の挑戦が果敢に続いている。高齢層の世代がこれらの最新の知見で、健康寿命を確実に延ばせることを世界に示せるなら、日本の次に高齢化社会を迎える国々に勇気が与えられる。

千年の歴史を誇る京都、江戸三百年の名残の浅草が海外に知られるようになって観光客が押し寄せている。

二十万人超達成と喜ばれている。日本の美、景色、演劇、武術、味覚を満喫されるのは誇らしいことだ。さらに高齢期の治療のため来日されるなら有難いことだ。治療費の支払いだけでなく、健康を取り戻して感謝されるなら、金に換えられない喜びがある。

高齢層の真つただ中にいる我々がまず、穏やかな生活環境の下で、健康と日本文化を満喫して安定した精神活動を保つことに大きな意義がある。一般に日本人の精神構造を島国根性という言葉で表したことをかつてよく聞いた。視野が狭い負の感覚で使われた。韓国の李御寧が

日本文化を評して縮み志向と評したが、一面で当を得ている。四方海に囲まれ、かつては国内が世界だった。必然的に内向きになる。そのため内側には濃厚な独自の文化が育った。なにしろ、漢字を胃袋に入れて、もみくちやに揉んで消化しているうち、中華文明の基本の漢字を自己流に読み、漢字かな混合文を創造し、源氏物語を書いた民族だから豊かな独自性がある。

近世に入ってから西欧文明を取り込んだ。科学技術の学習だけでなく、文芸の分野でも先人は食欲に西欧に接した。滝廉太郎、岡野貞一等、明治期に懸命に西欧的であり、かつ日本的な曲が作られた。カラオケで歌われている「スバル」などはこの流れを経て世界に広まった。

これらの優れた文化に慣れ親しみ、心豊かな高齢期を過ごしたい。長寿社会に達する前は、とかく会社社会など既存の枠に縛られる生き方が主流で、なかなか多方面にわたり活躍する機運が少なかったが、これからの高齢期には恵まれた文化のなかで、生き生きと生活していくことが、次世代への大きな遺産となるのではないか。

われら高齢世代

上田 信隆

「少年老い易く学成り難し 一寸の光陰軽んずべからず」とは昔からの教訓である。この年になるとつくづく老いを感じることが多い。私達に共通して与えられている時間であるが、人によりとりわけ自分には随分無駄に過ぎしてきたような気がする。二十一世紀になるといよいよ世の中の変化が急になり時代についていきづらくなった。特に科学技術の進歩には目が離せない。同時に情報は一段と多くなりこのような量的な増大、氾濫には戸惑うことが多い。一昔前はそれでも情報になんとかついていくことが出来た。しかし今やうつかりすれば振り落されてしまう。例えば自動運転などは夢の又夢であったが、後数年たてば現実として私たちの生活の中に入ってくる。人間の考えることが実現するようになってきたのは科学の進歩と言う点では喜ばしいことであるが同時にそれに伴う危険性が潜在的に含まれている。i P S 細胞は人

間をコピーするかもしれない。ロボットは限りなくロボットを作り出すかもしれない。ダイナマイトや核爆弾が戦争に使われるように人間はひとつたび武器をもつと必ず使用するようになる。科学は確かに世界を便利にしたり繁栄をもたらすツールになると思うが危険性も考えなくてはならない。

私たちは、年をとったがそれなりに経験は誰もが積んできたと思う。少なくとも今の若者より経験は豊富だと思う。高齢世代ではあるが、少しは知恵がある。全てを是とは思わぬがこれから否と思えるような危惧については大いに提言していくべきだと思う。それをどう選択するかは次世代の問題である。

民主主義の時代は、私達の意思是は選挙で表現するのが常套である。長年人類が模索した結果民主主義の運営が今ではスタンダードになった。最近若者の選挙離れを耳にするが由々しき問題だと思う。高齢世代の方が投票率が高いという報道には困惑を覚える。これからの世代を背負って立つ若者が選挙を拒否するのは、どう見ても問題だと思う。日本人の伝統や美徳を次世代に残していく

たいと思うなら、それなりに継承する人達を是非選びたいし、若い人達にも託したいものだ。少なくとも白紙投票で継承すべきではない。次世代に向かってまずは行動を起こすには参政権を行使することである。

私達に出来る事、残すことは限りなく少ない。無論影響を受ける人も限りがある。しかし諦めるわけにはいかないで、自分の出来ることは日々の生活態度を後輩に見てもらうしかないように思う。きっと誰かが人の善意は見ているものだと思う。一人でも二人でもよい。理解する人に対して実直に訴えていくことしかない。もし理解されなければ、それは自分に徳がないのだとあきらめべきかもしれない。

高齢になればなるほど人は言うことを聞かなくなる。自分も含めてである。相手の事を理解する度量にもかけてくる。理解した振りは出来ても心底とは言えない。長年生きてきたということはそれだけで十分自分を肯定したことになる。大なり小なり自分が一番だ。老人にその存在を否定するものなら何をされるかわからない。同時に立派な老人ほど騙されやすいと言える。若い女に財産

を持つて行かれてしまうニュースを私たちはよく目にする。おれおれ詐欺に掛かるのは俄然高齢者に多い。

われら高齢者はどう生きていけばよいのか。答えは簡単、先ずは何と言つても健康でなければいけない。お金を大切にすること。けちはいけない。偉ぶらない。自分の影響力は微々たるものだと思うこと。後はまだまだ自分はやることがあると思つて勉強することだと思ふ。少年老い易く学成り難し。座右の銘にして自分を自分でよく評価するならば、やるべきことが実にまだまだある。

われら高齢者は後何年生きることが出来るか。たとえば後数年だったとしても数年間もあるのだと思えば時間は十分にある。気の持ち様である。日野原先生のように百歳を過ぎて医療に従事する人もいる。金子兜太のような俳人は白寿になつて新聞の選者として活躍している。

やはり健康が基本のようだ。(編注…両氏とも逝去)

われら高齢者にとつて健康と勉強の両立が一番だと思ふ。なんでもないことが実は一番難しいということ年をとればとるほど解つてくる。本当に解つた時には周りは花だらけなのかもしれないが……。

ビッグバン以来最強運の我が世代

細谷 博

宇宙が始まってからのどのくらい経っているのか、昔から頭のいい人たちが考えてきて、一応の定説が出て来てはいるが、実は今でも揺れ動いています。私なんぞが天地開闢の時期を本気で知りたいと思った中学生のころ、一般の関心は太陽や地球の誕生までが精々で、銀河系宇宙の広がりやその中の太陽系の位置を探るのが最先端の宇宙物理学でした。

十九世紀半ばから二十世紀前半にかけて、『月世界探検』『海底二万里』のジュール・ヴェルヌ、『宇宙戦争』のH・G・ウェルズや我が同胞の押川春浪や海野十三のちには星新一、小松左京などが、空想科学小説と呼ばれる文学ジャンルを生み出して、未知の世界への探究心を燃やしていたが、これらの夢の殆どが昭和から平成年間にかけて次々と実現しました。

更にこの間にアインシュタインの相対性理論やそこに

由来する数々の物理学的研究の成果として、原子力発電や放射線・重粒子治療など輝かしい発明もあれば、大量殺人兵器としての原子爆弾や太陽エネルギーに迫る水素爆弾を生み出すことになり、これらの全ては我々の時代、即ち大正、昭和から平成にまたがる一世紀ほどの短期間に起こっています。

近代の大量殺戮を伴う世界規模の戦争も、二十世紀早々の欧州を主戦場とする第一次世界大戦への反省もなく、僅か二〇年後に第二次世界大戦が勃発し、日本も周回遅れの帝国主義で欧米先進国を追って地政学的に独伊と同盟し、結果として初の敗戦の憂き目に遭い、戦中、戦後筆舌に尽しがたい辛酸をなめました。が、主要都市での徹底的な空爆と人類初の原爆を生き延びて焼け跡をさまよった浮浪児は、みんな昭和生まれでした。

一方で明治維新から百五十年の一般市民の生活を見ると、正に驚天動地の大変化が多く、面々で現れてきています。一八世紀英国に端を発した産業革命は、アメリカなど新天地開拓と軌を同じくして電話、電灯の発明、T型フォードによる自動車的大量生産と一般への普及、それ

に伴う交通および流通革命、更に輪をかけた飛行機の大
型化と長距離飛行、有人衛星打ち上げなどが実現。

明治維新とほぼ同時に取り入れられた蒸気機関車が昭和
に入って次々と電化され、昭和三十九年の東京オリン
ピックの前年には新幹線が実現。今や空中に浮いて東京
―名古屋を一時間で結ぶリニア新幹線も実現間近です。

経済の面でも今やリーマンショックなど世界規模の景
気変動の結果、マル経も近経もケインズ学派も顧みられ
なくなり、「マイナス金利」という経済学の根底を揺る
がすような政策が生まれ、高いローン金利に泣き泣き「過
労」を余儀なくされたのは、今や後期高齢者と呼ばれる
昭和世代が中心でありました。

医療の世界では十九世紀末のレントゲン（第一号ノー
ベル物理学賞）によるX線の発見と診断への応用に始ま
り、現在につながる画像診断の普及と先にも述べた放射
線治療の実用化。ビタミンの役割の発見とペニシリンに
代表される抗生物質の普及。人工細胞による再生医療の
実現、遺伝形質の人工的操作によるガンとの戦いや食料
改革など、第二次大戦前では考えられなかった事ばかり

です。

先に述べた初期の空想科学小説がSFという単称で親
しまれる世の中となり、ガモフ、アシモフ、セーガン、
ハインラインなどが描く未来に、胸をときめかせた時代
もありました。がしかし、誰もが思いも付かなかったの
は半導体と二進法のコンピュータであり、先の見えない
その巨大な能力です。今や自動車も飛行機もコンピユー
タなしには動かず、将棋やチェスの名人たちを打ち負か
すほどになっています。

冒頭に戻って宇宙の年齢研究の最近の通説では、ガモ
フのビッグバン理論からハブルの宇宙膨張論と続き、現
在約二百億年説が有力ですが、人工衛星軌道上を周回す
るハブル望遠鏡やX線望遠鏡など観測機器の発達と共に
より遠くの星雲の観察が可能となり、それに連れて宇宙
の年齢が際限なく永くなっています。

或る科学者団体が毎年発表している人類の終末時間によ
ると北朝鮮の原爆搭載可能なICBM開発により、終
末時計の針は進んで残りは二分に成ったとのこと。我々
世代は全てを経験できる凄惨な世代に属しているのです。

傘寿のつぶやき ―遊行期の風景―

西川 武彦

「待っているから早く迎えに来てねって、帽子ちゃんが言っていますよ」

ヴォーカルカルテットの伴奏ピアノリストからショートメールが入った。練習場になっている彼女の家に愛用の帽子をまた忘れたのだ。現在組んでいる四人は平均年齢七五歳。二時間の練習で全員目が窪んでくると、練習場は飲み屋に変貌して、手料理を肴に酒宴が始まる。

酔い潰れた傘寿のご隠居は、毎度タクシーを拾って帰宅する。歩いて帰れば、寒風から禿げ頭を守るべき帽子は必需品だが、車で帰るのでつい忘れるのだ。初めてではない。

忘れ物は帽子に限らない。愛用のメガネ、そのケース、マフラー、四色ボールペン……。

その都度大騒ぎして、連れ合いの颯を言っている。

秋に傘寿を祝う大学の同期会があり、幹事役を務めた。幹事の相棒は元大使夫人で、パーティ慣れしている。

小さな大学で、同期生は一六〇名だった。外国人たるノンジャパ(Non-Japanese)もいたから日本人は一五〇名ほどだったろうか……。既に三割はあの世にいる。

出席と回答したのに、近づく体調を崩すのが続出、その逆もある。出欠の返事にまずは一苦労したあと、当日を迎えた。ランチとはいえ、朝から冷たい雨模様。

「出席の返事が来たのは五〇人で、食事は四五名分頼んでいたけど、このお天気だと少し減るかもね。今朝電話して四〇名に減らしちゃった……」

「それでも多いかもね、小生など半分も食べないから……」
最終的に集まったのは四七名。欠席と返事したのに現われたのもいる。介護の付添さんを除けば、実質四五名で、料理は余った。三五名分でもよかっただろう。

飲み物は主にワインだったが、なぜかこちらはよく捌けた。「飲み」意地がきたない幹事のご隠居を始めとする卒サラ男性軍の仕業だろう。午後二時、飲み過ぎて椅

子に沈んで船を漕いでいるのがチラホラ……。お昼寝の時間なのだ。

「そろそろお開きにするけど、御目出度い傘寿で切りがいいから次はなしということに…」というほろ酔い気分の司会者の声に賛否両論が激しく飛び交い、「やりたい派」が後日集って次回を決めることで落着いた。

ご隠居が所属する四〇名弱の男声合唱団「シンサーンズ」は、四〇年ほど前に香港駐在員が現地で立ち上げた長命のグループだが、これも平均年齢が七五歳を超えた。痰が詰まって声が出にくい、指揮者の指示がきこえない、指定された色の上着、ネクタイを本番で忘れる等々、マネジャー泣かせが続出している。サントリーホールで定演するレベルだが、二年後の演奏会では、喜寿、傘寿、米寿の皆さんが車椅子に座って歌っているかもしれない。それに比べて、平均年齢七五歳でも、企業OBペンクラブでは若返りがゆっくり進んでいるのが嬉しい。

そんなことを考えながら、テレビで超長寿番組『徹子

の部屋』を観ていたら、黒柳さんそっくりのアンドロイドが、徹子さんとそっくりの声音・調子で会話を始め、本物の方にたじろぎが窺えたから吃驚した。

これから三年過ぎて、東京五輪が終わる頃には、AIが急展開して、自動運転車は普及し、アンドロイドも急速に完成度が高まっていよう。八十数歳の怪しげなご隠居は、本物そっくりのアンドロイドの元カノたちを、週一で替えて別邸で侍らす。月旅行「MOONバック」も生まれて、遺灰を海でなく月に撒いてもらう裏商売も現われている。ご隠居もそれを求めて遺言に認めてある。否、こんなことが起きているかもしれない。

五輪後の世界は益々各地で混迷を深めている。

日中戦争が始まった一九三七年に生まれたご隠居は、五輪が終わった年に昇天し、その年に勃発した日朝戦争でジャパンが壊滅するのを、千の風になって眺めている……。

夕飯で飲んだ赤ワインで、傘寿のお頭が混迷を極め、壊滅状態になりました。この辺でペンを置きます。

後期高齢者の咳き

阿部 典文

日本人男子の平均寿命は八十歳、その健康寿命は七十一歳と伝えられ、世界屈指の長寿国との評価を得ている。この二つの指標の差（九歳）が大きいほど日常生活に制限を受ける、換言すると不健康者の割合が高い老人社会とされている。

幸いに私はこの統計数字を超えて、今日元気に日常生活を営んでいるが、その実情は厳しいものである。というのはこの数年、以下に記す様な病気を連続して患った。幸いに病気の発見・処置が早期であった為に、大事に至る前に治癒していた。

その第一事例は、心臓の血管老化が進み、心不全症状が発生してカテーテル（中空の柔らかい管）挿入による治療であった。カテーテル挿入の手術は三か所、一度に

手術出来ない為に、二回に分けての五日間の入院であり、その追跡監視のため、手術後四年経過した現在も年一回の定期検診を継続している。

第二事例は、「慢性硬膜外辺腫」と呼ばれる打撲傷である。これは我が家の近くを流れる神田川の遊歩道で転倒し、顔面左側を強打。真っ赤に腫れ上がった上に多少の出血を伴った。幸いにも付近にいた散策者の助力を得て救急車が呼ばれ、警察病院（東京・中野）に収容された。骨折が無かったため、当初はその傷の治療の為に数日の入院を覚悟していたが、精密診断の結果は、運動機能の退化、特に歩行障害（ふら付き）が進行してちょっとした路面の凹凸にも対応出来ないことが判明した。

その為、病院に整備されている歩行訓練強化の為の設備使用により、安全歩行訓練のリハビリが病院内で実施された。その訓練の為に入院は三十日の長期に達した。

この訓練は、簡単に要約すると歩行力を強化する事であり、退院後二年経過した今日でも、加齢による足腰の退化を防ぐ為に、一日二回（午前と午後）合計四千歩強・

約二時間の歩行訓練を、我が家の階段と居間を利用して実施している。

第三事例は、鼠径ヘルニア（鼠径部膨張）の発症であった。

この病気は大腸を取り巻く漿膜が所どころでとぎれ、壁の一部が外側に飛び出して袋状の「憩室」を作る病気である。憩室は大腸の右側の上行結腸と直腸の手前の結腸付近に発生しやすく、筋肉が老化した八十歳以上の高齢者に多く見られるという。

憩室発生自体は特に有害とはみなされていないが、放置すると憩室内に消化物が詰まる事もあり、粘膜を刺激して炎症を起こす。

私の症状の場合は、昼間の憩室はウズラの卵大に成長して下腹部に突出していたが、不思議にも夜間就寝すると：即ち横になると憩室は縮小して、多少の違和感を覚えるが、日常の生活に支障は起こらなかった。

しかし長く放置すると、憩室に穴が開き、腹膜炎を起こす恐れがあるとの忠告を受けて、全身麻酔による切開

手術に踏み切った。その手術の結果はほぼ満足すべき状態と思われるが、時々上体、例えば座った姿勢から立ち上がる際に鼠径部に痛みが走ることもあり、手術後半年程度：平成三十年代までは経過を注意深く観察する必要があると云われている。

以上私事に触れたが、八十五歳を迎えようとする一人の後期高齢者の最近の病気との闘いを記してみた。

現在は一応安定しているが、油断は禁物!! 日本人の食生活が西欧化するにつれ、国民病の主役はがんや糖尿病に変化を見せている。私の健康は現在は安定しているが、万全の注意を払い健康寿命を延ばす所存である。



おまけの人生

塚田 實

「これは立派ながんですね」。国立がん研究センターの医師から精密検査の結果を知らされた。それまでは「粘膜下腫瘍」というよく分からない病気を疑われていた。いきなり脳天を打たれたような衝撃だった。しかも「直腸がん」で、すでに肝臓に転移しているという。「早く手術した方が良いです」

更に精密検査を続け、二〇〇七年一月、手術することになった。術前面談で医師は病状と手術の詳細、輸血の準備などを丁寧に説明した。そして淡々と言った。「ステージⅣです。予後は十五パーセントですね」。予後は医学用語で、五年後生存率が十五パーセントという意味である。この時はあまり実感が湧かなかったが、少しづつ「五年後に八十五パーセントは死んでいるんだ」という思いが迫ってきた。

麻酔も含めると十時間を超える大手術だった。長い手

術に家族は安心した。早く終わるということは、手の施しようがないとして開腹手術を閉じてしまうことを意味していた。手術後私は特別病棟に移ったが、身体は十本以上の管でつながれていた。長い間控室で待っていた家族は、手術の結果報告を聞いた後、銀座の焼き肉屋で手術の成功を祝ったという。一方私は特別病棟で井上靖の「孔子」を読んでいた。看護師さんも大手術の後、難しそうな単行本を読む患者は初めて見たと驚いていた。

その後抗がん治療が始まった。人工肛門もしばらく付けていた。いくつかの抗がん剤を試したが、幸いどれも大した副作用はなかった。三ヶ月に一度の精密検査の結果を聞きに行くときはついつい悪い結果を考えてしまう。閻魔大王の裁きを受けているようだった。

案の定、一年後肝転移が発見された。今度は「予後四十パーセント」と言う。「ああー、五年後半分以上は死ぬんだ」。術前、バツハのマタイとヨハネの受難曲を聴いた。一度手術した肝臓は癒着しているので、手術は癒着を外すところから始めなければならない。肝臓の手術だけだったがそれでも六時間を要した。術後病院側の

手違いで特別病棟に入らずに、ICU（集中治療室）に送り込まれた。手術は成功で集中治療を要することになったので、気楽にテレビを見ていた。医師団の回診があり、院長に笑われた。「ICUでテレビを見ている患者は初めて見た」。退院後抗がん治療を続けたが、更に二年後肺転移が見つかり、左肺の四分の一を切除した。

「先生ゴルフ出来ますか？」「全く問題ありません。どんなやりなさい」。しかし、がんとの闘いがいつまで続くのか見通せないのは辛かった。

術後体力回復のため病室の廊下をぐるぐる歩いた。病院からは私が働いていた丸の内のオフィスが見える。「いつ帰れるんだろう？」不安を抱えながらも必死に体力回復の努力をした。病院の真下には築地市場がある。病院では死ぬか生きるか闘っている人が沢山いるのに、目の前では新鮮な魚を商っている。皮肉な巡り合わせだ。入院中先生の許可をもらって競りを見に行った。

その後会社を卒業した。会社はこの間辛抱強く私を助けてくれた。いつ放り投げられても文句は言えないところだった。有り難かった。

会社人間だったから、仕事のことしか知らなかった。

これからは創作活動を学び、豊かな人生にしようと決めた。子供の頃図画工作は全く駄目だったが、アートスクールに通って、油絵や水彩画を習い始めた。文章ももう少しましになるうと思いい、誘われてOBペンクラブに入った。世田谷美術館でのボランティア活動もやっている。

最後の手術から、五年経過した。がんセンターの医師は満面に笑みを浮かべて言った。「もう大丈夫です。卒業です。おめでとうございます」。最初の手術から八年経っていた。「五年後生存率十五パーセントを生き抜いたんだ」。生きていることを素直に喜んだ。家族の献身的努力と医師団ほか多くの人の支えがあったからだと感謝している。一旦は死ぬことを覚悟した身である。「後はおまけの人生だ。絵や文章にも一層努力して取り組みよう」最近がんを患った人たちから相談を受けることが多い。そのとき必ず伝えるのは「今やがんは不治の病ではなく、直る病気であること。先のことは心配しても仕方がない。今この瞬間がんと闘う強い意志をもつこと」である。

さあ、「おまけの人生」を仲間とともに楽しもう。

こんな年だった

都甲 昌利

毎年、その年の世相を表す漢字一字を、京都清水寺の管長が墨で大書する行事が行われている。昨年の漢字は『北』だった。日本と世界が振り回された漢字だ。それに倣って言えば、私の場合の漢字は『病』だ。

昨年の正月にインフルエンザをこじらせ、高熱を出し意識朦朧、妻に付き添われ救急車で行きつけの虎の門病院に搬送される有様だった。

救急車の担架で病院の救急治療室まで運ばれる。直ぐに当直の医師が診断、体温を測り点滴をする。体温は三十八度と高かった。急性肺炎であろうと診断された。レントゲンで胸部の写真を撮り応急処置が済むと病室に運ばれる。二人部屋に入れられた。仰向けに寝たまま点滴を続ける。点滴液に加えて抗生物質も注入される。約一週間は食事摂れず点滴生活だ。点滴には生存するた

めのすべての栄養素が含まれているので生命維持には差支えないそうだ。

胸部には異常はなかった。血液検査も正常値を示した。毎朝、血圧と体温を測る。担当医も三日おきに体調を聞きに来る。この時分かったことだが隣の患者は肺がんだった。手術をしなければならかなり重症な患者だった。

幸い私の肺炎は落ち着き、点滴から普通の食事がとれるまでに回復した。しかし、嚥下能力が衰えているので、誤嚥性肺炎を引き起こさないために流動食だ。

おかずにもすべてにとろみが付いている。実に食べやすい。主食はおかゆだ。朝、昼、晩とろみの食事が続く。誤嚥患者用の流動食だ。

人間食べれば必ず出さねばならない。ベッドから車いすで看護師さんがトイレまで連れて行ってくれる。気の毒なことは夜中である。一人で行くことは禁じられている。必ず看護師さんが付き添わねばならない。少し体力がつき一人で杖を使用して歩いて行けるようになっても看護師さんが付き添う。途中で転倒するのを危惧するわ

けである。全く頭が下がる。

ある程度体力が回復してくると車いすから歩行器にかわる。立つて歩ける歩行介助器である。これを使用し病院の廊下を歩かされる。杖をついて歩けるようになったがトイレに行くときなどは依然として看護師付き添いである。

長い間寝ていたため筋肉が減少している。リハビリが始まる。地下にリハビリセンターがあり、専門の理学療法士が指導してくれる。車いすでセンターまで運ばれ訓練を受ける。最初は両手をバーにつかまつの歩行訓練だ。百歩、二百歩と歩数を増してゆく。徐々に歩数を増やして二百歩程度になると、次に筋肉増強のため足首に重さ三キロの鉛の板を付けて、片足ずつ上げる訓練だ。十回ワンセットで三セット行う。終り頃になると筋肉の疲労が溜まるが、息も弾み苦しくなってくる。リハビリ室の壁には「苦あれば楽あり」と書かれた紙が貼つてある。患者はこれを見ながらリハビリに励むわけである。こうした過酷な訓練のお陰でかなり自力で歩けるようになった。

退院の許可が下りたのは、血液検査の結果、異状がないことが判明した後である。

今手帳を見ると入院が二〇一七年一月三日、退院が二月十一日であった。約二か月に及ぶ長い期間であった。この間、妻や甥、姪、友人たちには大変お世話になったし、迷惑をかけた。

十年前に私は急性突発性ウイルス感染症という白血球が減少する病気で十日間入院をした。適正な処置により回復した。今回は肺炎と診断され入院を余儀なくされた。医学の進歩により私は生き延びた。しかし、身体的能力は極端に落ちている。ものを食べるのにも誤嚥しなかと気を遣い、歩けば転倒しなかと心配になる。物を拾うにも一苦労である。万事につけそんな具合で加齢というものはとんでもなく厄介なものである。

人生百年はめだたいなどと言っているがとんでもない重荷に感ずるだけである。認知症にでもなったらさらに悲劇である。こんな苦痛から早くおさらばしたい。

老人の健康保険

玉山 和夫

私はこの二年ほどの間に入院を繰り返した。その間健保が病院に支払った費用は五百万円にもなったが、私が実質負担したのは百万円足らずであつて、残りの四百万円は後期高齢者医療制度が負担してくれているのである。

しかしこの医療制度の財源の五割は国の負担、一割は加入者の負担、残り四割は現役が加入している健保組合が支援金として払っているようで、現役世代の健保の掛け金に含まれ給料から天引きされている。若い世代に負担を掛けているのは心苦しいことである。

何故医療費が高くなるかという、その大きな原因として「延命治療」が広くおこなわれていることがある。家族にとっては親には一日も長く生きてもらいたいというのは当然の希望だが、親によっては点滴治療を受けるのは苦痛なことだということが見逃されている。

苦痛を訴えることも出来ず半死半生で生かされているのは親にとっては望ましいことではなく家族に経済的負担をかけるだけだという思いも強い。

延命治療の代表的なものは栄養剤の点滴であるが、これは入院すればほとんど自動的に始められ、点滴をやめてくれとお願いしても医師からは「殺人罪として訴えられる」と言つて許可されないであらう。

現在の高額医療制度では一度限度額をこえた人にはそれ以上の追加はなく、一般の三割負担の人に対しては1%の追加がある。これを3%に増加し一割負担の人には1%、低所得の人に0.5%を追加する。そうすれば医者が高価な薬を使う時には患者の了解をとる必要が出て経済観念が導入される利点があり医療費の圧縮につながるのではないかと考える。この制度は「後期高齢者」にのみ適用したらい。

これまで薬剤費や処置の内で「延命治療」とみなされるものの自己負担額を三倍とすることも考えられる。これは三割負担の人には延命治療については九割負担となるが、現在の健保法を大改正しないで実施できる利点がある。

ある。

これによって療養型病院の患者が大幅に減る可能性があるが、経営の合理化によって対処する必要がある。現役世代にとっては天引きされる保険料が減ることは望ましいことである。

近い将来に六十五歳以上の老人の数は大幅に増えると予想されているので、後期高齢者医療制度の大幅な改訂は避けて通れない。この案のような老人自体には影響の少ない改定が望まれるのではないか。



自然と情報

市川 忠夫

二〇一八年は非常に大事な年だ。明治、大正、昭和、平成と歩んできた近現代日本が、あと一年余りで「新しい時代」になるからだ。明治や大正の頃はまだ生まれていなかったのだから、昭和から平成に変わった時のことは、よく覚えている。重たい空気の中で迎えた新年が、一週間後には平成に変わった。多くの人々は昭和を悼む気持ちはあっても、「新しい時代、平成」を考える心境にはなにくかったように思う。

しかし、今度は違う。平成を反省し、新しい時代を考える期間を一年余りも与えられたのだ。

平成の三〇年間に明確になった極めて重要な課題が二つある。一つは「自然環境の問題」であり、もう一つは「情報環境の問題」である。どちらも、日本だけではなくグローバルな問題だ。

自然環境の問題は多岐にわたっている。地球温暖化による異常気象や生態系の変化、排気ガス・重金属・プラスチックなどによる空気・土壌・海水の汚染、さらに遺伝子組み換え農産物の人体への影響、等々である。

これらの問題は皆、先進国の科学技術が生み出したものだ。科学技術の主作用にばかり気を取られ、副作用まで頭がまわらなかった結果であり、このまま進むと人々は地球に住めなくなる。まずいことに、発展途上国の人々までが、先進国と同じ道を歩もうとしている。

情報環境の問題は、IT（情報技術）のこの三〇年間の急速な進歩と普及による。三〇年前には何億円もしたコンピュータの機能・性能が、今や自宅の机上にあり、また電車の中で手のひらにのっているのだ。三〇年前は料金を心配しながら国際電話をかけていたが、今や無料で地球の裏側と音声・映像を送受できるのだ。しかし、「便利になったなあ」と感心ばかりしてはいられない。子供たちは外で遊ばなくなり、大人たちはネット炎上やフエイクニュースに振り回されている。

I.Tの主作用「便利さ」は確かに実現できているが、その副作用はよく分かっている。祖父さんの脳も、自分の脳も、孫の脳もあまり変わっていないのに、脳へのインプットだけが、桁違いに増えていいのだろうか、と心配になる。

心配ばかりしていても、問題は解決しない。何かよい対策はないだろうか。二つの問題は、個人の問題ではなく公共の問題である。そうすると、「税」に着目した対策が必要なのでは、と感じる。

自然環境の問題では、まずしなければならないのは、人々が物質・エネルギーの使用量を減らすことだ。次は、自然環境の問題に関係した科学技術（特に副作用の影響や回避の研究）を進展させることだ。

例えば、消費税を、一〇％ではなく、一〇〇％にして、物質・エネルギーの消費を減らすのはどうだろうか。入ってきた税金は三分割して使う。①自然環境の問題に密接した科学技術の振興に、②現在発生している自然環境

の問題の対策に、③本当に生活に困っている人々への援助に向けるのだ。

情報環境の問題の心配点は、現実の体験が少なくなり、仮想の体験が圧倒的に多くなることだ。その影響はまだよく分かっているが、自身の経験から推し量ると、人の心を大きく歪めるように感じる。これを解決するためには、税として役務を課し、現実の体験を増やしてもらうようにするのだ。

例えば、一五～三〇歳の間に五年間、五五～七〇歳の間に五年間、生涯に二回、一〇年の役務提供を義務付けるのだ。弱者支援、子供・超高齢者支援、海外支援、災害対応、国防などに取り組むことによって、人々は「仮想ではない現実の心」をよりよく理解できるようになる。

二〇一八年は、明治維新から一五〇年という節目の年である。一五〇年の半分を夢中で生きてきたが、今や体や頭の衰えを感じる歳になってしまった。しかし、心は全く衰えていないと思って未来を考えてみた。

二度目の大嘗祭

森田 晃司

今上天皇の御讓位が決定しました。二〇一九年四月三十日をもって平成は終了し、新天皇陛下の誕生に伴って年号も新しくなり、御即位を祝う大嘗祭は同年の十一月に予定されています。筆者にとっては平成二年に続く二度目の大嘗祭を拝見する機会となりそうです。

最も大切な宮中祭祀とされる新嘗祭の起源は古く、飛鳥時代には既に始まっていたようです。明治五年の改暦以後は、新暦の十一月二十三日が新嘗祭の日と決められ、戦後は勤労感謝の日と改称されて今日に至っています。

しかし、明治以前は旧暦霜月の二番目の卯の日と決まっていた。冬至の前後となる寒い時期で、収穫祭としては遅過ぎ、むしろ新しい年の豊作を祈ることに重点があったと考えられています。新穀を天皇陛下が皇祖神の天照大神と共食され、稲の再生と国家の安寧を祈られるのが新嘗祭だったようです。

大嘗祭は新天皇が初めて迎えられる特別の新嘗祭です。この祭祀にて新天皇は、神座にて真床追衾を被ってお籠りをされて天皇霊を、また、皇祖神と新穀を共食されることで稲の穀霊を前天皇から引き継がれると考えられている大切な儀式です。

日本列島からは一万六千五百年前の世界最古の土器が出土し、また、一万二千五百年前の世界最古の漆器も出土しています。各地の遺跡の調査から縄文時代には世界最先端の文明・文化が花開いていたらしいことが次第に明らかになってきています。

一万年以上に及ぶ縄文時代に比して、大陸から伝搬したとされる稲作文化の列島における歴史は、高々二千年百年です。しかし、灌漑稲作が必要とした、多くの人が力を合わせる共同作業と勤勉な集約労働が、縄文文化の上に注入され、今日の日本社会の礎となりました。

稲作は日本文化の象徴であり続けましたが、第二次大戦後の日米両政府による反米キャンペーンにより洋食が奨励され、米は虐げられてきました。昭和三十五年以降

日本の食卓は世界で例をみないほどに劇的に変化し、現在ではパンが米を凌駕し、肉が魚の消費を上回っています。稲の消費は減り続けています。

しかし、幸いにも、海外では寿司、おにぎり、日本酒がブームです。海外の人気により、米関連食品が日本国内でも見直される機運が出てきました。稲作文化、そして新嘗祭にも再び注目が集まると期待できそうです。

ところで、神道では「おいる」とは、「お」は丁寧語、「い」は生きる或いは命、「る」は存続を表すと理解されています。つまり、「おいる」とは立派に長く生き続けられる、といった意味合いになるようです。

神楽や能でも翁は神に近い人と考えられ、老人は敬愛され、長寿は祝いの対象でしたが、今やすっかり希少価値がなくなり、邪魔な存在になっています。

人類の祖先の遺骨は世界の各地から多数発掘されていますが、老人の骨は現生人類からしか出て来ないそうです。現生人類から始めて老人が現れ、その老人が幼子の教育に当り、そして現生人類が人種間の競争に勝ち残り

たと考える学者もいます。

太古まで遡らなくても、江戸時代までは、大老、老中、若年寄と要職を表すのに老いの字はつきものでした。

年齢を加えるに従って人の体力は衰え、我欲も減退してきます。すると若い時には見えなかったものが見えてきます。目には見えない真実も見えてきます。

長く健康で生き続けることによって、若者に道標を与えることができるかもしれません。

皇居では、毎年、天皇陛下お手ずからの「お田植えとお稲刈り」が行われています。稲を大切にする皇祖神の教えが今も守られ、生きる知恵が綿綿と伝えられてきています。大嘗祭は天皇霊と穀霊を大切に引き継ぎ、生きる知恵を、つまりは文化を絶やすことなく伝えて行くための貴い儀式です。

先人がかけがえのないものとして大切に引き継いできた日本文化とは何か。老人にはどんな役割があるのか、大嘗祭を、老いの知恵を絞ってみる良い機会としたいものです。

嬉しい贈り物

川口 ひろ子

「物を持たず、多くを語らず、世の片隅でひっそりと朽ちてゆく」つもりでいたが、思いがけず長生きし昨年五月、なんと八十歳の誕生日を迎えてしまった。

丁度同じ頃『悠遊』第二十四号の合評会が開催され参加した。会の終了間際に「専門家を迎えて本の作り方の説明会があるので関心のある方は」とのお知らせがあった。私は昔から書くことが好きで、その結果溜まる一方の作文の山を眺めて思案に暮れていた。そこで吸い込まれるように手を挙げてしまった。

そこからは一気呵成だ。気が付いてみると私は企業OBペンクラブ諸先輩が設えて下さった自費出版のためのレールの上に乗っていた。

書き溜めたエッセイや音楽サークルのホームページに投稿した感想文、写真などをかき集めて整理し、編集、

校正、印刷は毎栄社にお願いした。こうして小冊子『私はフォルトゥーナ』は昨月中旬に完成し、全く予想もしていなかった傘寿の記念出版となった。

しかし、問題はその中身だ。今回は「エイヤー」と恥を承知で体当たりしたが、落ち着いて読み返してみると、文章に深みがなく表現も甚だ未熟だ。残念、無念、後悔の念は深まるばかり。そこで少し前にご主人の自費出版を手伝って多くの経験をした親友K子に愚痴ってみると意外な答えが返ってきた。「こういうことは一人でウダウダ考えていても前には進まないの。周りが盛り上がってワーっとなると一気に出来るものなの。これでいいの！ 大成功よ」。全くその通りの展開であった。

『私はフォルトゥーナ』は、前半が自分史、後半は音楽エッセイという構成で一七八ページ、縦十八cm×横十三cm、望み通りの可愛らしい本に仕上がった。

「フォルトゥーナ」はモーツァルトのオペラ「シビオーネの夢K(ケッヘル)126」に登場する女神の名前だ。若書きの失敗作といわれ人気は薄く、録音も少ない

が、私はこのオペラが好きだ。不本意な宮仕えへの鬱憤や遠い異国へのあこがれなど、青年モーツァルトの切実な思いが一つひとつの音符から立ち上がってくるような気がするのだ。劇中「幸運を願うなら私の髪を素早く掴んで」と歌うのは僥倖の女神フォルトゥーナ。颯爽たる歌声に憧れて私はこの名前をハンドルネームに頂戴した。ネット仲間を私をフォルトゥーナさんと呼ぶ。

今回のことを「いい年をして物好きだね」という声が多いのではないかと恐れていたが、OBペンクラブの皆さんや音楽の仲間が一樣に前向きに受け止めてくださったのは嬉しかった。

まずは「企業OBペンクラブ」のホームページに「会員の新刊書のご案内」として表紙の写真付きで掲載して頂いた。更に、私をOBペンクラブ会員に推して下さった日先輩の推奨文にリンクするという凝ったものだ。身に余る光栄、生まれて初めての経験だ。ホームページ広報担当のSさん有り難うございました。

お読みいただいた方々から「健やかに長生きして素敵

な感性で人生を楽しみましょう」など、様々な心温まるお便りをいただいた。戦中戦後の暮らしに關しての同世代の皆さんからの共感のコメントも嬉しかった。空襲で赤く染まった遠くの夜空を呆然と眺めたこと、八月十五日の玉音放送は雑音が多く聞き取れなかったが今夜からゆっくり寝られると喜んだこと、新聞紙のように本の体をなしていない教科書のこと、他いろいろ。

そして年末には友人たちの主催による忘年会兼出版記念のランチパーティも賑やかに行われた。

思いがけず、傘寿を祝い出版を歡ぶ沢山の贈り物を頂戴してルンルンの私、次は米寿だ。

「多くを語らず、ひっそりと……」の人生設計からはかなり外れてしまったが、頂いたご厚意に感謝し、せっせとコンサートに通い、文章修行に励んで、豊かな老いの日を楽しんで行きたい。



朝粥記

大森 海太

イヤ、早いんですね。こないだ古希の祝いをしたと思ったら、もうじき七十代中頃ですか。気持ちの上では若いころと変っていないつもりですが、肉体的にはどうも……。髪は抜け背中は曲り、物忘れはひどいし、この前もカミサンが「あなた最近ホントにぼけてきたんじゃない？」というので、心配になっちゃいますよね。

以前なにかの講習で、認知症は脳ミソに蛋白質のゴミが溜まることによる、これを防ぐには有酸素運動などのほか、精神の活性化が重要であると教わりました。つまり朝からボーツとテレビなど見ていないで、いろんなことに興味をもつて、キーワードは「ときめき」だそうです。色恋に胸をときめかすのはまことに結構ですが、ちよつと無理なので除外するとして、ここではリタイア以降、今もときめきを感じながら毎朝調理している「朝粥」についてご紹介いたしましょう。

発端は現役時代、出張先の中国や東南アジアのホテルで朝粥を経験して、二日酔いにも好いし自分でもやってみようかということからでした。その後アレコレ変遷を経ましたが、今は玄米をベースに、小豆、黒米、押し麦、ハトムギ、ソバの実などを加えた雑穀粥です。前の晩、玄米をミキサーで軽く砕き、小豆ほかと一緒に萬古焼の土鍋で水に浸しておいたものを、翌朝火にかけて四十五分間炊きます。最初の十分は強火で沸騰させ、そのあと中火から弱火で煮ていくのですが、この火加減が中々の難物で、ちよつと油断すると吹きこぼれるし、程よいとろみのお粥に仕上げるのは、職人技、私はこの道十年近く、名人の域にあると自負しています。

さてお粥と並行して、各種サイドメニューを整えるのがかなり忙しいのですが、先ずトッピングとして、青菜（主としてモロヘイヤ）のおひたしをみじん切りして、たつぷりの削り節と和えます。このほか小魚（ニボシ）、梅干（南高梅）、ワサビ漬け、ラッキョウ、アサリの佃煮、コンブの佃煮、鮭のほぐし身、イブリガッコ（沢庵の燻製）、

キムチ、もずく酢などを皿小鉢に取り分けます。また長芋をすりおろし白ダシで味をつけ焼き海苔を散らします。が、とろみがあつてこれは中々好いものです。言い忘れましたが、このあとも含めすべてカミサンのと二人分です。

次に納豆ですが、昔の運動部の合宿朝飯の伝統を踏まえて、先ず何も入れずによく先練り、続いてカラシとタレを入れ小葱のみじん切りを加えて練りあげ、ウズラの卵を落とし込んで出来上がりです。

味噌汁は市販のティーバッグ（鰹節、うるめイワシ煮干、昆布など）でダシを取り、長ネギと豚の三枚肉（予め茹でて冷凍庫に保管）を実とし、仙台または信州の赤味噌と秋田大豆の白味噌と九州の麦味噌（すべて酒精無添加の生きている味噌）をあわせて漉し入れます。

デザートは金胡麻をすってヨーグルトに混ぜたものや、カテージチーズにプルーン、クルミ、カシューナッツ、南京豆、オリーブの実を添えたもの、最後に生姜紅茶（黒砂糖入り）を淹れて全工程が完了です。

ハイご苦労さん。ここでようやくカミサンと一緒に朝食となり、そのあとまた台所に戻って今度は皿洗い。

申し遅れましたが使う食器は二十余点、どれも器道楽の小生のお気に入りばかりです。白洲正子さんは「器は使うほど輝いてくる」と言われたそうですが、洗ったものをフキンで拭いてやつてるうちに、妙に満ち足りた気分になってくるもんですワ。

というわけでゴルフのない日は毎朝二時間近く、ゆつくり新聞を読むヒマもないのですが、色々工夫して頭を使うし、もちろん手先も使うし、なにやら心もときめくし、それにこんな豪華で栄養バランスのとれた朝飯は（食材にして三十余）ほかにそうないんと違いますか。

このあと風呂掃除（こちらは洪々）を済ませるとあとは自由の身！本を読んだり鉢植えの手入れをしたり散歩をしたり碁打ちに行ったり（おっと、OBペンクラブを忘れたらあかん）、夜は外で飲み会か家で晩酌ということで、マ、元気でやつてられるうちですナ。

長生きするなら絵にかぎる

首藤 静夫

「誰ですか、足を三本描いたのは？ モデルは女性ですよ」

「このオッパイ、左右の向きが変だね、ピカソではないんだから」

講師がジョークを飛ばしながらコメントしていく。

町の絵画教室に入講して間もない頃、女性ヌードのクロッキーをやらされた。モデルの立ち姿、寝姿などを五、七分で速写する。習字用の毛筆ゆえ修正は効かない。時間がくると生徒の作品を壁に並べて講師が一口ずつコメントして次のポーズへ移る。

冒頭のコメントは私が頂いたものだ。細部にとらわれ、気づいたら足が三本になっていた。終了後、緊張感とストレスでどっと疲れが出た。四十歳半ばのことだ。

人物画はバランスが難しい。少しの間違いでも見る人に違和感が生じる。風景画と異なり、ごまかしが効かな

い。次回はヌード、と聞くとさぼるようになり、そして風景画に次第に偏っていった。それから二十有余年、今年は古稀。いつまで絵を続けるか。

「画家は長生き」という。根拠のある話ではないが、そんな気がしないでもない。長生きの言うところを聞くと――

一つは絵を描く時の精神状態。雑念なく制作に没頭できるから作業後のスッキリ感が精神衛生に良いという。もう一つは身体面。スケッチに歩き回る、制作中も常に体を動かす、描いては下がり、また描いては下がり、この動作が血行に良いという。

確かに机やパソコンに向かって悪い姿勢で長時間呻吟する文筆家よりは、はるかに健康的だろう。

ところで、富士山の画家は沢山いるが、葛飾北斎、横山大観、片岡球子は特に有名である。この三人が揃って長命だ。球子は百三歳、北斎、大観が九十歳近くまで生きた、しかもみんな現役のままで。

三人の描く富士は全く異なる。北斎の尖んがり富士に對して大観のは端正な富士だ。球子の富士は「おぼはん」が笑い転げたようだ、まるで自画像のように。しかし印象が強烈だ。

球子は二人の大先輩に比べるとデッサン力がなかったのか芽が出ずに苦労した。展覧会に幾度も落選し、「落選の神様」と陰口をたたかれた。しかし、先生はあえて矯正せず、下手だが個性を感じさせる彼女の画を尊重し激励したそうだ。彼女は、技巧に乏しい分、自分の感性を信じ自分流の表現方法を見つけることに執着した。彼女の才能は忍耐する力、努力を持続できる力にあったのだろう。画家として認められだしたのは五十歳半ば、富士に着手したのは六十歳である。この「富士」シリーズと次の「面構」（つらがまえ）シリーズ等で名声を不動のものにした彼女であるが、八十歳近くになって裸婦に初挑戦、死ぬ寸前まで描き続けた。

三人に限らず長命な画家は多い。小倉遊亀、奥村土牛、梅原龍三郎、中川一政、東山魁夷などずらりと並ぶ。海

外も同様で、シャガール、ピカソ、ミロ、モネなどなど。

一方、文筆家には短命な人が目立つ。思想家、小説家、詩人などは知的作業の繰り返しだ。憤り、不安など内面の叫びを追求して脳髓をすり減らす。極限まで自分を追いこみ、発狂、自殺する例もある。短命でないまでも途中から筆を折り、悠々自適を決めこむ人も多い。シビアーな分、長く続かないのだろう。

画家の方は最後まで絵筆を握り続ける人が多い。それができるジャンルであるが、やはり気迫と生命の充実感が備わっていればこそであろう。

百歳まで描き続けた球子の裸婦を見た。彼女らしい迫力が伝わってくるが、最後の一枚は女人が仏となって横たわっているような静謐な絵になっていた。

古稀などといつてはいられない。屈辱の裸婦に挑戦してみるか、今度は足の数の間違えないようにして――。

囲碁と私

村谷 卓一

白と黒の二種類の石を交互に木製の盤に置いてゆくゲーム「囲碁」との最初の出会いは、中一の冬休みだった。雪の季節は外遊びが儘ならない札幌、同級生のI君に誘われ、放課後は毎日のように理科準備室で小型の碁盤を囲んだ。中三秋の修学旅行にも忘れずに持参し、二泊三日の往復のバスと列車の中ではずっと碁盤に向かった。たので、霧で有名な摩周湖の水面が七割ほど見えたことぐらいしか覚えていない。引率された校長先生もお好きなので、帰りのバスの中で楽しく教えていただいた。

「碁敵」のI君とは違う高校に進んだため一時中断し、再開したのは高二の夏だった。受験勉強の気分転換に良いという屁理屈をつけて、家の近くにあった碁会所に通い始めた。取敢えず七級と認定され、週二〜三回通った。高校卒業時には五級と二段階上がっただけで、伸び盛りの年齢としては平凡なスピードだ。

首尾よく入学できて最初に向かったのは、囲碁部の部室だった。入部希望者はそれぞれ上座に座った先輩に試験碁を打ってもらう。星目（最初から九か所に黒石を置くという最も大きいハンディ戦）で二局打ち、一勝一敗で七級と認定され、囲碁部の水準の高さを痛感した。お相手のS先輩は、その年の全国学生十傑戦に準優勝された強豪で、石を打つ速さと手つきでも圧倒された。

囲碁の合間に授業に通い、春夏秋冬の休みの約十日間の合宿に参加し、一年で初段、卒業時には四段になった。年四回の支笏湖畔での合宿では、徹夜で囲碁に興じた。碁盤・碁石と共に米と肉も札幌から持参し、交替でカレーライスやジンギスカン、豚汁などを作った。残ったご飯は夜食のおにぎりとして平らげてしまう。バスで札幌に戻ると、会う女性が一人残らず美人に見えた。

一九六九年から、新宿の生命保険会社に入社し、十年余に及ぶ独身寮生活が始まった。東京の電車の乗り降りによくやく慣れてきた八月に入り、会社の囲碁部から呼び出しを受けた。ナンバー二とナンバー三の先輩お二人と対局したが、連敗し「集合研修でお疲れでしょうから」

と慰められる。翌週のナンバー一に連勝できて何とか大
学囲碁部レギュラーとしての面目を施すことができた。

会社員生活では、何度も囲碁の恩恵を被ったことがある。
社内でも交渉事に当たる場面も、随所に囲碁仲間が
いてこまごまご配慮いただいたことが少なくなかった。

また、八十年代初頭に、ニューヨークへ赴任した際も、
囲碁部の先輩からIBM本社勤務の囲碁好き幹部を紹介
された。ほぼ毎週、指導碁↓夕食をご馳走↓下宿先まで
車というサイクルだった。紹介された大学教授や企業幹
部と拙い英語で会話を交わしたことも懐かしい。

独身生活の余暇を活用して、碁会所にも出かけて武者
修行？を行った。中には対局相手と意気投合して、今打
った碁を肴に杯を交わすこともしばしばだった。

十年間ほど法人営業を担当した際に囲碁に助けられた
ことも多く、未だに何人かとは賀状を交わしている。

二〇〇四年に勤務先が合併したが、囲碁で顔見知りな
何人もいて、早速碁盤を囲み懇親し、定例親睦会を始め
た。全体の層が厚くなった効果で、五人一組の職域団体
戦での対戦クラスがBからAの最高位に上がり、「早く

も合併効果がでてきたね」と周りから冷やかされた。

定年後も嘱託勤務などの合間を縫って、会社OB会の
事務所まで週二回ベースの対局や指導を継続している。年
二回、一泊二日の熱海合宿も継続中だ。

六十年近い囲碁人生を振り返って、手前味噌で誠に恐
縮ながら囲碁の効用を纏めてみたい。

第一は、囲碁を通じた人間関係が、結果的に仕事面に
役立ったことだ。

第二に、しかも最もありがたいのはストレス発散に極
めて効果的だった。ひとたび碁盤に向かえば、それ以外
のことはすべて忘れて囲碁に没入することができる。

第三には、健康維持面である。OB会で週二回囲碁を
楽しむメンバーの四割近くが八十歳代であり、何れも
若々しい。新宿まで電車等の往復、指先を使う運動や、
手段を考える脳の活性化によるものと考えられる。

第四には、経済的効果だ。ギャンブルに手を染める暇
がなくお金が減らない。用具がコンパクトで一生使用で
きる。碁会所に行っても一日居て千円程度と割安だ（毎
回の反省会に要する酒代はお忘れなくご用意を）。

ダメで元々

田中 みづえ

加速する物忘れを、どうにかしなくては。楽しくできる脳トレはないかしら。将棋は藤井クン・ブームに乗ったようでシヤクだし、駒の動かし方のルールが難しそう。そうそう、大河ドラマ『直虎』の政次様（ぶっちやけ高橋一生サマ）の囲碁を打つお姿がクール！ そういえば子供の頃、父の分厚い碁盤で姉妹と五目並べをしたなあ。石の白と黒の配色も私好みだ。

というわけで、ネットで交通の便がよい囲碁教室を調べて出掛けた。ここで、囲碁は碁盤の縦横の線の交点に交互に打った黒石・白石で囲んだ領域（地）の広さを競うものであり、石の数を競うものではないということを初めて知った。相手の石をびったり包囲すれば取り上げることができ、逆に、このような場所に石を置くことはできない。ルールはこれくらいで、あとはどこにでも自由に打てるらしい。これならやれそうだな。

私たち初心者には縦横七本線の七路盤（通常は十九路盤）に向かい、前半一時間はプリントで基本を学びながら練習問題を解き、後半一時間は講師と対局する。生徒の間を回る若い（！）講師たちは、生徒が直前に打った石を一瞬で読み取る。この記憶力は囲碁の賜物か。そして「地を作るコツは仲間の石を繋げることです」などと、奥深い言葉で丁寧に優しく教えてくださる。私は「脳も精神も鍛えられそうですね。がんばります！」と意気揚々、囲碁の歴史の本や問題集を買い込んだ。

囲碁は四、五千年前の中国に発し、五、六世紀に日本へ伝わり、平安時代には宮廷で大いに遊ばれた。戦国の世では信長・秀吉・家康・政次様らは盤上で戦略を練り、明治時代には大久保利通ら政治家が精神力を培った。そして今や、我ら庶民の脳トレの助っ人となったわけだ。

しばらくして九路盤になると、脳トレは思いの外、ハードになってきた。わざと自分の石を取らせてから、より多くの石を取り返す「ウツテガエシ」や、相手を盤の端まで追い詰めて取る「シチヨウ」など、先の先、いや、さらに先まで読まなくてはならない。だが、私の脳とき

たら、一手先でフリーズ。「脳が動きません」と訴える私に講師はのたまった。「ダメで元々、とにかく打ってみる事です。そのうち脳が覚えてくれますよ」

「ダメ(駄目)」は囲碁用語で「打つ価値のない場所」。

だが、ダメ元でやってみることに価値があるのだ。そしてダメだとわかったら「棄子争先」、つまり、さっさと諦めて先へ向かう。だが、諦めるのは得意だが、向かう先がトンチンカンの私は、生徒同士の対局でも、なかなか勝てない。私は「先生、どうすれば上達しますか」と繰り返し、講師は「実戦を積むのみです」と繰り返し。それならば、と家でネット対局を試みた。勿論、レベルは最低の「1」と自己申告した。それなのに相手は容赦ない。あつという間に包囲されている。無音の大笑いが響き、画面に「続けますか?」。即座に、荒々しく、「NO!」をクリックする私であった。

『直虎』に政次が登場した頃に始めた囲碁だが、政次が死を迎えた頃、やっと十九路盤になった。一生サマ・ロスを埋めようと、心新たに碁盤に向かう。だが、いざ三六一目のどこへ打っても自由となると、途方に暮れる。

「肝心なのは大局観」と言われても、小さい所ばかりに目が行く。先人たちが導き出した「定石」も、なかなか覚えられない。

はたまた、攻め合いで出てくる「コウ」だの「セキ」など厄介な形に頭を抱える。千年も前、空蟬は「待つて、そこはセキよ。こちらのコウが残っているわ」と、相手の軒端萩に、さらつとアドバイスしているのに。恐るべし古の姫君たちよ! 紫式部も、さぞかし囲碁が強かったことだろう。

ところで、古の世では碁を打ちつつ雅に語らっていたと想像されるが、今は対局中のお喋りはマナー違反だ。これが、囲碁を続ける女性が少ない理由の一つかも。教室の私たち初心者コーナーでは生徒の半数は女性だが、上級者席の大部分は中高年の男性で占められている。皆さん、寡黙に何時間も打っていらっしゃる。

さて、私の囲碁はいつまで続くやら。まあ、ダメで元々のんびり続けよう。強くなれなくても、物忘れと口数が少しでも減ればそれで良し。

私の「My Way」

鵜飼 直哉

昨年、私は八十歳になった。その日から自分の残り時間を気にするように変わった。同時にこの八十年間を総括する機会でもあった。「人生の総括」で思い起こすのが名歌「My Way」だ。その冒頭部分をみってみる。

“And now, the end is near

And so I face the final curtain、(中略)

『俺の人生も終わりが近づいた。そして最後の幕空き待っている。(中略)俺は充実した人生を送ってきた。俺はすべての道を一つずつ旅した。俺は自分のやり方でやり通したのだ』(意識・鵜飼)

私自身のサラリーマン生活四十二年間を振り返ってみると、最も充実していたのは四十歳前後の米国駐在期間だった。「与えられた任務に不明確な点があるときは、自分の責任範囲で直ちに実行する。不明な点を上司に尋ねるのはその後である」は常に「自分のやり方」であった。

富士通の情報処理部門の最高責任者池田敏雄常務が自ら率いて一九七一年に始まったA・プロジェクト(富士通の次期大型機を米国のベンチャー企業アムダール社と共同開発する)の現地責任者として、私は池田さんの一挙手一投足をつぶさに見た。

アムダール社は最初の二年間ほどは順調であったものの開発遅延に端を発した資金繰りの悪化が発生した。池田さんの献身的な働きにより、プロジェクトにやっと光明が見えてきた矢先、池田さんは突然他界されてしまう(享年五一歳)。半年後、一号機を完成しN A S Aへ納入した同社は以後順調に業績を延ばした。

池田さんの急逝後、私はアムダール社の取締役となった。だが「米国企業の取締役とは何か」を誰も教えてくれない。書店に行つて関係するテキストや演習ノート類を買つてむさばり読んだ。弁護士事務所や外部取締役たちを頻繁に訪問して議論した。その経験が実戦に役立つ場面に幾つも遭遇した。こんなとき池田さんならどうされるだろうと解決策を探した。次々に疑問が起きたが、すべて自分自身で答を見つけないならなかった。

「私のやり方」はこんなことにルーツがあるようだ。

当時の私のノートに「池田ドクトリン」とした文章が書いてあった。以下は全部で三条の内の第一条である。

(第一条)『決めるまでは部下も上司も平等だ。対等に

議論せよ。一旦決めたら俺が責任をとる。決

めたあとは文句をいわずに従え。(後略)』

四十五年経ってもそのまま使うことができる。私にとって池田さんが「最初にして最後の上司」である理由だ。

「心から敬愛する方にお仕えすることができて、主人にとっては幸せな会社務めでした」と家内は表現する。

歌はここから二番に入る(三番と四番は本稿では無視)。

“Regrets, I've had a few

But then again, too few to mention” (中略)

『後悔することだって幾つかある。しかし細かく言うに値するものはほんの僅かしかない。俺は自分

でせねばならないことは例外なくやってきた。俺のやり方でやり通したのだ』

“When I bit off more than I could chew

But through it all, when there was doubt

I ate it up and spit it out, (中略)

『俺は口に入れたときに食い千切れないほど問題が大きければ、そいつを飲み込んでから吐き出してやる。これが俺のやり方だ』

ここは私の好きなところだ。

私だって悔いが残った覚えが何回かある。

サラリーマンの生涯の夢は、一流企業の役員になることだと言われている。私はそれを果たせなかった。それも、あと一步というところまで来ていながら。仲間たちが続々とゴールインするのを黙って見ていただけだった。

原因は私の不用意な発言にあったようだ。その一因は私が「空気を読む」や「忖度する」などに疎く不器用だったからか？もしもそうなら子どものころからもっと本(小説など)を読んでおくべきだった、と後悔する。

毎年十一月十四日になると、私は家内と一緒に神田の亀命山光明寺へ行く。池田さんのご命日なのだ。いつも「池田さん、今年もいろいろありがとうございました」とだけ言って帰ってくる。

ギターをとりて爪弾けば

志村 良知

老後のクオリティ・オブ・ライフを破壊する原因の筆頭は老人性痴ほう症（認知症）だという。

認知症予防には楽器の演奏が良いらしい。神経が集中している指先を左右別々かつバラバラに使い、加えて楽譜を読んで指の運動に翻訳して指令を出すという脳の活動もある。

学生時代クラシックギターのサークルに入って四年間精進した、楽器もある、そうだからだよ、とギターを再開することにした。しかしこれまでの五十年間はギターは断続的に、それも触った程度、教則本の最初でさえ怪しい。

愛器は国産のハンドメイド品。卒業後五年ほどした時製作者の直弟子という人に偶然会い、楽器を預けてそれまでの十年間の摩耗や狂い、傷などの修理をして貰った。その時「これで一生使えますよ」と保証された。丈夫な

ハードケースに入れて保管してあるので、弦さえ替えれば完璧である。

クラシックギターの演奏スタイルは椅子に腰掛けて左膝に楽器を載せる。その左足には演奏時かなりの体重がかかるから、高さ調節ができる丈夫な専用足台が必要になる。譜面もテーブルにでも置けば良いように思うが、譜面台を立てた方が格好良い。ピックは使わず、生身の爪で弾くので爪の手入れも重要である。薬局で爪成形専用のやすり、DIY店で一番細かい紙やすりを求める。とはいっても、ここまでの投資はナイロン弦一セット六本含めても合計一万円位、楽器さえあれば再建の為の投資は大したことはないのである。

学生時代はタッチは硬いが華やかな音のハイテンション弦を使っていたが、見栄は捨て、柔らかに押さえやすいローテンション弦にする。調弦には古典的手法ではA音の音叉を使うが、現在ではチューニング・メーターという文明の利器がスマホの無料アプリで手に入る。六本の弦それぞれに音の高低が視覚化され、あつという間に調弦完了。これで演奏の準備は整った。譜面は初歩の教

則本から演奏会用の難曲、はたまた『影を慕いて』まで山ほどある。

「昔取った杵柄」が通用するのはギターの構えと左右の指の弦へのタッチの角度まで、その指を動かすのはまったくままならない。それらしい音を出すには教則本の最初から単音、和音、半音階、音階、分散和音、と段階を進めながら反復練習するしかないが、昔出来たことが出来ないのはもどかしい。それでも繰り返しているうちに左手指先にギター胼胝ができてくる。すぐ疲れて力が抜けてしまう左手小指も頑張れるようになってくる。

ある程度さまになってくると上を目指して先生に就こうか、という気持ちと、気ままにやりたいという気持ちのせめぎ合いになる。二年生の春、発表会デビューで弾いた二長調のメヌエット、「十六分音符がもたれる」としごきあげられたのは若き日の思い出としては良いが、今となってはああいうのは御免だとも思う。

三年生の時、六曲からなるギター組曲二短調に挑戦し

た。毎晩のように下宿に押しかけて教えを乞うた当時大学院生だった先輩は名手として尊敬されていた上、面倒見が良く、慕う後輩が集まった。この先輩は七年ほど前に他界してしまったが、彼が集合をかけてくれたかのように、その葬儀への参列がきっかけで昔の仲間が年一、二回集まるようになった。

彼らの顔を見るとそれぞれがどんな曲を弾いていたかが浮かんできく。どの曲にも思い出があり、ギターを構えると気持は二十歳に戻り、窓ガラスに映る姿に、五年の歳月を越えて、ステージでスポットライトを浴びたあの日がちらちら被る。仲間のギター復帰の話もちらちら聞こえてくる。ここは一番、先生に就いて修行研鑽し、スペインの現代の名器ホセ・ラミレスを買って、もう一度あのステージを目指すか。



人は世につれ

富岡 喜久雄

「人は世につれ 世は人につれ」との成句があるが、元は「人」が「歌」らしい。どちらも世の変遷と共に変わり行くことを言ったものだろう。

今回の『悠遊』の共通テーマが「我ら高齢世代」というので題材を考えていたら、二つの文章が思い浮かんだ。

一つは『日の名残り』であり、二つには以前OBペンクラブから配布された『十七歳の青春』なる先輩方の文集だ。

『日の名残り』はノーベル文学賞を受賞した日系英国人のカズオ・イシグロ氏の作品の一つである。偶々、英文卒の友人が早速『NEVER LET ME GO』私を離さないで』の中古英語版をカナダから買ったというので英語版との躊躇はあったが、当方もOBペンクラブ会員である、読まねばならぬと借りてみた。読み始めたら内容もだが英文の所為もあるう、どうも興が乗らない。

そこで最寄りの本屋で翻訳本の『日の名残り』を買っ

てみた。読み始めると翻訳が秀逸で、英文ではその差が分かりにくい身分や男女間の言葉の使い分けが見事だし、主題の興味もあつて一気に読んでしまった。勿論英語版も買いついた。

物語は、大英帝国の浮沈という時代の変遷による雇主の品格の差、雇主と執事との関係の変化に加え、雇人間の儚い恋情を絡めたものだが、主人公である執事の必要以上の慇懃さと、頑なまでの職業倫理が読み手を刺激し、また古き良き時代へのノスタルジーを感じさせるのだ。

作者が日系だから武士道の奉公道にも影響されたかなどと愚考もしてしまう。主人公である執事の、絵に描いたような慇懃、謹厳、実直な振る舞いを自らに課す非合理的な縛りが、素直な表現、行動を妨げているもどかしさ等が、何故か懐旧の情を誘発させるのだ。

然し英国の凋落と米国の経済的台頭によって有閑貴族の館も米人実業家の手に渡り、品格を重んじる生き方も、気取りのない庶民的明るさの時代に代わってゆく。

だから主人公も無理してアメリカ的軽いジョークを学ばねばならなくなってくる。

「偉大なる執事」としての矜持も、時代の変遷と共に時代遅れのものになってゆくのだ。

正に「時の流れと人の身は」である。

一方、『十七歳の青春』の作者群は我が企業OBペンクラブでは最高齢群に属する人達だろう。功為し、名を遂げたか否かは別としても、同じく企業人として戦い、戦後の日本を此処まで持ち上げてきた仲間としては同世代として括れよう。それでも激動の時代だから経験の差はある。学徒動員での工場労働、軍事教練、女学生への神聖化した憧れ等が彼等より一まわり遅れだった筆者にとっては、未経験故の好奇心と感傷が胸を打ち、名文揃いと思えたものだ。筆者の時代、国民学校一年生でも整列登校し、教師が通れば歩調を揃え、「カシラ・ミギ」の掛け声と共に敬礼させられた。だがその僅か一年後には、敬礼させ、あどけない生徒にピンタを張っていた教師は臆面もなく民主主義を語り、任命制だった級長はホームルームなる時間で生徒間の選挙となった。幼さ故に抵抗感なく順応できたのだと思うが、それでも人々の変わり

身の早さに人間不信の種は残ったから、多感な十七歳の青春時代であつた執筆者達は如何ばかりだったろうかと想像する。やがて、そんな御託を言う間もなく我が世代は、弱肉強食の世界を生き抜き、戦後の復興と秩序の回復、輸出振興、外貨獲得と走り抜き、GNP世界第二位、ジャパン・アズ・ナンバーワンと言われるまでに日本を持ち上げた。そこで好い気になったら停滞の二十年。

その後、世代の価値観は大きく変わった。今や日本の経営の根幹だった終身雇用も企業内組合も価値を失い、非正規労働なる雇用の流動化と働き方改革で、「ガンバリズム」は罪となり、ビジネスマンはAIと職場を競い合う時代だ。若者は将来に希望を見出せず、SNSで「死にたい」と書き込む始末。今や再び、我ら「悠遊組」の出番が来た。嘗ての「樂觀主義」と「やる気」でペン持つ時を一部割き、世直し社会貢献の為、世に出ようではないか。そしてPPPとして団結しよう。最後のPはパーティーだからピンピン党である。

さすれば日本も「借金大国」脱出だ。

後はPPKとなろうとも、待つは楽園美酒の国。

最悪のプラン

内田 満夫

長いあいだ途絶え勝ちだったクラス会が、現役をリタイアする頃から復活し盛んになるのは高齢世代の常らしい。

わが大阪府立S高校の一九六二年卒三年一組の場合も、還暦を迎える頃に会が本格復活した。たいていは地元、T市内を会場にして、ランチをとりながら、学校時代の思い出や、趣味や健康のこと、家族のことなど、あれこれ話題の花を咲かせて、楽しい談笑のひと時を過ごす。気の向いた者はそのあと、お茶やカラオケの二次会に繰り出す。今では毎年の開催を皆が心待ちするようになっている。

今年の幹事役を、神戸在住組のSさん、N君、私の三名で引き受けることになった。考えてみると、神戸を会場としたことはこれまで一度もなかったのである。神戸

チームがどんなプランを出してくるのか、誰もが興味津々の様子だ。初秋の一日、寄り合ってランチをとりながら話しあった。

私は自分の考えたオーソドックスなプランを提案する。ところが女性のSさんがなぜか、端から自分の知るK倶楽部の利用に固執してくる。N君はノーアイデアだったが、次第にSさんの案になびいてゆく。せっかくの提案なので、Sさんの主張する現地の検分にも揃って向かってみた。件の施設は異人館街の一角にあつて、広々とした敷地の中にレストランやホールを配する豪壮な洋館である。応対してくれた支配人ともSさんは顔なじみのようだ。在学中から見栄っ張りだったSさん。名門施設に顔の利くところを誇示したい、彼女の底意が透けて見える。

部屋の一角に立派なピアノがあつて、Sさんはこれにも目をつけた。N君のピアノ演奏をプログラムに入れると言い張ってきかない。彼がピアノの名手であることは誰もが知っている。その後チェロを嗜んでいるらしいSさんには、ピアノとのコラボの思惑もあるようだ。そう

いう出し物なら、地元のT市内でやったほうが皆が集まりやすいのだが……。

それに対して、神戸港の臨海商業施設・ハーバーランド内のバイキングスタイルのレストランを会場にしたかどうか、というのが私の提案だった。港全体が一望できる開放的な空間で、皆にくつろいでもらう。会が終わったら、あとは思い思いに過ごせばよい。会場周辺なら丸一日でも遊べるし、帰りがたらメリケンパークの方へ散策に向かつてよい。元町まで行けば、皆の大好きなカラオケ店もあるのだ。

在学中、私はN君とは特に仲がよかった。二案が出揃ったこんな時こそ、いっぽうの案にも耳を傾けてジャッジ役を務めて欲しいのだが、自分の得意わざが披露できるSさん案に満更でない様子で、まるで頼りにならない。早や具体的な日程まで持ち出して支配人とやりとりするSさんの、するがままにまかせている。

遠方から神戸に足を運ぶ参会者を、狭い空間に閉じ込めて、神戸をろくに楽しんでもらわずに帰すのだ。こうして二人に押し切られる格好で、幹事本位のプランがで

きあがってしまった。その点を詰るとSさんは、「幹事の特権だ」と言って開き直る始末だ。私も大人気ない。

こんな浅慮に賛同したと思われるのは片腹痛いので、幹事から名を外してもらうことにした。ほどなくしてSさん、N君の連名で開催の案内が届く。憤懣いまだ収まらぬなか、即座に欠席の返事を出した。

ところが日が経って腹立ちのほどばかりがさめてくると、気持ちも微妙に変化する。皆の顔を見たい思いが猛烈に募ってくる。久しぶりにN君の名演奏を聴くのも、豪華な空間を味わってみるのも悪くない、とまで思えてきた。つまらない意地を張ってしまったようだ。Sさんには、「最悪のプラン」との悪罵を投げつけたままになっている。浅慮は自分のほうだったか。

案内ハガキから私の名が消えたのを、誰も疑問に思っていないのだろうか？ 在学中はもちろん卒業後もクラスのリーダー格だったW君から、そろそろ連絡くらいあってもよさそうなものだ。そんなことを考えながら臍を曲げたまましていると、とうとう出欠の返答期限が来て、それが一日、二日と過ぎてゆくのだった。

抜け殻

児玉 寛嗣

生まれた時代、土地、あるいは、人種、貧富の差、地位、能力、性等に関係なく経験するものがある、それは「死」だ。しかも、皆、一回ずつ。これを権利と考えれば、これほど普遍的かつ平等なものはない。いくら科学技術や医学が進歩してもこの平等が覆り、金持ちなど一部の者が「死」を二度以上享受すること、あるいは経験せずに済みますことが出来るようにはならないだろう。

ある推計によると、地球に人類が現れてこれまでに、約千億人が誕生したとのことである。現在の人口が百億人弱だから、九百億人以上が死んでいったことになる。そのなかで高齢世代と言われるまで生きられたのはその極一部だ。この世に生を受けてもなにもわからない赤ん坊や幼児のうちに亡くなった者も多かっただろう。寿命を全う出来ず飢えや病気で死んでいった者、事故にあっ

た者、無念にも戦場で亡くなった者も多かった。

二十世紀に入った頃でも八十才以上生きた人はわずかで、長寿は非常に珍しかった。しかし、ここ数年では、八十才以上生きる人は六割近くにもなってきた。これは、死への準備期間が十分にあることを意味する。

姥捨て山という言葉がある。老人を軽視するようで悪い意味に取られているようだが果たしてそうだろうか。昔は生産性も低く、子供とは違ってこの先、生産に貢献する見込みもない老人を、長年扶養するだけの余裕はなかった。

また、その時代には「生きることとは即ち死ぬことだ。死を受け入れることなのだ」という死生観があったように思う。これは、若くして死ぬ人も多く、人の死を現実のものとして目の当たりにすることが普通であったからだ。

自分の子供でさえも、すべて成人まで生きられるということはまずなかった。年寄りも、「もうそろそろお迎えが来る。早く逝った人達に比べれば十分に生きた。若

い者に迷惑もかけられない」という心境になれただろう。

人間に限らず、動物は老齢になると、次第に食べる量が減り、苦痛を感じなくなるメカニズムが働き、死の準備を進めていくのが自然の理らしい。例えば、ある動物園で人気のあった高齢の象が餌を摂らなくなり眠るようになり死んだというニュースが話題になったことがある。

この象のように理想は老衰だが、それが難しいなら安楽死だ。その安楽死だが、「これから先、健康が回復する見込みがない」という条件つきであるが、オランダでは、医師が注射を使って患者を死なす、あるいは患者自身が体に致死薬を入れて自死することが合法化されている。

日本でも合法化して欲しいものだ。眠りと死との違いは、翌朝、目が覚めるかどうかだけと思えば死も怖くないそうだ。死を受けいれられるかどうかは、準備を整え自分の死に納得できるか否かだ。

これから毎日を理想の死の準備のために使おう。まず、寝たきりにならないこと。一見矛盾のようだが健康でい

ることだ。それには「転ぶな、風邪をひくな、義理を欠け」だ。次に身辺整理。思い出の詰まった品の整理をする。と。それも先送りしないことだ。自分では価値があると思っている物も他人にとってはガラクタと思う。趣味で収集しているものがあれば趣味のあう人にはやればいい。生きているうちに感謝されたい。

最後は、連れ合い、子供、孫やその他、友人との別れの準備だ。亡くなった母が八十を過ぎた頃、「もう子離れをしたから自分の事だけを考える。まして孫には親がついているのだから親がしたいようにすればよい」と言っていた。こんな心境に早くなることだ。

財産があるなら、どうするか処置も決めておこう。子供も含め誰にも迷惑をかけてはいけない。身一つになるだけ。唯一、残るのは遺骸だ。かつて、母の死に立ち会った弟が遺骸を見て、『セミの抜け殻のようだ』と言ったことを思い出す。遺骸は、あの世に向かって飛び立つて逝った後の「抜け殻」だ。近年、墓を作らないという人も多いが、墓がいのなら生前に用意しておこう。

サウイフ老人ニワタシハナリタイ

齊藤 征雄

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ

ココマデナントカアユンデキタ

ダカラ残リスコシノ人生モ

倒レルマデアユミ続ケル

欲ハナク

決シテイカラズ

マハリニ迷惑ヲカケズ

一日ニスコシノ菜ト飯ヲタベ

酒ハホドホドニシテ

イツモシズカナ氣持デイル

世ノ中ノアラユルコトラ

ヨクミキキシワカリ

飄飄トシテ受ケトメ

戦争ニムカフオモムキダケニハ

心ヲイタメ

小サナマンションニ

カミサント二人居テ

ベランダノ鉢植ニ心ヲイヤス

友ガ病氣ニナツタトキケバ

カナラズ治ルトハゲマシ

自分ガカカレバ

コワガラナクテモイトイヒキカセ

独リノトキハナミダヲナガス

キギヨウOBペンクラブデハ

仲間トナゴミ

八百字エッセイニセイヲダシ

ホトケノ哲理をマナビツツ

時々カラオケヲウタツタリ

俳句ヅクリニ苦吟スル

余命十年トカクゴシテ

元氣ナウチニト

世界ノ各地ヲタビシナガラ

イロイロナ人タチノ

イロイロナ生活ブリニ

目ヲミハル

オジーチャンノイキガイハト

孫カラトハレ

君タチノセイチヨウヲミマモルコト

アタラシイコトヲマナブキモチダト

ハニカミナガラ答ヘル自分ガ

ホホエマシイ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフ老人ニ

ワタシハナリタイ

行深般若波羅蜜多時

照見五蘊皆空

度一切苦厄

色不異空

空不異色

色即是空

空即是色

受想行識

亦復如是

是諸法空相

不生不滅

不垢不淨

不增不減

是故空中

無色無受想行識

(拔粹般若心經)

老人と車

金京 法一

老人は年齢相応に、運転免許証を返納すべきとの議論が盛んである。筆者も八十を超した頃から、車の運転には、その安全性につき疑問を持ち始めていた。なんとはなしに車から遠ざかり、冬場などはよくバッテリーが上がってしまい、サービス会社に救助を頼んでいた。

車を処分することを考えたが、どこへ持ってゆくか、処分した後、どうやって移動するかなど、くよくよと考えてしまう。

そうこうしているうちに、当時大学一年の孫が運転免許を取得したとの話が耳に入った。

とっさに思いついたのは、車を無償で孫に譲り、どうしても必要なときには乗せてもらうことであった。

その旨提案してみると二つ返事でOK、ただし、車の

所有者は今のままにしておいてくれという。保険会社に問い合わせてみたが特に問題はないという。結局、自動車税、自動車保険、車検費用は筆者の負担、燃料代、車体修理代、その他は孫の負担となり、墓参り等には車を出してくれることになった。

それから数ヶ月、長い間ほとんど手入れしなかった車は見違えるようになった。



自由テーマ



水彩画 安藤 晃二

昭和二十年に生まれて

木村 敏美

平成二十七年十一月、高校三年の時の同窓会があり出席した。皆古希を迎え、今までになく盛大だった。丁度戦後七十年目で、新聞やテレビでも大きく報道された。二十年生まれは極端に児童数が少なかったが、以後ベビーブームが訪れ、団塊の世代となって日本の復興を支えた。

ホテルでの同窓会が終わり、仲の良かった友三人と二次会に行った。久しぶりに逢い話は一段とはずんだが、途中で思いもしなかった事に気づかされる。四人中三人が、外地で生まれていたのだ。

一人が中国、もう一人は台湾、私が韓国の釜山、日本で生まれたのは一人だった。高校時代は勿論、結婚等でブランクはあったものの、それなりの付き合いもあったのに、古希を迎えるまで知らなかった。特に仲の良かった友が中国で生まれ、小学校にあがる少し前に帰国した

と聞き本当に驚いた。しかし当時の事はほとんど記憶にないという。

彼女の母親が九十一歳の今も元気で、会う機会があり話を聞いてみた。

両親は当時の満洲で知り合い結婚、彼女を身籠ったが、日本の終戦を知らされぬまま、ロシア軍が突然侵攻。父親が軍医として働いていた日本の陸軍病院に避難、彼女はそこで産声をあげた。昭和二十年九月の事だ。日本人のスタッフも残っていて、婦長さんが取り上げ、看護婦さん達がカーテンを引き裂いて、おくるみや肌着等も作ってくれた。敗戦の混乱の中、命の誕生は明るい希望を与え、生まれたばかりの赤ん坊は、母親が抱く暇もない程いろんな人達に抱かれ愛されたと言う。しかしその後中国の八路军軍に占拠され、医者が必要とした軍は彼女一家を帰国させなかった。捕虜ではあったが待遇は悪くなく皆親切だったそうだ。大勢の中国人の中で育った彼女は、両親以上に中国語を話し、踊り等も覚え、随分可愛がられたという。

帰国は、日本にいる彼女の祖父が八路軍に嘆願書を出して叶えられたが、終戦から六年たった。

陸軍病院で彼女を取り上げた婦長さんは、彼女の結婚式に遠くからお祝いに駆けつけてくれた。カーテンで作ったおくるみに包まれ、物心つくとき中国人に可愛がられ育った友。無邪気に中国の踊りを踊っている幼い日の彼女の姿が目につく。

しかしロシア軍が侵攻して来た時母親は、日本人が受けたさまざまな惨劇にも遭遇した。

優しく上品な彼女の口元から「どうしようもなかった、助けてあげられなかった」と苦しげに言われた言葉は忘れられない。

私は終戦の日の三日前に釜山で生まれた。敗戦を認めない父を残し、母は十一歳の長女、三歳の次女、生まれたばかりの私を連れて引き揚げた。上の姉はその時の事を覚えていて私によく語った。引き揚げ船に乗る時、階段がありアメリカ兵が立っていた。母は釜などの世帯道具を背負い、姉は私をおぶって、妹の手を引いていた。

階段を登ろうとした時、アメリカ兵がふいに妹を抱き上げ登って行ったので、さらわれた！と思ったそうだ。すると階段の上でニコニコしながら手を振って待っていた。それ以来姉は「アメリカ人はいい人だ」と思うようになったと言う。幼い子供を連れ、女ばかりで帰国しているのを見て不憫に思ったのだろうか。

父は帰国後十一年で亡くなり、母も今年で三十三回忌を迎えた。父も母も生きる事に精一杯で、多くを語らぬまま別れてしまった。

昭和二十年は、戦前でも戦後でもない。戦争という大きな激動の時代に翻弄され、必死で生き抜いた大勢の人達の中に両親や私達がいた。そして、それらの命は子供達や次の世代へと繋がって行く。その世界が、平和でいつまでも続くことを願わずにはられない。



金正恩の国連演説

池田 隆

二〇一八年九月のこと、今から金正恩の国連総会演説がテレビで実況放映されるという。スイッチを入れる。

昨年二〇一七年は北朝鮮が核実験やミサイル発射を繰り返し返し、核保有国になったと喧伝した。今年の春先には融和の姿勢を見せていたが、遂にこの八月に南太平洋へ向けての大陸間弾道ミサイル実験に成功。米国は北朝鮮に対し九月末までに全核兵器を破棄せよと最後通牒を突き付けている。世界中が注視する国連総会である。

金正恩はやおら演壇に上がると、各国首脳や代表者を前にゆっくりと話し出した。

「私は朝鮮民主主義人民共和国の代表として核拡散防止条約および核兵器禁止条約に加盟し、一切の核兵器を破棄することを宣言します」（会場どよめき）

「ただし全核保有国が両条約に加盟し、二〇二〇年までに核兵器廃絶を終えることが条件です」（会場シーン）

「今まで独断的に核兵器開発を推進しておきながら、とつぜん核廃絶宣言を行う経緯と理由を説明します。」

十九世紀に欧米諸国とその追従国で始まった資本主義、植民地主義、帝国主義、人種差別主義、民族主義は世界中に広まり、社会における諸格差を増大させました。そのアンチテーゼとして社会主義や共産主義が生まれます。わが祖父は共産主義のもとで民族独立を果たし、父もその路線を継承します。かかる星の下で生まれ育った私は考えました、自分は果して何をすべきかと。

米ソの冷戦は核兵器に対する恐怖心を土台に続きましたが、冷戦終了後も核保有国は自ら核拡散防止条約で核削減を約束しておきながら既得権益を護るために実行する様子を一切見ません。

核はあらゆる主義主張や思想宗教を越え、個人や国家の区別もなく瞬時に人類の生存を危うくさせる「絶対悪」です。今直ちに破棄しなければ、核兵器は世界の紛争地域やテロ組織に一気に広まります。核保有国の自主性に任せておく時間の余裕はありません。

ここで思いつきました。一旦わが国が核保有国となり、

その上で核兵器破棄の範を示す方策です。ただ事前に他国が私の真意を知ると効果が激減します。また核兵器開発には国民の総力が必要となりますが、国民全員に意図を納得させるのも至難の業です。やむを得ず『敵を欺くには味方から』という孫子の兵法になりました。

米国に対する恐怖心を国民に煽り、核保有こそが国家存続のための唯一の手段であると信じさせます。その開発資金を得るために徹底した経済統制を行って国民に窮乏生活を強いました。手段を選ばぬ情報統制や情報入手にも努めました。その過程で肅清人事や瀬戸際外交を行いました。これら全ては世界中の人類を核の脅威から救う目的で行ったのです。

冒頭で述べたように如何にしても核保有国に核保有を断念させねばなりません。たとえ超大国と雖も二百近い世界の国々が一致団結して、昨年わが国に課したような制裁を行えばどうでしょうか。非核保有国が条約違反の国に輸出入制限や出入国管理を行うのです。核保有が経済的に不利益になるようにしなければ、倫理感の乏しい超大国の今の指導者は決して核廃絶を行いません。

たしかに超大国を除外すると世界経済は一時的に混乱するでしょう。しかしわが国民が受けた経済的精神的苦痛に比べれば、決して耐えられない事はありません。人類存続のために耐え忍びましょう。

更につけ加えますが、常任理事国という不平等な制度を改めようではありませんか。また核廃絶が実現した暁には朝鮮半島の軍事境界線を撤去し、無条件で韓国との対等合併を実現させ、私は一切の職を辞する積りです」(会場は総立ち、拍手と歓声。その中には韓国、オーストラリア、カナダ、ドイツ、サウジ、イラン、インドなどの首脳の顔が見える。やがてフランス、英国、日本も立ち上がり、最後に中国とロシアが続く。トランプとネタニヤフは憤然として席を離れる)

テレビを見ていて思わず私も喜びの大声を發した。その自分の声で昼寝から覚める。子や孫が集まった元旦の午後に屠蘇で酔い、年末に見た一年の世界情勢を振り返る特集番組が頭から離れずに転寝をしたようだ。邯鄲の夢が正夢となることを願う二〇一八年の正月である。

繰り返される世界的愚行

野上 浩三

二〇一七年は、米、独、仏で極右的な動きが台頭したことで歴史に残る年となった。

独仏では辛うじて極右の進出は食い止められたが、アメリカではトランプ大統領が誕生し、全世界を驚かせる愚行を展開させた。

トランプ氏を勝利させた要因の一つは反対陣営のヒラリー・クリントンの不人気であったようである。それにしても、トランプ氏の大統領就任後の言動は大統領としての資質を疑わせるものであり、このような人物を大統領に選んだアメリカ国民の見識は疑われて然るべきである。

大統領就任後一年が経過してもなお具体的な公約は一つ実現されていない。実現したのは、離脱すべきでないTPPやCOPなどの国際条約からの離脱とホワイト・ハウスの人事くらいなものである。北朝鮮問題にし

ても腕白坊主の罵り合いの域を出ず、このままでは百万単位の犠牲者を出す核戦争に突入しかねない。

エルサレムをイスラエルの首都として承認したことは、支援団体のユダヤ人陣営との公約の実行とは言え、狂人の為せる愚行としか言いようがない。歴代大統領が堪えて堪えて先き延ばしにしてきたものをいとも安易に承認した。これでまた中東における民族、宗教間の争いが激化する。仲介者としてのアメリカの信頼が失墜したのみか、全世界にテロ行為を頻発させることになる。

思いつくのは Why did Japan do such a stupid thing as Pearl Harbor Attack? (何故日本は真珠湾攻撃のような愚行を行なったのか?) という質問である。

この質問は、二〇一三年の夏にアメリカの知人キングドン・グールド氏を彼の山荘に訪れた時に、彼が私に対して発したものである。この質問はその後ずっと私の脳裏から離れないでいる。

しかし、これらの二つの愚行の間には明確な違いが存在する。

真珠湾攻撃は七十六年が経過した現時点で考えると文句なしの愚行であるが、軍部が突出して行ったものであった。一方、トランプ大統領によるエルサレムに関する決定は民主主義が行き渡った時代の行為であり、如何に斟酌をしても世界史に残る愚行である。グルード氏に、*Why did American people do such a stupid thing as choosing Donald J. Trump as their President?* と聞いたならばどう答えることであろうか？

もう一つ疑問に感じたのが、トランプ大統領に対する安倍首相の対応の仕方である。

安倍首相は、二〇一六年二月のハワイに於ける真珠湾被爆七五周年記念祭において、オバマ大統領と「未来志向の合意」を取り交わすという偉業を成し遂げた。

しかし、その翌年早々にはトランプ氏が大統領就任するやいち早く祝福に駆け付けた。世界の首脳の眼には小賢しい追従者と映ったに違いない。エルサレムをイスラエルの首都として承認した際には、ほとんど全ての国の首脳が強烈な反対の意思表示を行なったのに対し、安倍

首相は無言を通した。同盟国であればこそ、反対の意思表示を行なうべきであった。

極東の小国であり天然資源に乏しいわが国にとって、欧米先進諸国と全方位型の外交に徹することこそ最も重要である。

人類の歴史は「動」に対する「反動」で動き、「反動」は「反動」のままで終わらない。

トランプ政権はオバマ政権に対する反動であり、一部の極端な信条を持つ支持者層の賛同を得て実現した。ロシアの関与も取りざたされている。この事に対する反動は必ず起きる。

二〇一八年に変わる前に、既に、トランプ大統領は日に日に追い詰められ、その命脈は細くなりつつある。

共和党の絶対基盤のアラバマ州では上院議員の補欠選挙で議席を失い、上院におけるマジョリティーの維持が困難になりつつある。アメリカのマスコミはトランプ大統領の弾劾裁判実現の可能性を報じ始めた。

歴史が漸く正常化に向かう兆しが見え始めた。

二〇一八年はその動きが加速する年であって欲しい。

続・混沌と迷路

大泉 潤

一昨年は「秦始皇帝と習近平」、昨年は「混沌と迷路」について述べた。いずれも隣国中国がテーマである。昨年の要旨は、日本は平和で豊かであるが、世界は残虐・貧困が残り、解決は容易でない。隣国中国は、米日に並び世界三大強国となり、益々強大化する。従って、日本の進路は、対米、対中関係の確立が重要になる。

米大統領選、中国全体会議を経て、指導者の政策、国の実態が一段と明らかになってきた。新聞をもとに、日本が影響を受ける中米両国の実態を整理し、「混沌と迷路」の先の明るい未来を探りたい。

米国は、政治劣化が進み、モラルが低下し、議会は分裂、政治暗闘がやまず、ホワイトハウスは一部機能不全に陥っている。産業も白人主義を巡り、議会が分裂し、批判が相次ぎ、過激化している。多数の移民も夢を打ち碎かれ、国全体に傷、不安が多い。労働市場にも異変が起き、

労働者には薬物が蔓延している。このような米国が「中国の偉大化」を早めるのではとの観測もある。

中国は、習近平の一挙手一投足に注目が集まり、細大漏らさず報道されている。「国が割れる恐怖」を原動力に、権力集中に腐心し、指導部から長老を外し、側近を起用し、二期目の体制固めに取り組んでいる。定年ルール変更により、毛沢東以来の党主席の呼称も可能となった。習思想の目指すものは、党主導の中国流資本主義と「新時代の中国の特色ある社会主義思想は中華民族復興に向けた行動指針」など党が一切の活動を指導する。

外交面では、「一带一路」を旗印に、西欧との貿易額を年率十五％に拡大し、アフリカにまでも延ばして、鉄道建設も計画している。一方南シナ海への進出は、その強引さが近隣諸国、日米との摩擦を生んでいる。

経済面では、国有企業の大部分が不正を行い、反腐敗へ異例の公表が行われた。監査の結果、石油化学、自動車、鉄鋼、造船など重要産業分野で売り上げ水増し数兆円などが公表された。また、過剰貯蓄経済の矛盾が拡大し、構造改革、経済減速、企業債務拡大、外貨準備減少

阻止などが指摘されている。従って、企業に対する「党の介入」が明文化され、上場数千社が定款を変更した。

軍は、人事を習派が掌握し、軍事委副主席を増員した。江沢民系は規律違反などで一掃された。

教育面では、指導力を生み続ける力として、共産党中央学校の下に、省の党校数十、市町村の党校数千が配置されている。

現体制に権力が集中し、五年後を見据えた布石の人事となった。習氏より若干若手の六十代が中央委員となり、盤石の体制となった。

習氏の手本は、中華人民共和国の創立者毛沢東にあるように思われる。毛沢東は二十八歳で中国共産党創立大会に参加し、十年後に中華ソビエト共和国主席となった。永らく侍医を勤めた李氏の文庫本「毛沢東の私生活」によつて、中国指導者の私生活を探る。毛は頭脳極めて優秀で、古今の典籍に詳しく、談話、演説に引用される。政治活動は、日夜面会、文書整理に深夜まで時を過ごし、寝る時間は短い。記憶力抜群で、出来事、会話を記憶している。私生活では水泳を好み、旅行の都度大河で泳ぐ

ことを最大の楽しみとし、深み、濁流の危険を顧みないので周囲は振り回された。一方、政治目的のためには人民の生命を軽んずること甚だしく、累計すれば数千万人が、戦闘、侵略、飢餓の犠牲になっている。

さて、日本はどうするか。

日本は、安倍一強長期政権のもと、国家財政は歳入を大幅に超過する歳出を継続している。憲法改正、子育て支援、人づくりと政府税調と米国仕込みの経済学者が旗を振つて、毎年十兆円を超す赤字財政を続けている。消費増税、歳出正常化を説く学者の声はかき消され世界から、奇異の目で見られている。「持続可能な財政・社会保障へ改革を推進せよ」が識者の意見だ。これによつて暗夜の灯台となる。



ベーシック・インカムの源泉

野瀬 隆平

シリコンバレーに拠点を持つIT産業の各社が、シンボジウムなどを開催して積極的にB Iの導入を後押ししている。B Iとは「ベーシック・インカム」のこと。基本所得保障とでもいうべき制度で、政府がすべての国民に一律に生活に必要な最低限の金額を毎月支給するといふもの。

B Iの考え方は前からあるが、なぜ今シリコンバレーでなのか。彼らの事業であるITや人工知能(A I)の分野での進歩が非常に速く、ロボットやビッグ・データと結びついて、社会や経済の仕組みが大きく変わると考えているからである。

このような変革から取り残される人たちが大勢生まれ、大きな問題とならない内にその弊害をなくすため、更に端的に言えば、自社に批判の矛先が向かわないように積極的に動き始めたのである。

現時点で彼らが抱いている問題意識は、

一、格差拡大で製品を開発しても買う人がいなくなる
二、自社が原因で社会問題を引き起こしたという世論の批判をかわしたい

三、B Iの導入により金銭の使途などについてのビッグ・データが収集し易くなり次の商売につながるなどであろう。

B Iといえば、かつてヒラリー・クリントン元国務長官も検討したことがある。大統領選挙の時の公約では、その財源として天然資源の採掘料、温室効果ガス排出の補償金、通信・放送に使う電波使用料などを掲げていた。世界的に見ると、すでに試験的に導入している国もある。例えばフィンランドでは、昨年一月から二年間の予定で無作為に選出された二千人の失業者に、月額560ユーロ(約75,000円)のB Iを支給し始めた。

ところで日本では政府が少子化対策や格差解消のためとして、幼児教育や高等教育に対する支援制度を導入しようとしている。大いに結構なことだが、社会保障制度

がますます複雑になり、かつどうしても不公平感が残る。

AIやロボットの導入により生産性が向上し、労働力は少なくてすむ。その結果、支払われる労働賃金の総額は必然的に小さくなる。国民全体の購買力と供給量のバランスが崩れ、益々デフレが進んでゆく。このような構造的な変化に対応するには、これまでの延長線上ではなく抜本的な制度改革が必要である。その一つの案として考えられるのがBIなのだ。

BIの導入に当たって多くの人が問題とするのは財源である。クリントン氏の例にあるように、ちまちまと財源をかき集めるのではなく、根本的に発想を転換させなければならぬ。

ずばり言うならば、

財源は「AI、ロボットが生み出す富」である。

変化の要因となったものに、源泉を求めるということである。これまでは、人間が働くことによって生み出された企業や個人の所得に課税して、それを財源に諸々の政策を実行してきた。

しかし、これからは人間と並んでAI、ロボットが富

を生み出す時代である。その成果はあまねく国民に分配されて然るべきだ。本来ならば、富を手にした企業や個人から税を徴収するのが筋だろうが、そんな面倒で抵抗に会いそうな手続きを経ないで済む方法がある。

それは、国がGDPに相応しい額の紙幣を発行し、直接国民に配ることである。これで、困窮している人たちは救われる。有り余るお金をため込んで使わない企業や個人がいる限り、インフレになる心配はない。

この政府紙幣の発行は少々突飛なように思えるが、歴史を振り返って見るといくつかの例がある。アメリカでは、一九六三年にケネディ大統領が発行している。それまでもリンカーンを始め何人かのアメリカの大統領が実行しているが、いずれも暗殺されている。背後に政府紙幣の発行で不利益を被る者がいるとうわさされている。少なくともアメリカでは政府紙幣の発行は政治家にとつて「鬼門」なのである。

さて、日本では誰が英断を下すであろうか。

アベノミクス万歳

鳥海 博

二〇一二年一月二日にアベノミクスが始まって五年経過しました（黒田・日銀総裁は半年後の翌年四月に就任）。耳にタコの出来るほど聞かされた三つのキーワード（三本の矢）は、①大胆な金融政策 ②機動的な財政運営 ③民間投資を喚起する成長戦略 です。結論から先に申せば、この経済・金融政策は高く評価すべきでしょう。

五年前の事です。「失われた一〇年」が一五年になりました。二〇年にも及び、いつ果てるとも知らぬデフレ状態でしたから、デフレ脱却が時の至上命令でした。【黒田金融政策】は「異次元緩和」と称されましたが、伝統的な金融政策（預金準備率、金利、市場操作）と決別し、マネタリーベースを基本とした金融政策（「非伝統的金融政策」）に切り替えました。お金をチョビチョビ出したんじゃダメ。必要性など考えずに思い切って出す。それがマネタリーベースを年間八〇兆円増やすという政策にな

って現れました。国債もドンドン買い入れ、今や日銀の国債保有残高は四〇〇兆円にもなりました。また、前任の三人の日銀総裁（速水、福井、白川）は、一旦金を緩めても直ぐに引き締めを意識して行動しました。日銀マンは「通貨価値の番人」を自認していますから、並べて『物価高恐怖症』であり、故なく市場にお金を出すとインフレになると頭から信じております。「お金を引き締める」と景気が悪くなる」などは二の次の問題でした。これに対し大蔵省出身の黒田総裁は、景気が多少良くなっても金融を引き締めません。「物価が二%、安定的に上昇するまではお金は出す」スタンスを崩しません。『小さな日銀から大きな日銀へ』です。

このお金のバラマキは、確かに効果がありました。「景気循環論」の山・谷で言えば、今現在、景気は拡大中で、一二年一二月から始まった景気拡大局面（アベノミクス景気）が一七年には、高度成長期の「いざなぎ景気」（一九六五～七〇年の五七カ月）を越えて、戦後二番目の長さになりました。これが今年の一二月まで続けば、日本の景気拡大は七年目に入り、〇二年二月から七三カ

月続いた戦後最長の景気拡大期間に並びます。なお、景気拡大の「期間」が長いとはいえず、その「水準」はGDPの成長率で精々年一％台と低いことは事実です。俗に「実感なき景気拡大」と言われる所以です。

お金のバラマキの第二の効用は「円安」です。七〇円台半ばまで進んでいた円高に日本の輸出型企業は苦しめられていましたが、この緩和で息を吹き返しました。（そしてその後一二〇円まで行きました）。第三の効果は株高です。日経平均で七、〇〇〇円台まで下がったものが、今現在二四、〇〇〇円近くです。五年で三倍の上昇です。投資家はホクホクで、消費も伸びようというものです。

あと幾つか、この五年間でいい方へ変わった事があります。一、四〇〇兆円だった家計金融資産が一、八〇〇兆円にも達しました。企業の余裕金も同様に増え、今や四〇〇兆円もあります。国が国民から借金したお金が「戦費」などのムダなものに回らず、家計と企業に溜まっている感じです。「国債残高一、〇〇〇兆円、恐れるに足らず」です。国家の対外バランスにも注目です。一九六〇年以降志向した「貿易立国」を上手く実現し、日本は「輸

出で食える国」になりましたが、そうこうするうちに「所得収支」でも黒字になりました。正に「お金持ち」国の投資パターンです。来日観光客四、〇〇〇万人時代ともなれば「サービス収支」も黒字になることでしょう。

まだまだあります。雇用に目を向けますと、失業率も史上最低（二％）ですし、有効求人倍率も有史以来の高い水準（一・五倍）です。日銀が株式保有に踏み切ったことも、先人には思いも寄らなかったことでしょう。ただ、これは株式の直接投資ではなく、ETFという間接投資ではありますが、今やその残高は二〇兆円を超えました。いうなれば日銀は日本最大の機関投資家です。

以上、いい事づくめなのですが、問題点も幾つかあります。財政再建はどうするのか？ 人口問題は？ 増大する社会保障費をどうやって抑制するのか？ マイナス金利はいつ解消するのか？ 日銀の出口戦略は？ 格差の拡大には世論が騒いでいます。

色々な問題点を一遍には解決できませんから、勤勉で英邁な我が国民に期待しましょう。

対待の論理

浅井 壮一郎

ナポレオンはイエナの戦いでのプロイセン軍の無様な敗退を見て、和平を拒否し、さらにプロイセン軍を追撃して粉砕し、首都ベルリンを陥落させて後に降伏を認めた。つまり戦略目標を拡大し、賠償要求を大幅に引き上げた。ゴールポストを動かしたのである。

中国の陰陽は西洋の「+・-」ではない。「+・-」は0を中心として逆方向に展開し交わることはない。だが陰陽思想は絶対的対立を避け、中をとって妥協することとを前提としている。つまり「自分の確信（思考行動基準）を新しい状況・思考と対立闘争させながら、新しい確信に変えていく弁証法」に似ている。従って中国人は交渉において当面の目的に対して、一歩進んだより厳しい目標を立てそれを主張する。交渉が行き詰ると「足して2で割る」方式で半歩下がる。ここで妥結すれば「半

歩の余剰」が生まれ、さらに半歩下つてもイーブン。これを「対待の論理」という。多くの場合、これを担保すべく知らぬ間に既成事実を積み上げる。

尖閣問題では経済的排他水域線上で知らぬ間に石油を掘削して既成事実化し、日本側の石油を取り込み、抗議されると交渉に応じ、一旦半歩下がって共同開発に応じた。次に尖閣領有権を持ち出し、尖閣周辺で軍事的圧力を加え、排他的経済水域の共同開発を反古にし、丸ごと一步を強奪した。次は沖縄領有の主張だ。中国の「対待の論理」の主張する第二列島線まで続くだろう。

北朝鮮は日本人を拉致し、人質として日本に援助を要求する。韓国は常にゴールポストを動かし、歴史を捏造し、要求を蒸し返す。最悪の「対待の論理」である。

筆者は退職後、早稲田大学に学んだ。そこでは朝鮮批判がタブーであり、それをやると授業が白けるのに驚いた。そんな中でイサベラ・バードの『朝鮮紀行』を取り上げたゼミがあった。其の時、『朝鮮紀行』の無様な朝

鮮人の実態に憤り、韓国留学生が「それはすべて日本帝國主義の仕業だ。それに対し、我が光復軍30万は敢然と戦い、独立を確保した」と主張した。これには筆者も驚き「我々には君達と戦った記憶はない。何時何処で戦ったのだ」と質問した。彼は言葉につまり、「教科書に書いてある」と反論した。つまり現代史ですら捏造なのだ。更に古代史は酷い。BC233年に始まる壇君神話を採用している。

問題は古代の三韓時代をBC3世紀に遡らせ、漢による楽浪郡・帶方郡設置を認めないことだ。そうなると魏志倭人伝も卑弥呼も存在しない。中国でも日本でも三韓時代はAD3世紀以降だ。日本では古代史は中国文献を使うが、朝鮮では『三国史記』『三国遺事』を使用する。これらの史書は13世紀に成立したもので、壇君神話は『三国遺事』に登場し、『三国史記』には登場しない。ここでも朝鮮の歴史は手前勝手な史料を使い、捏造し、しかも学会が公認する。それ以外でも韓国史は捏造が多い。彼らはそれを日本に認めさせ、それを根拠にしようとし、「歴史観を合わせろ」と要求する。

日韓交渉では、日本は韓国に対し賠償義務はなく、逆に資本収支は日本が遥かに出超で、日本の方に返還請求権があった。だが日本は日韓関係を考慮して、独立祝賀金として韓国国家予算の3倍の経済援助をしたが、実は韓国予算の半分は米国援助で、実質予算の6倍払ったことになる。しかも日本が投資した膨大な資産の返還請求権も放棄した。(李榮薫『大韓民国の物語』)

すると韓国は慰安婦問題を持ち出した。だが売春婦などどこにでもいる。そこで問題にしたのは「軍による強制連行」で、これにより売春婦を慰安婦と読み替えた。これに日本側で火をつけたのが中央大学の吉見義明氏であり、共産党員・吉田清治氏の「慰安婦狩りをした」という告白本だった。

背後に朝日新聞があり、在日韓国人の暗躍もあった。だがこの捏造も後に発覚し、朝日が謝罪した。その後も韓国のゴールポストずらしは変わらない。「对待の論理」の連鎖である。

消えた町―院内銀山

大月 和彦

秋田県の南部、山形県境に近い雄物川の源流の山の中に院内銀山の跡地がある。

院内銀山は慶長年間に開発され、江戸時代を通じて生野、石見とともに日本最大の銀山で、秋田藩の財政を支えた。最盛期の天保年間には人口が一・五万人ともいわれ、城下秋田をしのぐ大きな町だった

明治以降、経営が民間に移り、西欧技術の導入などで一時期には日本一の産銀量を誇った。その後鉱脈の枯渇などで衰退に向かい昭和二九年に閉山、三五〇年の歴史を閉じた。

施設、設備、住宅などは全て撤去され、人々は町から離れ、殷賑を極めた銀山町は瞬く間に廃墟と化してしま

った。跡地は深い森林に覆われている。航空写真を見ても町の痕跡はまったくない。多くの人が生活し、多量の銀を

生産した町が消えてしまったのだ。

往時の銀山の様子や人々の暮らしぶりは、いくつかの記録によって偲ぶことができる。

J R 院内駅に隣接する院内銀山異人館に天保期の銀山を描いた絵図（小貫家文書）がある。東西に流れる小川の両側に路地が縦横にはしり、長屋風の家がびっしり建ち並ぶ。高台にある大きな建物は山奉行の役所と寺社らしい。超過密な町だった。

天明年間に院内銀山を訪れた旅行家菅江真澄は、「大床、小どこ、とひぶき、灰吹き、床、石を打ち砕いて銀をとる金槌の音が谷にこだまし……。大勢の女が声をそろえて歌うのは箆上げ歌。砕いた鉱石を箆に入れ水から上げるときに歌うのである……。坑内は暗く、どれほど広く遠いのだろうか。湧き出る水が清く流れていた……」と採掘作業の様子を描いている。

銀山を抱え医師として銀山で生涯を終えた門屋養安は、天保年間から三五年間の日記を残し、町の様子を伝えている。

医師の仕事のほか、藩役人として山奉行に仕え銀山の運営に当たり、金名子など採掘業者や出入りの商人などと交際があった。家族のこと、役所の儀式や役人との付き合い、銀産出量の記録や坑内視察と督励、犯罪取り締まりなど役人の仕事をも記している。

正月、節句、盆、紅葉、月見など四季折々の行事に触れ、祭礼時に催される芝居や相撲の賑わいぶり、江戸や大阪からきた浄瑠璃や講談の演し物なども記録している。句会、花見やもみじ狩りも行われていた。

役所の行事や慶弔事での酒宴の記事が多く、詳しい。銀山では当時、蝦夷松前産の塩干物や由利本荘から運ばれた新鮮な魚介類なども食べられていた。

昨年春、銀山跡をタクシーで一回りした。院内駅から五km、狭い山道に入るときれいに積まれた石垣がある。銀山の出入り口「十分一御番所」跡。出入りする労働者や商人をチェックする関所。町に運び込まれる物資に課税する役所でもあった。当時頻繁に起った飢饉では、逃散した農民たちが流入するのをここで防いだという。

共葬墓地。苔むした墓石がびっしり並んでいる。銀山で生涯を終えた数知れない無名の人たちが葬られている。石見、越後など国名だけが刻まれた碑もある。

川沿いに進むとすぐ進入禁止の標識。辺り一帯に坑口跡があり危険だという。町を治めた山奉行所（御台所）の跡地は二〇〇坪くらいか。礎石の一部が残っていた。

住宅が密集していた町の中心部は、杉木立に覆われ葛や灌木が茂っている。橋脚跡や石段が残る廃寺の跡も。

鳥居をくぐり長い石段を登ると銀山の鎮守社山神宮―金山神社。銀山跡に残る唯一つの建物。藩主佐竹氏が奉納した金燈籠が残っていた。

年に一度銀山跡が賑わう時がある。九月二日の銀山祭りだ。湯沢市の院内銀山史蹟保存顕彰会が主催し、ゆかりある人が集まって銀山を偲ぶ行事。共葬墓地で法要と金山神社で神事を行った後、境内の広場で地元の小學生が神輿を引き回す。保存顕彰会の人たちが加わって踊りの輪ができる。賑やかな笛太鼓と子どもたちの歓声で、町がよみがえる一瞬だった。

日本の食肉文化考

大越 浩平

日本の食肉文化については、弥生時代の水田稲作定着以降、明治時代までは、食肉は盛んではなかったと漠然と教えられていた。日本は海に囲まれた平野の少ない山国だ。山には、熊、鹿、猪、猿、兎、狸、狐、犬等や鳥類が多数生息し、馬や牛は4世紀から5世紀に渡来している。それらを食さない筈はないと疑問だった。

近年、考古学の様々な研究が進み、古代の神々（人々）の貪欲な食肉の事実が明らかになってきた。

『日本書紀』のいわゆる神武天皇東征伝説に、神武天皇が熊野を経て大和までやってきたとき、その地の豪族が「牛酒」（しし）をもって軍勢をねぎらったと記されている。「牛酒」は牛肉と酒の事であり、一番の馳走だった。

また5世紀に実在した雄略天皇は、狩りを行い多くの獲物を得たが、生肉の調理人がいなかったのだから立腹したとある。生肉を細切りにして、酢味をつけた宍

膾（ししなます）は天皇の好物だった。そのころは宮廷専属の肉の調理人「宍人部」が置かれている。

農家では新春、年神様を迎え供物を供えて丁重に稲の豊穰を願う。その御歳神神話には、降雨や止雨を願う祈雨儀礼、害虫駆除等、多様な祈願儀礼が見受けられる。

儀礼の際には、御歳神に生贄の牛を屠り、牛肉を奉げ、神を祭り慰め、祈念して宴を開き食す。神は屠畜したての生肉が大好物であった。農民が神より先に牛肉を食せば、たちまちイナゴを大発生させる疫神でもあった。

食肉は、滋養と生命力と靈魂も取り入れられると信じて食した。儀礼時の屠畜は全国に及び、血肉を穢れとする意識は無い。渡来の殺牛祭祀が普遍化している。

天武天皇が（675）早魃を避け豊穰を願い、殺生禁断の仏教思想や儒教思想を挺に肉食禁止（牛・馬・犬・猿・鶏）を命じた。その後も様々な殺生禁止令が出された。このことは民間の多種多様な祭祀儀礼の国家体系化を示す。したがって民間の祭祀儀礼も変質せざるを得ず、食肉文化は表舞台から消えた。

然しながら、どっこい庶民は必需品として、また嗜好

品として食肉文化を守っていた。

江戸時代の旅行家、菅江真澄の『すわの海』には旧暦3月酉の日、日本最古の神社の一つ、諏訪上社の御頭祭に饗膳として、鹿の頭75が捧げられたことが記されている（現在は剥製だが、当時は血の滴る鹿頭だ）。

江戸時代の『社例記』にも猪・鹿の頭70余、他に掛鳥、掛魚が供えられた記述がある。これだけの量の饗膳を備えるには、多数の猟師の存在があつたに違いない。

諏訪社は狩猟、漁業の守護神社として北海道から鹿児島まで約2万5千社ある。その諏訪社の下す神符、「鹿食免」を授かった者は、鹿肉などを食することが許され、「鹿食箸」を使って獣肉を食すれば穢れることがないとされた。山と海の国日本は、自然の恵みを頂き、その肉は動物性蛋白質として極めて重要である。お上に殺生禁断を求められても、食肉のエネルギーとそのうまさから離れることが難しいのは当然の事であつた。諏訪社が全国に分布する背景には、全国の猟師の存在、肉食の慣行、肉食しても穢れはないとする、諏訪社の功德を求める多くの人々がいたのだ。

タブーとされた食肉の資料がある。「猿の肉を早く送って欲しい」「猿皮も欲しい」という手紙だ。猿の毛皮は、熊の毛皮3枚分に値し珍重された。猿を仕留める専門のマガギ（スネマガギ）もいた。

江戸時代の料理書には、熊、鹿、狸、犬、カワウソの調理法が紹介され、「山くじら」と描かれた獣肉料理店も紹介されている。信州大の佐藤先生によると、平安時代半ばまでは、鹿や猪の肉料理が天皇の食卓に上がっていることが史料で確認出来るという。

出羽の院内銀山、山奉行の部下で医師の門屋養安の日記には、当時の食肉の記載がある。熊、猪、鹿、青鹿（カモシカ）、兎、狸、鴨、雁、山鳥、鶉、白鳥、鶏等がしばしば食され、また牛肉が常食とされ、塩漬け、味噌漬け、干し肉、佃煮のほか、貝焼（すきやき）として食されている、とある。

古代以来、日本人の食肉文化は途切れていなかった。その痕跡は社寺の奉納演武や舞いにもみられるという。

荒波のなかの教皇ピウス

松浦 俊博

ここ数年、正月休みはローマで過ごしている。そのたびに、四大聖堂の一つでテルミニ駅に近いサンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂を訪れる。聖年の二〇一六年元旦の夕方に、教皇フランチェスコがここでミサをあげた。ミサを終えて出てきた教皇は観衆に「ボナセーラ」と呼びかけ、新年の挨拶を始めた。昼にもバチカンでスピーチを聞いたので、御利益が倍增するような気がした。

この大聖堂の地下礼拝堂に、イエスが誕生後に眠った飼料葉桶の木片が聖遺物として納められている。それに向かつて跪き祈りをささげる聖職者の大きな大理石の像があり、失礼だが邪魔だ。一体誰だろう。調べてみたら、一八四六年から三十二年間にわたり最長在位の教皇を務めたピウス九世だった。民衆の支持を得るために「聖母マリアの無原罪の御宿り」を承認したということで、この聖堂に置かれた理由が分かった気がした。

ピウスという名前はイタリア出身の教皇にしか使えず、現在までに十二人が該当する。この名前の教皇の時代にはイタリア近代史にとって重大な出来事が多かった。一八世紀最後の教皇ピウス六世はフランス革命軍に連行され、幽閉されて客死。続くピウス七世はナポレオンにより教皇領を占領される。次のピウスは一年半で逝去しピウス九世はイタリア統一運動を支援せず民衆の怒りを買いローマから脱出したが、その間に教皇領をイタリア王国に併合される。ピウス十世が亡くなる直前に第一次世界大戦が勃発。そして、ピウス十一世はファシスト党のムッソリーニとラテラノ条約を結んでバチカン市国を設立し、十二人目のピウスは第二次世界大戦に巻き込まれ、ナチスドイツを容認したが中立を保った。

ここで、大国の思惑に蹂躪された二人のピウス、つまり七世と九世をとりあげてみる。ピウス七世は、ノートルダム大聖堂で行われたナポレオンの皇帝即位の戴冠式で、出番がなくなっただ座っているだけという、ダヴィッドが描いた屈辱的な絵で有名である。フランスでは大革命の後半に、キリスト教は理性に反するものとして権利を

剥奪され、カトリック教会は略奪・迫害の対象になった。ナポレオンは、ピウス七世に利用価値があるとみると、一八〇一年に政教和約を結びフランスにカトリックを復活させた。この三年後に戴冠式での屈辱が起きた。勢いに乗るナポレオンは、ローマを含む教皇領をフランス帝国に併合し、教皇をクイリナーレ宮殿から連行してジェノヴァ近郊に軟禁した。教皇が領土を回復しローマに帰還できたのはナポレオンの没落後であり、終始彼に振り回された治世だった。

十九世紀初めのイタリアでは、教皇領は南北を分断する形で中部に横たわっていた。その中のボローニャやフェラーラには、教皇の依頼によりオーストリア軍が駐留していた。ピウス九世は、即位当初においては前教皇が認めなかった教皇領を突っ切る鉄道建設を許可し、出版・検閲の緩和など自由主義政策をとったので、人々から「彼こそイタリア統一を成し遂げてくれる」と期待されていた。しかし、フランス二月革命の後、豹変する。サルデーニャ王国がオーストリアに対して宣戦すると、自らの地位と教皇領を守るため、戦争を支持しなかった。怒っ

た民衆は教皇をクイリナーレ宮殿に軟禁したが、彼はナポリ王国に夜逃げしてしまふ。その間に教皇領はイタリア王国に併合される。その後フランスの助けを得てバチカンに帰還したが、ローマもイタリア王国に併合される。世俗権利を剥奪された教皇は「バチカンの囚人」と自称して孤独に過ごした。ピウス九世の埋葬地がマッジョーレ大聖堂ではなく、ローマの城壁の外にある地味なサン・ロレンツォ・フォーリ・レ・ムーラ聖堂というのも納得できる。

ピウス九世以降のバチカンは、生き残りを掛けて巻き返しを図る。世界最小の国で軍事力もない。しかし、全世界に広めたカトリックの巨大ネットワークを最大限に活用し、巧みな人権外交と人道介入戦略により大きな成果を上げている。また、プロテスタントや正教との関係を修復し、イスラム教・ユダヤ教との交流も進め、確固たる地位を築いている。東西冷戦の終結がポーランド出身のヨハネ・パウロ二世の活躍の賜物だったことは世界中に広く知られている。世の中の変化に合わせて絶え間なく進歩するバチカンのソフトパワーは素晴らしい。

近江商人と煉瓦蔵

矢澤 正二

私の祖父は近江の出身である。私は近江に足を踏み入れたことはないが、なぜか心が引かれる。近江が好きである。祖父は近江の東、日野町、日野商人である。私も近江商人の末裔であるという自負というか、片思いである。

戦国大名の蒲生氏郷は、近江日野の出身で幼い頃より利発な少年であつた。織田信長の下で楽市楽座の手法を学び、日野城下に楽市を奨励して商業を保護し、日野商人の礎となつた。

その後蒲生家が伊勢へ国替えとなり、家臣や多くの商人を伊勢へ連れて行つた。これが伊勢商人の始まりと言われている。

関ヶ原の戦いで石田三成の西軍に付いた大谷吉継、増田長盛、長束正家らの諸将はいずれも近江出身であつた。

武勇より計数に明るく、いわば管理能力にたけた経済官僚である。これは商人的素質を持った高麗の渡来人が近江に移住して、大いに力を伸ばしたと一致するだろう。

琵琶湖の東に位置する百濟寺ひやくさいじ、それは聖徳太子の建立とあるが、百濟寺という寺号からみて、この寺は渡来人系のものとして開創された可能性が高い。

ちなみに調布市深大寺は、六世紀になり畿内に住んでいた高句麗系渡来人が入り「高麗大寺」と呼んでいたが、やがて「高大寺こうだいじ」と略され、その後「神大寺しんだいじ」＝「深大寺」になつたという説がある。

近江商人は、大坂商人、伊勢商人とならんで日本三大商人と呼ばれる。そのうち近江泥棒、伊勢乞食と言う言葉があるが、江戸時代、江戸っ子は「宵越しの金は持たねえ」といつて粋がったものである。近江の人は商才にだけ、伊勢の人は勤儉に努めて共に商人として成功した者が多かったことから負け惜しみに言つた言葉であらう。

一方主家のいなくなったことが日野人に奮起をうながし、地場産の漆、日野椀、売薬をもって全国へ行商することが盛んになった。これは祖父が、静岡で代々漆器卸商を営む矢澤家へ養子に入ったことともうなずける。

祖父は明治十年の春、十二歳で涙をこらえ、弁当を背中に結び付け、身の回りの品を信玄袋に入れ、曾祖父に連れられて、矢澤漆器店に奉公に出た。その後認められて番頭となった。祖父は豪放、洒落を好み、常に明るく、世話好きで事業を大胆に拡張した。

近江商人の経営哲学として「三方よし」が広く知られている「売り手によし、買い手によし、世間によし」を地で行ったような人であったという。

我が矢澤本家は、静岡市内の中心七間町にあり、その巨大な煉瓦造りの蔵は、あたりを睥睨するものであった。(当時はそう思ったが今見るとさほどではない)

その煉瓦蔵が昭和十五年の静岡の大火と昭和二十年の空襲に焼け残った。特に空襲の後には、近隣の焼け出され

た人達の一時避難場所として大勢の人に使われたという。これは正に「世間によし」を実践したものといえよう。

私の子供の頃は、煉瓦蔵が従兄弟達との格好の遊び場であった。現在一階はブティックに改装されたが、二度の大火にもめげず現存している。建築当時としてはモダンであつたらう煉瓦造りの蔵は、静岡市の景観重要建造物に指定されている。今となつては、郷里静岡に生家がない私には、煉瓦蔵はせめてものの心の拠りどころとなっている。



静岡の大火の翌日、
火災残った煉瓦蔵

若狭の「お水送り」

浜田 道雄

奈良に住む人は「お水取り」が終わると春がやって来るといふ。

「お水取り」は毎年三月、東大寺二月堂が行う修二会のなかの行のひとつだ。修二会は仏の前で人々の罪過を懺悔し、清らかになって新年を迎える祈年祭としての性格をもつ奈良時代からの仏教行事で、毎夜松明が灯されるので「お松明」という名でも親しまれている。

この修二会中、三月十二日深夜に咒師が二月堂境内の「若狭井」から「お香水」を汲み上げ、本尊の十一面観音に供える。これが「お水取り」と呼ばれる由縁である。

だが、この「若狭井」には不思議な話がある。

天平勝宝四（七五二）年修二会をはじめた実忠は、その初夜に修二会の行法を守護してもらうため、「神名帳」を読み上げて諸国の神々を勧請した。しかし若狭の遠敷

明神（おにゅうみょうじん）は釣りに夢中になって集まりに遅れてしまった。それでお詫びとして、本尊の十一面観音に若狭の閼伽（あか）水を捧げると約束した。すると境内から黒白二羽の鶴が飛び立ち、岩盤が割れて霊泉が湧き出したという。これが今日二月堂下にある「若狭井」であり、井戸の水は若狭の遠敷川から送られてくるという。

そしてこの話に対応するように、小浜の神宮寺では毎年この「若狭井」に水を送る「お水送り」を行っている。

なぜ「お水取り」の「お香水」が若狭からの水なのか。遠敷明神のことはあるにしても、この話には若狭と二月堂との間にあるもつと深い繋がりが隠れているのではない。そんな疑問からいつか小浜を訪れ、「お水送り」行事を調べてみたいと思っていた。

それが昨年十一月「ペン川柳」の句会を金沢で開くことになったので、その帰りを利用して念願の小浜を訪れたのである。

遠敷明神はまたの名を若狭彦（彦火火出見尊）といい、妻神の若狭姫（豊玉姫）とともに小浜の遠敷川辺にある若狭彦神社二社に祀られており、「お水送り」を行う神宮寺は若狭彦神社の少し上流にある。

「お水送り」は元来は若狭彦神社の神事だったようだが、いつのころからかその別当寺であった神宮寺が修二会のみでやるようになったもので、寺からさらに二キロほど川上の白石の鵜の瀬で、二月堂の「お水取り」よりも十日早い三月二日に行われる。

その日、行事はまず鵜の瀬のさらに上流にある下根来八幡宮の「山八神事」からはじまり、やがて場所を神宮寺に移して修二会が行われる。

神宮寺の修二会も二月堂のものとよく似ており、はじめに諸仏諸神を勧請して人々の罪過を懺悔し仏の加護を願う法要、ついで大松明を灯して行う「達陀」（だったん）護摩法要があり、夜に入って松明行列を作って鵜の瀬に至り「送水神事」を行う。

「東大寺」と書かれた鳥居のある鵜の瀬では再び大護

摩が焚かれ、その火の揺らめくなか神宮寺の住職が送水の祝詞を読み上げて「香水」を川に注ぐ。この水が二月堂の「若狭井」に届くには十日かかるという。

この鵜の瀬にも不思議な話がある。

東大寺開祖の良弁僧正には相模あるいは近江の生まれであり、赤子のとき鷲にさらわれて二月堂前の良弁杉に引つかかっていたところを助けられたという伝説があるが、ここ小浜では良弁は「お水送り」をはじめの下根来八幡宮の近くの生まれだと伝えている。それ故「お水送り」には良弁の生家の子孫が今日でも重要な役を担っている。

また、二月堂の修二会をはじめた実忠についてもインドから若狭に渡ってきた人で、のちに奈良に行つて良弁の弟子になったと伝えている。

小浜には天平のころから二月堂との深い繋がりがあつたにちがいない。だが、それはどんなものだったのか、未だわからない。今回は謎が深まるばかりの旅となった。

五七五の思い出

松田 昌康

五七五といえば俳句と川柳だが、それらについて小学生だった頃の思い出がある。

一つは、私の母方の祖父の詠んだ川柳についてである。祖父は私の生まれるはるか前に若くして亡くなっていたので、私は写真でしか知らない。祖母が語ったところによると、祖父が通っていた中学校内で川柳大会があり、その時に祖父が詠んだ川柳が賞を得たという。その川柳とは、「とさじゅうを片手で掴む長曾我部」という、土佐を治めた戦国大名を題材にしたものであった。祖母の説明では、「とさじゅう」というのは、その当時の梨の品種だそうで、土佐全体を意味する土佐中と掛詞になっているとのこと。この話をする時の祖母の少し誇らしげに微笑むような表情が、今も鮮やかに思い出される。その祖母も、もう三十年以上前に亡くなった。

もう一つの思い出は、祖母の俳句についてである。村の公民館で夜に句会が開かれ、祖母も参加していた。十人程度が句を作って持ち寄り、宗匠が天地人（一席―三席）を選句して講評しておられたようだ。宗匠の実名は覚えていないが、俳号は菊一文字だったと記憶している。この俳号は、村に昔あった刀鍛冶の作る刀を菊一文字と言ったことに因んだと聞いている。

私が生まれ育った母の実家（私は疎開先で生まれた）は、岡山県の吉井川沿いにあり、鎌倉時代には吉井川を上り下りする船の交易で市が立って栄えていた（家の前の通りを市場通りといった）。一遍上人絵伝にも出てくるその市場には刀鍛冶も住んでいて、天皇家に献上される刀が作られたと伝えられており、刀の銘に、菊の御紋と漢字の一が刻まれた。そのため、そこで打たれた刀を菊一文字と言ったと聞いている。近くの備前長船の刀が有名だが、その前の時代である。

祖母の句はなかなか選ばれなかったようで、ある時、高校の教師だった父に、国語の先生に俳句の添削をしてもらうように頼んだようだった。そして、国語の先生に

添削してもらった句を句会で披露したところ、見事に天に選ばれたようだった。句会から帰ってきた祖母は「さすがは国語の先生じゃなあ」と言ったと記憶する。

ちなみにその句の上五は覚えていないが、中七下五は「……バスの尾灯は消え去りぬ」だったように記憶している。上五は、冬の季語だったと思う。この句から想像したのは、父が寒い夜に勤め先から一時間ほど掛かって帰ってきたバス停で、遠ざかっていくバスを見送りながら家に向かうという情景である。

私の手元には、祖母が使っていたはずの戦前から家にあつた歳時記があり、私の少年時代を偲ぶ縁となる品の一つになっている。

今は私も、フォト句会に参加していて、毎月の句会に向けて、祖母が苦労していたように五七五をひねり出すのに悪戦苦闘している。句会後の夕食会を楽しみにしながら。



母の新盆

三 春

長いトンネルを抜けると数十年ぶりの越後湯沢が待っていた。故郷に帰りたいと病床で言い続けながら逝った母の新盆を迎えるに相応しい地は、ここ以外にない。

従兄弟の家に泊めてもらう。各地から集まった一族郎党二十数名が昼間から囲炉裏端で宴を張り、幼児たちは家中を走り回っては笑い転がっている。暮れなずむ頃、ほろ酔い気分でお灯明を持ってぞろぞろと墓参に向かう。見知らぬ先祖の墓にも線香をあげて神妙に手を合わせる。母の実家はここは反対側の温泉街にあり、子供の頃は休みになると東京から飛んで行った。夏休みは川遊びに興じ、もぎたてのトマトや西瓜を頬張る。冬休みはスキー。狩猟と剥製作りが趣味の叔父は、溪流での山女魚や岩魚釣り、貂や山鳥の狩りに連れて行ってくれた。せっかくの温泉街なのに、祖父が掘り当てたという共同湯しか知らなかったが、数年前に町営温泉「駒子の湯」

ができた。駒子は川端康成の『雪国』の主人公である。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。信号所に汽車が止まった。向側の座席から娘が立って来て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷気が流れこんだ。(中略) 明りをさげてゆっくり雪を踏んで来た男は、襟巻で鼻の上まで包み、耳に帽子の毛皮を垂れていた。もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に吞まれていた。

この「信号所」は現在の土樽駅。清水トンネルの開通は昭和六年で、川端がそこを通って越後湯沢に行ったのが昭和九年というから、母が十歳の頃だ。後年、母は電話交換手として土樽駅に勤務していた。

「駒子の湯」のそばに、主人公島村と駒子が逢瀬を重ねたとされる諏訪神社を見つけた。

女はふいとあちらを向くと、杉林のなかへゆっくり入った。彼は黙ってついて行った。神社であった。苔のついた狛犬の傍の平な岩に女は腰をおろし

た「ここが一等涼しいの。真夏でも冷たい風がありますわ」「この芸者って、みなあんなのかね」「似たようなものでしょう。年増にはきれいな人がありますわ」と、うつ向いて素気なく言った。その首に杉林の小暗い青が映るようだった。

樹齢四百年の杉は今も天を突き刺し、「狛犬の傍の平な岩」も健在だ。モデルとなった芸者置屋「豊田屋」の場面ではこの地方の昔の典型的住宅が描写されている。

「うちへ寄っていただこうと思って、走って来ただすわ」「君の家がここか」「ええ」……駒子は低い石垣のなかへ入った。右手は雪をかぶった畑で、左には柿の木が隣家の壁沿いに立ち並んでいた。家の前は花畑らしく、その真中の小さい蓮池の水は縁に持ち上げてあって、緋鯉が泳いでいた。柿の木の幹のように家も朽ち古びていた。雪の斑らな屋根は板が腐って軒に波を描いていた。土間へ入ると、しんと寒くて、なにも見えないでいるうちに、梯子を登らせられた。それはほんとうに梯子であった。

母の実家もまさにこんな感じで、柿の木と池の鯉はど

の家にも共通していた。鯉こくや鯉の洗いは主人自らが調理する特別なもてなし料理なのだ。だが子供の頃からの私の好物は丸茄子の塩漬け。漬樽ごと小川で冷やせばいか旨味も食感も一段と深い。京都では加茂茄子、新潟では魚沼巾着と呼ばれる。濃い紫色のずんぐり丸い姿はまさに口を縛った巾着のよう。今日はこれを酒の友に。

従兄弟は定年退職してから農業に目覚め、米や野菜作りに精出している。「ベランダで茄子やトマトを育ててみたけど皮が硬くて」と相談すると、「化学肥料だけだとそうなるんさね、有機肥料をあげらっしゃい」とのこと。ついでに昔の人糞肥料の利点を語り、次は政府や農協の批判へと、飲むほどに酔うほどに話は尽きない。

帰りの車は大量の野菜や果物、コシヒカリなどあちらこちらの親戚からの頂戴物が満載で足の置き場もない。

母の供養が食料調達の旅に化けた感あり。

その時ふと思った。この新盆、果たして母は故郷に帰ってきたのだろうか。今頃は東京の家の仏壇を背に「私に来ることを知りながら何処に行っちゃったのよ、まったくもう!」とぼやいているかもしれない。

カミサマとホトケサマ

杉浦 右藏

何か困ったとき私たちが誰もが手を合わせて「カミサマ」「ホトケサマ」助けてくださいと念じた経験があると思います。この願いについて考えてみたい。

冒頭お断りしますが本記は宗教的意味と全く関係なく自論しますので誤解ないようにお願いします、内容は次の三点に絞ってみました。①カミサマとホトケサマは何処にいるのか ②なぜ祈るのか ③ウンとツキ。

そのカミサマとホトケサマは何処かに居るのでしょいか。「私の答えは何処にもいない」と考える。「宇宙・天地創造の主」を人間は心の本能としてカミの存在を「心」として信じる。人間動物の「脳の中に心の共有事象」として心の中にあるのだと思う。心は何処にあるのでしょうか。脳外科医の浅野孝雄先生のお話では脳外科手術するたびに手が震えることです。先生の著書は沢山あ

りますが、信仰を外して脳と心のエッセンスを頂くと「心」は何処にあるのか、答えは「脳」だそうです。脳は「受」視床下部と脳幹、「識」前頭葉、「行」運動領、「色」知覚領、「想」頭頂葉、から構成されるそうです。また、NHK連続放送「人体」からでも、今まで脳から指令を出すと考えられていたが、最近の研究から五臓六腑筋肉脂肪などの役割、それに連携して全ての構成物体が緊密に連絡を取り合って物質を創生しネットワークで繋がりがあって脳と制御しあっていることが分かってきたとレポートしています。兆に及ぶ細胞のネットワークの連絡と制御の仕組みに興味がそられる。素材の創生連結寿命も研究中だ。人間が作る最近話題のＡＩロボット製作など人間の一部補完物は出来るが完全には程遠い。

人間が祈る場所は神社が多い。人間はなぜ祈るのか。祈りたくなるのか。難しい話です。単純に考えてみましょう。人間は生きているうちにはカミサマと呼ばれない。死ぬと生前の功績などから神社に祭られてカミサマになる。日本国中神社だらけだ。最も多いカミサマは「山の

神」「先人の偉業を称える神」「神話の神」である。色々
と何故だろうと考えても解答は出ない。「祈る」を考察
すると「人間の願望を心に願う」のが祈りではないか。「湯
島天神」の例でも「願札」献納の山を見てツクスク考え
る。頼まれるカミサマも大変だなと。

明治新政府により国家と神社の一体化政策で靖国神社
には多くの英霊が祭られている。恐れ多いことだ。この
中に第二次大戦の戦犯を合祀したことで中国と揉めてい
る。GHQは国家と神社を分離する神道指令を出した。
そこで「神社本庁」が発足、約八万社が加入した。カミ
サマと中国は関係あるのか。カミサマに国家権力が絡む
とカミサマもややこしくなる。

ホトケサマに祈るとは言わない。スガルと言われる。
日本で人間が死ぬと墓地僧侶宗教が出てくるが、割愛す
る。最近NHKで「墓地の墓地」という放送を視聴した。
簡単に纏めると全国のお寺から墓石が或る寺に送られて
きて、その墓石が数万体の容量に達したとき住職が先祖
代々の供養をして碎石処分するという。また「捨遺骨」
も数多いと言う。公共吊いの場の確立が必要だ。

神社仏院には氏子檀家がいて存続を支えている。しか
し時代の変化で最近社院は廃業の危機に立たされている。
神仏の次世代への伝承に原因があるのだろうか。

カミサマとホトケサマへの願い事は「ウンとツキ」に
関係している。人間が集団になったとき強弱関係が現れ、
どちらも心に念じる願望が生じる。精子と卵子が結合し
た瞬間に新生人間としてウンとツキが決まると感じる。
生まれる前十か月の体内で新生細胞は母親の環境を受け
ながら成長する。生後の成長は保育園、幼稚園、小学校
までに大体の素養が決まるようだ。最近の生命科学が証
明している。小学校以降は父母の環境でウンとツキが決
まると判断して良い。親、金、学友、先生、自己啓発努
力、など色々全ての要素が重なり合って人間の成長があ
る。十八歳で選挙権を得て、二十歳で成人となる。運
八十パーセントという本も出ている。ウンとツキの組み
合わせ回転で各個人の人生が必然的に決まってくる。「出
会いを大切に」を記して終わりとします。

最後にもらった手紙

大平 忠

この数年、病に倒れ、薬石効なく逝ってしまった友人たちはいったい何人いるのだろう。

ご家族へのお悔やみ、弔辞、追悼文などもいくつか書いた。それらが果たして残された人々にとつてどれだけの慰めや力になったのか、無力感に襲われる。最近は、ふと気がつくときが多くなってしまった友人のこともを思い出しているときが多くなったようだ。友人たちの元気だった頃の表情と共に、もらった最後のメールや手紙とか、あるいは亡くなった後になってご家族から頂いた手紙などが頭の中に浮かんできるのである。

女性からのものが一通だけある。幼なじみだった。神経性の疾患や癌に侵され、少しずつ進行して、そのうち外出もままならなくなった。時々励ましの手紙を出していた。しばらく返事が来ないので気になっていた。そこ

へようやく手紙が来た。字の大きさが不揃いである。

「だんだん字も書けなくなってきました。こんな字でごめんなさい。……中略……いくつかの楽しい思い出がありましたね。……（この辺から字が乱れてくる）……手が急に動かなくなってきました。さようなら」

Tとは、中学時代からの長い付き合いだった。忙しい仕事の合間を縫って時々遊んだ。体調を崩したと聞いて見舞いの手紙を書いた。手術成功と聞いたのだが亡くなった。奥様から挨拶状を頂いた。こう記されていた。

「長いお手紙を読んでおりました。想うことあつてか、返事は自分が書くからと申しておりましたが」。Tは想いを返事に書くことなく亡くなってしまった。

高校時代三年間を通じて、Yという友人がいた。正論を吐きその通り実行する男だった。敬虔なクリスチャンだった。気が合つてよく話をした。Yは神経性の病を早くに患い歩行ままならず、専ら私や友人は彼の水戸の家へ遊びに行った。教会で知り合つて一緒になったという

夫人は、ある級友に言わせるとマリアさまみたいという優しい人だった。クラス会には夫人同伴で沖縄、会津旅行にも参加した。ところが突然、夫人に癌が見つかった。平成二十七年正月の年賀状には、「春になってすすきりするといいのですが」と綺麗な字で書かれていた。しかし、願いは叶わず、六月に天国に召された。残された彼は、群馬で医者をしている長男のそばの老人ホームに入った。部屋には亡き夫人と並んだ写真が飾られていた。彼からもらった最後の手紙は判読しがたい字で書かれていたが、実に彼らしい内容だった。

「……現在社会で不足しているのは、我々の世代ではなく若い人たちです。理屈では分かっていますが、介護保険料を払ったからといって、そして年長者だからといって威張っています。痛切な反省をしています」

Yは昨年七月に亡くなった。お悔やみの手紙の返事を息子さんから頂いた。

「父からは勇氣と優しさを学んできました。迎合しない強さと、常識や偏見に捕らわれない柔軟さも背中で見せ続けてくれました」

Uとは、学生時代ホッケー部を四年間共にし、卒業後も同じ会社に入った。会社でも事業所は違ったが、それぞれホッケーを満喫した。四十を超しても一緒に実業団の大会へ出たりした。ところが、二十年以上前に病が取り付き長い闘病生活を送ることになった。「癌はすぐ治る、怖くない」と僕らを氣遣ってか明るくいつも言っていた。癌ばかりか、頸動脈狭窄、敗血症、丹毒など、数えればきりが無い。最後は、壮烈な痛みとの闘いだった。

平成二十七年の八月、ホッケーの仲間たちが送ったメールや手紙に対して、長いメールが届いた。

「……綾小路きみまろの表現によれば、アチラは大変良いところだそうです。その証拠に戻って来た人がいません。竜宮城より素晴らしいに違いありません。先に逝ったSとNが早く来いと叫んでいる声が聞こえます。二人に伝えることがあれば言ってください。伝えます」

二ヶ月後、Uはアチラへ行行ってしまった。

友人からの最後の手紙は、胸に深く残って消えない。

慈雨

新井 良佑

去年十月一日九時半頃、日曜礼拝に出かけようとして玄関まで行った妻が、「今日は頭が痛いから、横になって休養する」と言いながら戻り、奥の間の布団に横になった。ほどなく、声がしたので行ってみると、意識が朦朧とし、身体がこわばっていた。手に負えない事態なので、すぐ救急車を要請した。休日にも拘わらず、半時間ほどで、脳外科医のいる近隣の救急病院に搬送できた。

一時間ほどして、主治医から「頭部のCT検査結果と諸症状から、くも膜下出血の最重症型。出血箇所が脳内のあちらこちらにあるので、積極的治療はできない。残念ですが、数時間から数日の命です」と告げられた。奥さんの傍にいてくださいと、治療室のベッドの周りをカーテンで仕切ったスペースに、昏睡状態の妻と二人だけにしてくれた。

煙っている灯心が消えるのを待っている状態で、頼れるものは、これまでの二人の人生を支えてきた信仰の力のみである。「主イエス」と、いつものように主の御名を妻の耳元で呼び続けた。昏睡状態のままだが、身体の硬直がやわらいだような気がした時、カーテンが開き、看護師が妻の様子を見に入ってきた。これなら病室に移せそうだと言って、そのまま緊急病棟三階の個室に移動してくれた。

処置は水分の点滴だけ、自力でどれだけ生きられるかを見守っているような状態であった。

ところが、翌日十一時頃、九州から駆けつけた姪が必死に呼びかけたところ、初めてちよつと反応した。それから徐々に昏睡状態から眠っているように容態が変わり、脈拍も安定してきた。三日目になると、あくびやまばたきをした。また、義姉の子供の時の話や童謡に、まばたきをしたり、口を動かそうとし、当面の危機の脳死状態を脱した感じがした。

四日目の夕方から、点滴に栄養剤や頭蓋内出血の治療剤が加えられた。

五日目になると、緊急病棟は、会わせたい人をいつでも入室させられたので、親密な友だちや幼なじみが遠方から面会にきてくれた。みな、妻が呼びかけに僅かながら応答するので、「また来るからね」と言葉をかけ、安堵して帰っていった。

六日目には、不調性呼吸も改善し、眼が覚めるのを待っている状態になり、連休明けの十日に脳の血管造影検査が予定されるまでに回復した。

しかし、九日目、看護師二人が朝の世話をしている間に、二度目の出血を起こした。病室に呼び戻されたとき、妻はすでに脈拍も呼吸も止まっていた。耳元で「主イエス！」と必死に呼び続けた。モニター画面で、三度の呼吸を確認したが、四度目の反応はなかった。

その日の午後、葬儀社の担当者と葬儀の段取りを決めた。打合せが終わって横を見ると、担当者が涙ぐんでいた。「どうしたんですか」と聞くと、「仕事柄、私は多くの遺体に対面してきました。人は死ぬとほとんどの人が安らかな顔になります。これは、生きること諦めたか

らだと言われています。最後まで諦めない人もいますが、険しい顔になります。奥さんは、最後まで生きることが諦めなかったのに、満ち足りた穏やかな顔をしています。このような遺体に対面できるのは、極めて希なのです」と熱く語り、「ご主人、奥さんは本当に頑張ったのです。よくやったと褒めてやってください」と付け加えた。

二度の晴天の霹靂の後、慈しみの雨が降り注ぎ、乾いた心の奥深くまで浸み込んだ。

神がなされることは皆その時にかなって美しい。
神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。
それでもなお、人は神のなされるわざを初めから
終わりまで見きわめることはできない。

(伝道の書三章十一節)

なんでやねん

浜口 須美子

博多のホテルの一室で、和やかな食事会風景。息子の結婚相手のご両親との初顔合わせと、指輪をお渡しする結納の儀が行われた。息子が進行役で無事浪速男と博多女のカップルの誕生。博多のお母さんが思わず「大阪のご両親はどんな方だろうと案じていたが普通の人で良かったです」と安堵の声。私は普通との評価に、心の隅で「おもしろいと言われるほうがうれしいねんけど」と残念に思う関西人の性。私の中では、他人から評価されるときの第一位が「おもしろい(楽しい)人」である。キレイな人、可愛い人、優しい人などももちろんうれしいが、おもしろい、楽しいの評価は次回に繋がる。また会いたいと言われたようでうれしくなるのだ。

さて、関西人大阪のノリとはどのようなものか？ 息子は大学卒業後東京に就職した。得意先で、「大阪の人

だからおもしろい事を言ってください！」とよく言われたらしい。「そんなもん急に言われても、おもしろい事なんか言えまっかいな」と日頃使ったこともない「でんがな、まんがな」の古典的大阪弁でその無茶ぶりを凌いだそうだ。関西人は常にももしろい事をいうという先入観に比べて、大阪弁をコミュニケーションングッズとして大いに利用していたようだ。

また、息子が仕事仲間と食事に行った時「醤油を取って」と言われて爪楊枝を渡したら「さすが大阪の人やからおもしろいね」と言われたらしい。関西人の笑いの方程式では、周りを巻き込むことが条件である。爪楊枝を渡された人はそれを醤油として扱って、注ぐフリをして、そこで「なんでやねん」と言って笑いが成立するのが関西の常識なのに、ネタフリの段階で笑われる居心地の悪さに地域差を感じたと言う。これはすべて雰囲気の中で繰り上げられることなので、改めて文字にすると、なんとメンドクサイ関西人ということになる。

関西人は理屈ではなく、本能として「なんでやねん」の方程式が頭の中でずっと蠢いている。相手が「なんで

やねん」と突っ込んでくれるように「ボケ」というトスを上げる。両者の間には打合せもなく、アドリブの世界でお互いのボケと突っ込みの役割が入れ替わりながらも会話が成り立っていくのだ。

先日の電車の車内での出来事。急な揺れに通路で立っていた男子学生が思わず車内の中吊りの広告の紙をつかんだらビリッと破れた。彼はそのちぎれた紙片をもとの広告の紙にあてはめた。その一連の行動を見ていた車内の人たちは笑いながら、声を揃えて「なんでやねん」と言った。関西人は生まれながらに、なんでやねんと言ってもらいたいという欲求が潜在しているように思う。

オヤジギャクと言われるジャンルの笑いも日常生活の中あちこちで耳にする。そのネーミング通り、ある一定以上の年齢層の駄洒落の言葉遊びである。これはまた、その年齢層の人に受けて笑いの世界が展開されていく。我が家の駄洒落部門の担当は夫である。夫のギャグは正統派なので、誰もが思いつくであろう駄洒落、相手の突っ込みを期待しながら最後のオチを聞く人に委ねている。

駄洒落部門最高責任者は九十七歳の母である。母は、先日階下の様子を覗こうとして、バランスを崩して脇腹を捻挫した。その様子を知人に電話で伝えていたが、まさしく舌好調、いや絶好調。「廊下で腰の捻挫したんやけど、廊下言うても、老化やないで、ウエストを捻っただけ。くびれはないけどウエストはあるねん。口は捻挫してないから大丈夫。口にスニーカーはかせたら、どこでも走っていけるねんけど」。母ほど笑いのキャリアを積むと、ナンデヤネンの突っ込みを当てにしないで、一人で話しの完結まで責任を取る。潔い笑いである。

我が家を表す漢字一字を考えたら全員一致で「笑」だった。笑いは一人では成立しない。笑わす人、笑う人、その組み合わせで笑いが成立する。我が家の食卓は賑やかだ。そんな話をしていたら、友人が「うちも食卓を楽しい場所にしたと思って頑張りました」と言うので、「どんな話をしたの?」と聞くと「おもしろい話を思いつかなかったから、おもしろい顔をしました」って。なんでやねん。

楽しい旅

松谷 隆

楽しい旅とは、自分で行きたいところ見たいところを選び、詳細な日程を立て、宿舎や交通機関を手配し、予定どおり進行する、が私の定義である。さらに、訪問地で温かい人情に触れられれば、いうことなしだ。

昨年五月に結婚五十年を迎えるにあたり、正月明けから何か行事をと、考え出した。二人の子供一家との会食、親の墓参りを兼ねた国内旅行、海外旅行等が浮かんだ。

しかし、モノは試しと、妻に「一案だが、もう一度九州旅行はどうか」と持ちかけたところ、「世界遺産の軍艦島に行けるなら」との反応で一件落着。

五十年前、披露宴のあと、夕刻神戸港から関西汽船で別府へ。レンタカーで温泉めぐりをし、やまなみハイウェイを楽しみながら、阿蘇温泉に向かった。翌朝阿蘇山

の噴火口を覗いたあと熊本市に行き、水前寺公園、熊本城を見学。その後フェリーで島原着。雲仙では、辺り一面の見事な躑躅はいまでも鮮明に覚えている。

四日目、高校時代の級友と会う予定の長崎へ向かう。ホテルでメモを渡された。級友からだ。「東京出張のため会えない。ごめん」だった。翌朝、市内観光のあと、太宰府で妻の元同僚と再会、懇談後、福岡空港から大阪へ。

今回の宿泊は、福岡、天草、熊本に決めた。福岡へは飛行機で行き、一昨年横浜から移住された会員のOさんとの面会、志賀島で発見された金印見学と水郷・柳川散策のため二泊。福岡から高速バスで長崎港まで行き、軍艦島巡り。そのあと、天草へは長崎市の茂木港から下島の富岡港へのフェリーで。熊本へはレンタカーでキリシタン記念館などを巡りながら行く計画だ。

今回の旅行では、多くの人のアドバイス、もてなしそして助けを頂いた。

まず、Oさんからは、福岡二日間の見処と計画までいただき、その上、福岡市役所のロビーの地図で、福岡市

の概要を教えて頂いた後、生簀で有名な料亭で呼子産の
いかの活作りを堪能させていただいた。感謝！感謝です。

軍艦島巡りでは小船のため、手荷物も小さ目にとのこと。
波止場から徒歩三分の長崎Mホテルで昼食を取ることにし、
キャリアバッグの保管を依頼したら、快くOK。その上レストランの
予約まで取ってくれた。ランチも手ごろな値段で、味もよし。
いずれも望外のことで、次回長崎に行くなら、このホテルに泊るつもりである。

天草行きは時間との闘いであった。出発前にフェリー会社
に「長崎から茂木までのバスに乘れぬかもしれない」とメ
ールしたら、「その時は茂木の事務所まで連絡してくれれば、
出航時間を調整する」との返信があり、びっくり。結局、
ホテルからタクシーに乗り、間に合った。乗客は我々二人
だけで採算割れではと同情した次第。さらに船長に港から
ホテルへの行き方を聞いたら、「途中坂があり、そのバグを
引くのは大変。少し待って貰えるなら送りますよ」との
申し出を受け、これまた感謝、感謝である。帰宅後先の
メールの発信人を確認したら、なんとその船長で、丁寧な
お礼メールをした。

熊本城近くに予約した旅館に着くと、受付の女性が慌て
ふためき、早口での説明がよく分からない。聞いてみると
「修学旅行生が泊るので、別の階の和洋室に変えたいと留
守電を残したが、返信がないので心配していた」とのこと。
これには恐縮するばかりだった。帰宅後、留守電三本を確
認。これまたお礼のメールを出した。

今回の旅行では、福岡市立美術館で金印を見ることが
でき、長年の願いがかなった。

さらに軍艦島に上陸し、元住民の係員から説明を聞け
たので、より臨場感が高まった。年々荒廃が進んでいる
とのこと、あと何年上陸できるのだろうか。

熊本城の五十年前の記憶とは違いすぎる姿に改めて地
震の怖さを認識した。しかし、復興作業が着々と進行し
ているとのこと、復興後の姿を見るまでは死ねないな。

このように各地で温かい人情にふれることができ、天
草での夕食時に、妻の「五十年ってあつという間ね。ま
るで昨日の出来事みたい」との一言で、一層楽しい旅に
なった。

インドネシアの旅

原 田 信

リタイヤしてから十年余り、年末年始の準備は思い切って簡素化し、二、三週間かけて、大佛次郎の『天皇の世紀』などの大作や岩波の『中国詩人選集』のようなシリーズを読む習慣を続けてきた。しかし、数年前のその年は秋から雑事に追いまくられ、年末になってもテーマが決まらなかった。こういう読書は旅行と同じように計画を立てること自体が愉しい。あわても仕方がないから読書はやめて、その時間を外国旅行の計画に充てた。行くなら、ネットで日本語のレッスンをしてきた元学生や現学生の多いインドネシアの数か所を飛び回りたい。ネットで調べたら、格安の国内航空便があり、日本からもネットで予約できることが判った。しかし、その航空便は大半が首都と地方都市を結ぶ形で、計画した四か所をぐるっと回ることとはできない。七十過ぎての熱帯の旅には不安もある。でも、一月下旬の出発に決めた。

初日は首都ジャカルタに宿泊し、二日目には列車でジャワ島中部のバンドンに行く。三日目はシャトルバスでジャカルタ空港に戻り、スマトラ南部のバンドランプンまで一時間。四日目はまたジャカルタ空港に戻り、スマトラ中部のパダンまで二時間のフライト。同市に二泊。六日目の深夜、ジャカルタから帰国便に乗る。学生たちと面会の調整をしながら、数々の依頼をした。

到着したジャカルタ空港では、前に日本で会ったアイさんがご主人と共に迎えに来てくれた。ご主人は入国管理官で、空港のすぐそばに官舎がある。滞在中は不要でも帰りにまた必要になる防寒の衣服を預かってもらった。勤務を終えた彼の運転で中心部のホテルに行き、郊外の日系企業から駆け付けたアゲン君も含めて夕食。そのホテルにはアゲン君にも泊まってもらい、翌日は彼が手配してくれた特急に三時間乗ってバンドンに到着。車窓で見かけた森林トロピコ用と思われる小さな鉄橋が印象に残った。長さは三十メートルほどで軌道の幅も狭い。後述のパダンでもセメント運搬の軌道があったが、滞在中に運転はなかった。その後、ネットで後者の写真は見つ

けたが、前者は見つかっていない。再訪したいものだ。

バンドンには国立教育大学(UPI)があつて、リタイア後に同大学を訪ねたのがきっかけで日本語のレッスンをはじめた経緯がある。その日と翌日は数人の元学生とモールや市場を回り旧交を温めた。

バンドランプンではUPI出身で高校教師のアムリ君の家に宿泊。新婚だが、実家での同居を迫る母親に逆らつて無理して戸建ての家を購入したという。翌日、再びジャカルタ空港でパダン行きの便を待つ。アイさん夫婦と話していたら、偶然通りかかった青年を夫の弟だと紹介された。プロのサッカー選手で試合を終え同じ便でパダンに帰るという。空港からは彼の奥さんも同乗した車でホテルまで送つてもらった。これは実に助かった。

当時、パダンの国立アンダラス大学日本語科に学ぶ二人の女子学生とレッスン中だった。また同大学には、知り合いで同世代の丸谷先生もいる。ゲストハウスと教官乗り合いの送迎車に多少の報酬付きで、インドネシア各地の大学で会話や文法を教えている。二人の女子学生のレッスンは丸谷先生の依頼で半年前に始めた。だから初

対面だ。同大学を訪ねてイメルダ日本語学科長にも会い、学生たちに日本語の勉強の仕方をアドヴァイスした。このうちの何人かは、その後のレッスンに参加した。

パダンの二日目は七十キロ離れたブキティンギへ二人の女子学生や丸谷先生と出かけた。教官用送迎車のアルバイトだ。高原の景勝地で観光客も多く、日本人も何人か見かけた。旧日本軍第二十五軍のはじめの駐屯地で、防御用に作ったトンネルの陣地も見えて回った。「映写室」などの壊れかけた表示が残っていた。この二十五軍にまつわる話を以前、『悠遊』に書いたことがあるが、それは部隊がスマトラ北部のメダンに移動してからのことだ。

旅行後のレッスンで改めて思ったのは、スカイプ(ネットのテレビ電話)で教えても、相手と実際に会ったことがあるかどうかで、学習の効果は格段に違うことだ。この二人では、それがもつとはつきりした。その後の二人の伸びは大きく、アナさんもウミさんも半年後の日本語能力試験N2(二級)に合格した。二人は卒業後、別の日系企業に就職し、ウミさんは既に二回来日したし、アナさんは二〇一八年一月に初来日した。

アヘマの仲間

濱田

優ゆたか

昨年六月、神戸の友達のところに行った時に、泊りがけで留守番に来てくれた娘に聞かれた。

「なあにアヘマって」

たしかに変わった名称だし、この日集まる五人、学校も会社も住んでいる所もバラバラなのに、三十数年来付き合いつづけているのだから、娘が不思議に思うのも無理はない。

この仲間との出会いは、一九八二年六月フランクフルトで開かれた世界最大のアヘマ（化学工業展）と欧州化学産業の視察旅行だった。

時あたかも石油危機を経て重厚長大から軽薄短小へ産業構造の変革期。規模の利益を追求してきた石油化学のわが社も、遅ればせながら高機能性化学へのシフトに力を注いでいた。新規事業開発の企画担当だった私はアヘマでこうしたわが社の取組に沿う技術の芽を探そうと目

を皿にして会場を歩き回った。

ところが、めぼしい技術はすでに抜け目ない日本のメーカーや商社に押さえられている。がっかりしている私に同行の経験者が声を掛けてくれた。

「展示会で手つかずの新技術を見つけるのはまず無理ですよ。ここで分かるのは最新の傾向だけ」と彼はいう。

「そんなことより、このツアアの間に良い友達を作りなさい。一生ものの仲間を得るいい機会です」

前半のご指摘はもつともだが、後半のアドバイスは突飛に思えて、体験談といわれてもすぐには納得しがたい。が、騙されたと思って先達の意見を素直に聞き、その後友達作りに精を出した。

すでに公式行事の合間に三々五々連れだつて街に繰り出すグループが自然にできかけていた。視察団のメンバーは総じて海外出張の経験が少なく、群れやすいのだ。中でも、ライオンのUさん、日華化学のYさん、ダイセルのAさん、日鉄化工機のMさん、マナックのSさんをコアとするわが仲間はまとまりが良かった。

年ごろは三十代半ばから四十代半ばの働き盛り、勤め先は同じ化学でも川上のわが社が提供する素材を川下で精密化、特殊化して付加価値を高めている会社が多い。

企業体質が異なり異業種交流に似た刺激があった。

週末のスイス観光からパリ、ロンドンなどを巡る後半は、名のある美術館、博物館、宮殿は視察団で巡り、夜は仲間内で歓楽街をうろついた。さすがに観光名所は素晴らしいが、印象深いのは仲間が絡む思い出である。

パリで、金持ちのSさんが親戚の女性たちに頼まれたLVのバッグを十数個も購入した。爆買いである。彼があれこれ聞こうとするが、店員の態度が横柄で感じが悪い。見兼ねて文句を言ってやろうとしたら、彼に止められた。頼まれたとおりに買わないと日本に帰れない、という。私はそんな店の多いパリが嫌いになった。

スイスではこんなこともあった。水の都ルツェルンで土産物の可愛い娘が年末に日本に來ると他のグループの人から聞き、仲間で押しかけた。そこで土産物を買、日本に來たら案内をしてあげるといって名刺を渡すと、必ず電話をするという。しかしいくら待っても彼女

から連絡はなかったなどなど。顔を合わせると家では言えない話が飛び交う。

この種の視察団は、帰国後写真の交換会など開いて思ひ出話をすることもあるが、そう続くものではない。

わがアヘマ会は、新規事業開発のYさんや営業統括のSさんが東京勤務になったり、地方勤務でも東京出張を利用したりして毎年飲み会を続けた。ここ十年ほど社長を続けているSさんには遊んでもらえなくなったが。

しかし、寄る年波には勝てず、自分や連れ合いの身体に問題を抱え、簡単に東京に集まれなくなった。それで三年前、福井のYさんのところに行き、昨年は神戸のUさんのところに出かけたのだ。

会えばたちまち昔に戻り心寛ぐ。かけがえのない気の合う仲間である。ことに私は公私共にみんなのお世話になった。冒頭の話は本当だったのだ。

* ACHEMA Ausstellung (展示会) CHEMischer
(化学の) Apparat (装置)

大和路ピークハント

新田 由紀子

倭は 国のまほろば たたなづく

青垣山ごもれる 倭し うるわし

奈良大和路を山から望む眺めはどんなだろうと、年末年始の一週間、盆地を囲む山々の標高百メートルの丘から千メートル峰まで十一のピークを巡った。

奈良駅に着いた初日は若草山(三四一メートル)に向かう。春日大社前から雪粒まじりの強風の中、観光客も鹿もいなくなつた遊歩道を登っていく。左が若草山、右は春日神社の聖域、原始林に覆われた御蓋山だ。小一時間で枯芝の山頂に着く。市街が眼下に横たわる。周りの山々を眺めようにも吹きすさぶ寒風で、早々に下山した。

翌日は少し北に戻って笠置山(二八八メートル)へ。二両のワンマン電車を山間の無人駅で降りる。木津川を渡って四、

五十分林道を行くと笠置寺がある。境内の摩崖仏や石塔を巡って登ると、山頂に着いた。鎌倉幕府打倒を掲げた後醍醐天皇が陣をしいたという要害の地だ。

三日目からは南に下って、大和三山や葛城・金剛の山々に登った。

葛城山(九五九メートル)へは近鉄御所駅からバスとロープウェイを乗り継ぐ。山頂駅から凍結した歩道を登ると、あつけなく頂上だ。大阪の海が鈍く光って見える。反対側には奈良盆地が山に囲まれて、まどろむかのようだ。その南には吉野熊野の大峰が青々と連なる

山から下りて近鉄線を橿原神宮西口で下車。お宮の裏の畝傍山(二九八メートル)に登る。万葉歌に詠まれる大和三山の一つだ。西山麓の畝火山口神社側からの道は山肌をうねうねと続き、ミニ登山気分。頂上からは北に市街地、西に今下りてきた葛城山、東の目の先に遺跡の宝庫明日香村、その南には吉野の山々を望んだ。

翌日は心に強く引かれるものがあり、予定を変えて桜井市の三輪山(四六七メートル)へ向かった。麓の大神神社はこの山をご神体としている。登拝口で氏名を書き、鈴のつ

いた白いタスキをかける。往復一時間半ほどの山道は意外と険しい。パワースポット・ブームのせいかな若者たちが多く、軽装で登っていく。清浄な神域に響く鈴の音に意識が凝って、異世界を歩く気がした。

午後は近鉄耳成駅から大和三山の二つ目、耳成山（二三九^{メートル}）へ。神社の参道を登ると十分で頂上に着いた。木立の中で見晴らしはない。新興住宅街の間にこんもりと鎮まるこの山だけが物寂びている。渦巻き状の道を下るうち、堂々巡りをしている錯覚に陥ってゾッとする。

翌日は二上山（五一七^{メートル}）に登る。大和と河内の境に、男嶽と女嶽の丸い峰が寄り添う山容はロマンチックだ。山の端に沈む日輪に、王朝の姫が天津皇子の魂と阿弥陀仏を重ねて観る、という文学小説の舞台でもある。ハイカーのあとをついていくうち、地図にないルートに入ってしまった。勘を働かせて落ち葉の踏み跡をたどると、一時間ほどで雄岳の山頂に出た。大津皇子の墓は左になる。奈良側を表とすれば、裏の方から頂上に上がったようだ。眺望がないので、少し下って雌岳の山頂へ行く。穏やかな冬日の下に広がる大和国原。畝傍、耳成、天香

久山の三山が、海に浮かぶ小船のように見える。歴史のロマン豊かな飛鳥の里。古代人も、同じ風景を愛でたに違いない。

五日目は徒歩圏で、甘樫丘（一四八^{メートル}）、雷丘（二一〇^{メートル}）と天香久山（一五二^{メートル}）の三つのピークを巡った。「大君は……雷^{いかづち}の上にいほりせるかも」「……白妙の衣干したり天の香具山」と万葉歌にある。青々と里山が囲む田畑と、端正に住み継がれた民家がありなす農村風景は、懐かしく心にしみいる。

最終日の元旦はいよいよ金剛山（二二二五^{メートル}）だ。橿原神宮前駅から大阪の富田林駅へ、さらにバスで千早ロープウェイ駅まで乗る。山頂駅からは歩いて片道三十分。積雪はないが、北斜面の凍結箇所でアイゼンを付けた。季節が良ければ、麓から旧跡を巡りながら登りたい。最高地点の葛木神社を経て、凍った山道に足をとられながら展望広場に来ると、ライブカメラに向かって両手を上げた。計画した全てのピークをハントした自分に万歳。帰路は遠回りでも奈良に戻る。商都大阪を通るよりも、古都の盆地を通って帰るのがこの旅にふさわしい。

マレーシア旅行の余震

大津 隆文

約二年前の二〇一五年二月二八日午後、成田空港全日空のチェックインカウンター、私は家内、娘夫妻と孫の五人でマレーシア旅行に出かけようとしていた。出発直前の浮き浮きした気分、スーツケースを預けたら何か食べようか、と孫に話しかけていた。その時、カウンターの女性の声があった。「大津隆文様は御搭乗いだけません」。えっ、どういうことだ。

説明を聞くと、私のパスポートの有効期間が次の年の六月七日までで、残存期間六か月以上というマレーシアの入国条件を満たさないとのことだ。そんなっ！。私がマレーシアに滞在するのは一週間で一月四日には必ず出国するので何とかなりませんか、と必死で訴える。

こんな間拔けなケースは初めてだったのだろうか、親切にも担当女性がマレーシアの大使館に問い合わせられることになる。当日は御用納めであったが、大使館は

即答できないので本国に照会してくれるとのこと――。

一縷の望みは繋がったが、一方で、役所が柔軟に対応してくれるのは簡単ではないと、諦めの気持ちも強まってくる。列の後ろを振り返ると、あの五人組は何をしているのかと、厳しい視線が注がれるのをひしひしと感ずる。

大分待った後、やはり駄目との返事が返ってくる。娘は「飛行機に乗せてもらって現地へ行けば何とかならないでしょうか」となおも粘ってくれる。「現地へ行っても入国できず、空港のベンチで夜を明かし翌日の便で帰ってくるしかありません。それにそんなお客を乗せると私達の会社まで処分されることになります」と冷静だ。

さてどうするか。当然、自分は留守番するのでどうか四人で楽しんできてほしい、と言ったが、家内も取り止めてくれると言う。そうされるとかえって辛い、結局そういうことになった。娘一家がゲートに入るのを見送り、家内と二人またリムジンバスへ。この車中の気分は来る時に比べ天国と地獄だった。どうして気付かなかつたのかと言われても、残存期間は三か月あればよいと思いい込んでいたのだ。念の為、鞆から旅行ガイドブックを

取り出してみると、要注意事項の最初は旅券のことだ。

弁明の余地がないミスだ。また、一週間留守の予定だったので冷蔵庫は空っぽで、お正月を家で過ごすとなればその準備はどうしようかと、家内は頭を抱えている。

よく分かったのは、家内にとって、正月の準備等から解放されるというのは、夢のように素晴らしいことであったことだ。その夢が一瞬に霧散したショックがいかに大きかったかは想像に難くない。

自分は結婚した時、男性は外で働き女性は家事をする、という役割分担が当然と思っていた。仕事をリタイアした三食家で食べるようになった時、女性にも定年が無いのかしらとの声も耳にしたが、役割分担の契約は生涯有効との立場だった。しかし、時とともに、いつまでも家事はすべて女性の責任とすることに、居心地の悪さを感じるようになってきていた。そこへ今回の失態だ。

謝罪の意味も込めて、家内の家事負担、中でも大変そうな三度三度の食事の負担を減らそう。そのためには、自分に料理が出来ればいいが、それは望むべくもないの

で、外食をすることでどうか。具体的には、一週間の内、朝食を除く昼と夜の食事一四回のうち約三分の一の五回を外で食べるということかどうかと思った。

早速実行に移したが、最初はなかなか簡単ではなかった。現役の時とは違い会食がほとんどない。一人で食堂に入るのは、とくに混雑時は少々気後れを感じるし、注文してから長い時間待たされるのも御免こうむりたい。

結局、「早くて安くて旨い」いわゆるファーストフード店を頼りにすることになった。私のお気に入りには、「丸亀製麺」(うどん)、「日高屋」(ラーメン)、「てんや」(天丼)、「すき家」(牛丼)などである。戦後の空腹時代を過ごした身には、いずれも美味しくて味に文句はなく、その上ワンコイン(五百円)で済む。ありがたい世の中になったものだとしみじみ感じる。

なお、家内から歓迎されるのは、昼よりも手間のかかる夜の外食の方だ。しかし、夜ひとりというのは侘しい気がして躊躇する。夜の外食の時は、幸い彼女もお酒は好きな方なので、近所の居酒屋へ誘って、来し方の穴埋めをしている昨今である。

言葉と音楽の戯れ

藤原 道夫

「モーツァルトはオペラを作ったかった。オペラを作曲している時は全精力を注いだ。オペラにはモーツァルトの音楽のすべてがある」。こんな話を聞き、器楽曲を中心にモーツァルトの音楽を楽しんで来た私は方向転換に迫られた。それから意識してモーツァルトのオペラを聴くように努めた。これが難事であった。音楽は良いとして、言葉が分ならず、歌の機微が汲み取れない。オペラを楽しむには言葉の壁が大きい！ そう痛感し、「ドン・ジョヴァンニ」（ダ・ポンテ作）を取り上げてイタリア語台本の解説に取り組む決心をした。既に還暦近い身、新たな外国語の習得は容易ではなかった。しかし一年がかりの努力が実って、このオペラは字幕を殆ど見ることなしに楽しめるようになった。表題の「言葉と音楽の戯れ」は、その時の勉強を通して感じた事である。具体例として、二つのアリアを取りあげて解説を試みよう。

①「カタログの歌」

ドン・ジョヴァンニ（DG）の従者レポレッロが主人に袖にされたドンナ・エルヴィーラを前にしてDGが誘惑した数々の女について歌いあげ、もう追うのは止しなさいと諭す。前半でマとミに注目。マダミーナと呼びかけ、国別にDGが征服した女の数を挙げ、マ マ マ イスパニャ ソンジャ ミレエトレ（スペインではもう千三人だよ）と歌う。ミレエトレが三回ずつ六回出て来る。マとミの音を通して怪しい雰囲気醸し出される。次に女の体型のことになり、DGはやせていようと太つていようと何でもこいだという。続いてラ ピッチナ（小柄な女）のところで音楽が突然変わり、オーケストラが生き生きと伴奏する。その後ラ ピッチナが眩くように八回も繰り返される。モーツァルトはこのイタリア語の発音と語感に敏感に反応して作曲したことが伺える。終わりの方にラ ゴンネツラ（スカート）が繰り返して出て来るのも同じだ。「スカートをはいていれば誰でも仕掛ける」とゴンネツラが繰り返して歌われる。レポレッロは主人になり代わり、エルヴィーラをからかっているかのよう。

②「葉屋の歌」

許嫁のツェルリーナがD Gに誘惑されそうになり、怒り狂ったマゼットがD Gをぶち殺そうと試み、逆にしたたか打ちのめされる。そこに現れたツェルリーナがマゼットを慰めて「いい葉をあげるわよ」と歌うのがこの歌。彼女は葉について講釈を並べ、ドヴェ ミスタ（私のどこにあるのか）知りたくないのと謎をかける。この歌い方が変化に富んでいる。続く最後の二行が特に興味深い。センチロ バツテレ トツカミ クワ（ドキドキしているのが分かるでしょ ここを触ってみてよ）が強弱と旋律を変え、五度歌われる。アリアの終わりの方でクワが勝ち誇った鳥のように三回謡われ、最後にトツカミ クワが異なった優しい旋律で二度繰り返され、オーケストラの後奏によって「葉屋の歌」が締めくくられる。この時までしよげていたマゼットはすっかり機嫌を取り戻す。小娘といえども男を籠絡する術を心得ているのだ。その過程がイタリア語の発音を生かした音作りにより、実に美しく巧妙に表現されている。その辺りを歌手は情感を込めて歌い、演技することが要求されると思う。

ドイツ語圏に育ったモーツァルトは、台本のイタリア語の発音と語感を敏感に感じ取りながら作曲したと思われる。これは、詳細に論じられないが、イタリア人作曲家によるオペラではあまりみられないことだ。このような感想を音楽の専門家はどうかとるだろう。ある機会にドイツ語専門で音楽に詳しい某大学教授に尋ねてみた。そこまで研究が進んでいない、という返事であったが、私は違うと思う。オペラを聴く側がここに記したことに關心を向けていないのではないか。しかし言葉が大事なことは、メトロポリタン歌劇場（ニューヨーク）でバックステージ・ツアーに参加した際に聞いたことから裏付けられる。ここには世界中から優れた歌手が集まる。イタリア語に疎い国からの歌手もいるだろう。そこでオペラ会社は六人のイタリア語教師を雇い、練習中の歌手に特訓しているのだ。スカラ座の引越越し公演で帝王ムーティは字幕を出すことに反対したことも証拠になる。

歌われる言葉をごく自然に受け止めてオペラを聴くことができれば、歌に込められた機微や歌手の表現力に理解が行き届き、オペラを各段に楽しく鑑賞できよう。

バイロイト詣で

下山 健夫

リタイア後のプランとして、郵便で申し込みをするこ
と八年、ドイツ・バイエルン州バイロイトで毎夏に開催
されるワグナーのバイロイト音楽祭・ローエングリン、
ニルンベルグの名歌手のチケットをやっと二〇一〇年
に入手出来た。一緒に行く妻と娘には背景を理解しても
らう必要があると思い、ワグナーのパトロンであつた
ルードヴィヒ二世のノイシュバンシュタイン城、ロマン
ティック街道をレンタカーでニルンベルグまで三日間
かけ、十分に中世の雰囲気浸って、当日の昼にバイロ
イトへ到着した。開演までの時間は彼の自宅であつたバ
ンフリートを見学、田舎ホテルから歩いていよいよ祝祭
劇場へむかつた。

街路樹プロムナード先の丘の上にある祝祭劇場、着飾
った観客が思い思いに前庭を散策している。その日のプ
ログラムからのメロディのファンファーレがバルコニー

から奏でられると、ゾロゾロと観客が劇場へはいって行
く。両サイドにしか入口が無い為自分の列の観客が全て
着くまで立つて待つ。椅子は硬い木製でクッションが無
く、妻達はクッションを持参してきていた。後ろの方の
席だがかなり急な扇形の座席配置で舞台が小さく見える。
ローエングリンはこの年からノイエンフェルスの新演
出、アンドリス・ネルソン指揮、カウフマン、ダシュ。

舞台下にあるピットからの前奏曲が始まり、流石に音
の素晴らしさをまず実感、シユールなデザインの舞台、
但し多数の登場人物がネズミばかり、髪すだれ風もあり、
娘はヤノベ ケンジ（京都芸術大学教授・前彫刻家）、
トラヤンが最良であり違和感はないようであつた。終
演後はその年に孫のウォルフガングが亡くなり、音楽祭
を新しく率いるひ孫世代のエヴァとカタリーナが舞台に
登場してさすがワグナー好きの聖地、最も大きな歓声
が上がっていた。

翌日はひ孫カタリーナ・ワグナーの演出、ヴァイグ
レ指揮、フロリアン・フォークト等、前日買ったプログ
ラムを見て娘が大変と言っていた舞台、読み換え演出が

当たり前でロックシンガー、美術学校、著名な作曲家の
パロディ、舞台には全裸の男女が登場するに至っては私
も目をつぶって音楽だけを聴いていた方が良いと思った
ほどであった。終演後は大ブーイングの嵐、この日はこ
の年の最終演目にもかかわらず前日あった音楽祭責任者
の登場も演出家のカーテンコールも無かった。

この経験で私は又八年後には状況が変わり、少しは伝
統的なものに回帰するのではないかとの思いもありチケ
ットの予約を続けてきた。少し早く六年後にトリスタン
とイゾルデのチケットが入手できた。チケットの入手方
法が変わり前年にも入手できていたがメールを見のがし
ていた。今回は年齢からレンタルカーの運転は自信が無く、
鉄道での移動と美術館巡りの予定をたてて、バイロイト
へ行く。直前にミュンヘンでもテロがあり、警備が厳し
いとメールもはいつて心配していたが、チェックは簡
単なものだった。前回とは異なり椅子にクッションが付
いていたがこれはテロによる不審なクッションの持ち込
みを防ぐからか。

今回の演出はあの前回突飛だったカタリーナ・ワグ

ナーで心配していた。指揮は音楽監督でもあるクリス
ティン・ティーレマン、トリスタンはシュテファン・グ
ールド、イゾルデがペトラ・ラング。

暗くなり、地の底から湧き上がる様な前奏が始まり、
幕が開くと幾何学的で無機質なジャングルジムのような
セット。奥行きがあるので船の先端とも思え、衣装もシ
ンプルで地味、嘗て観たウィーラントの舞台を彷彿とさ
せる。幕が進むと舞台が照明の効果主体で違和感がなく、
うねるようなオーケストラ演奏、歌手の熱唱が続く。演
出のカタリーナは原作とは異なる幾つかの読み換えはし
ていたようだが前回のような突飛なことではなく音楽、舞
台共に楽しめ、クライマックスの愛の死を迎える。

幕が下りるとブーイングも無く、カーテンコールも歌
手の熱唱へは大きな歓声が飛び、最後に指揮のティーレ
マンが現れるとブラボーと足を踏み鳴らして観衆は大変
な賛辞を贈っていた。

前回違和感ばかりであったが、今回はワグナー殿堂、
祝祭劇場の演奏であり、やっと満足できる経験をさせて
もらえ、一区切りしたと思っている。

日の出

安藤 晃二

暮にカレンダーを替えた。毎年、出身会社より卓上カレンダーが二冊送られて来る。「静嘉堂の美術品」である。静嘉堂は約二十万冊の和漢の古書と、六千五百点に及ぶ古美術品を収蔵する。三菱第二代社長、岩崎彌之助が明治の西欧文化偏重傾向の中、軽視されがちであった東洋固有の文化を護るべく、明治二十年頃から収集活動を開始、その後第四代社長岩崎小彌太によつて拡充されたという。カレンダーには月ごとに変わる絵画と骨董品の写真、その解説が印刷されており、もう何十年にもなる楽しみである。

一月は日本画、水墨画で描かれた山峡が靄で埋まり、彼方のうつすら茜色の空、恐らく画家が凝視している右前方の高みに、あたかも熟したグミの実の体で紅く彩色された太陽が浮かぶ。山峡の尾根に並ぶ木々はよく見ると、筆致も素晴らしい松であることが判る。何とも飽き

ることがない絵を毎日快く眺めて、もう一ヶ月が過ぎた。突然、私の脳裏にモネの「日の出」が現れた。そう、この絵も「日の出」に違いない。それと気づかなかつたカレンダーのタイトルを調べて見ると、むべなるかな『日の出図 横山大観筆』とある。一方、モネは朝霧の漂う乱れた海辺の風景を近景に、自らを、また観賞者を目の高さに浮かぶ太陽にくぎ付けにする。日の出は斯くも芸術家を魅了するものか。

私はある偶然により、「印象派」の名前の由来となつたと伝わるモネのこの作品に直面する機会に恵まれた。もう十年程前になるが、私とその日本法人の経営に携わつたドイツのロボットメーカーK社の手配で、日本の工業会関係者と共に、パリの工作機械、ロボットコンベンションに参加の目的で出張した。先ずはK社の本社のある、ミュンヘンに近いアウグスブルグを訪問した。古代ローマのアウグストゥス皇帝に因むドイツで二番目に古い都市であるという。「最古の都市は？」と問えば、「さあ、アーヘンかな」。二番自慢で、一番を忘れる、これ

が可笑しい。この町では十六、十七世紀に隆盛を極めた鋳業系金融財閥、フッガー家が歴史に名を残す。宗教改革前後にその財力がローマ教皇を動かし、諸公国が神聖ローマ皇帝の地位確保に必要な財力のための金融支援を行ったという。ローマン・カトリックの色濃い都市であるが、ルターの足跡、アウグスブルグの和議（一五五五）も名高い。モーツアルトの父レオポルドの家には、アマデウス没後二百年の賑わいがあった。

翌日、一行はパリに向かう。展示会に加え、学会や産業連盟など、全世界からの学者・ビジネスマンが集う。スケジュールの後、パリの夜という思いがけない余禄が待っていた。参加者は日本人を除き夫婦連れが多い。あの胸のすくようなリドのショーを生まれて初めて観る。K社の副社長の采配で「かぶりつき」のテーブル席が幾筋も確保され、美女達の脚が舞い、風を頬に感じながら、皆気分が高揚する。フランス人はワイン談義、世界的權威の教授がロボット技術論を開陳する等、楽しい時間が過ぎて行く。翌日の晩は、K社副社長主導のセミナーのク

ルーズに繰り出す。米独仏、スエーデン、日本人が仲間だ。期待した「パリの夜景を船から観る」展開とはならず、屋形船にこもり、ひたすらステッキディナーを楽しみ、議論に明け暮れる、業界会合夜の部、古い知己同志の懇親の場となる。

日程をこなし、翌朝日本の工業会の同好の友人を誘いマルモッタン美術館に出かける。入口でドイツ人の副社長夫妻にばったり。強面の副社長も趣味の世界は明らかに奥さん主導である。不案内な我々に懇切なこのモネ専用美術館を解説、それとなく世話をやく。奇しくも『印象、日の出』の作品と向き合い納得した。暫し去り難く余韻を楽しみながら佇む。モネは灰色にくすんだ情景の中で際立つ赤い朝日を捕まえている。いま尚鮮明なその記憶の赤は、卓上で私が毎日眺める大観のグミ色の紅そのものであると知らせてくれる。最後の展示室には赤黒の漆を想わせる絵具が無軌道に厚塗りで絡み合い、対象の形状も判らない恐ろしいかなカンバスが幾つも並ぶ。モネの老後がそこにあった。

あの日に帰りたい

八木 信男

大学一年生で山岳部に入部した私は、学業では落ちこぼれだったが、年間一〇〇日以上を山で過ごしていたのでクラブでは優等生の方だった。その新人の私に先輩のTさんが十月に赤沢山へ行かないかと声をかけてくれた。赤沢山は高さ二六七〇m、槍ヶ岳のすぐ近くに位置するが、岩登りをしない者には無名の山である。計画は赤沢山から穂高岳の西にある滝谷へ連続して登るというものだった。

紅葉盛んな上高地を過ぎ、赤沢山の麓にテントを張った。その横を流れる槍沢は槍ヶ岳へと続く。

夜が明け、インスタントラーメンの朝食を摂り、快晴のもと、壁へと向かった。順調に登り始め、チムニーというまさに煙突をくりぬいたようなせまい空間が現れ、Tさんが先に空身で登り、チムニーの上に到着した。そして下にいる私は、Tさんのリュックサックをカラビナ

という金具を使いロープに結びつけた。上にいるTさんはゆっくりとロープを引き上げ、リュックサックも上へと引き上げられていった。一〇mほど引き上げられたとき、岩角にリュックサックが引っかかってしまった。それでもTさんは強引に引っ張り、無事岩角を過ぎた。次の瞬間、リュックサックをロープに固定していたカラビナがリュックサックからはずれ、鮮やかな黄色のリュックサックは傾斜のある壁を転がりながら落下していった。こういうときに人間の目はスローモーションとして記憶するが、いまでもあの転がり落ちるリュックサックを思い出すことができる。

転落というのはこういうことだと知った。T先輩は懸垂下降という、ロープを伝いながら降りてくる方法で私のところへ降りてきた。

「カラビナはリュックサックに掛けた後、回さないとダメ。とにかく降りよう」

私たちはテントに戻り、そしてこの山行は終わった。予定していた日数が余ったので、冬休みにスキー合宿でお世話になる梅池の旅館へ立ち寄ることにした。

十月のゲレンデは、ゆるい傾斜をもつ枯れ草の斜面だった。旅館には私たち以外に客はなく六畳ほどの部屋へ通された。

「まあ、こんなこともあるだろうし、無事だったからいいよ」とTさんはぼつりと言いい、たばこを燻らせた。

夕食は何だったか覚えていないし、スキー合宿の打ち合わせの内容も思い出せない。しかし、部屋へ戻ってテレビで見たドラマはいまでも思い出せる。この文章を書くために調べると題名は『家庭の秘密』というドラマだった。なぜドラマの題名がわかったのかというと、主題歌から調べたからである。その主題歌とはユーミンの『あの日に帰りたい』という歌だった。男女の恋愛が破滅し、もう一度やり直してあの日に帰りたいという内容の歌である。もしあのときカラビナを回してかけていたらリュックサックははずれず、無事山行は続いていた。まさにあの時に帰りたい気持ちでいっぱいだった私の心にこの歌は強烈に響いた。

あの事故以来、私は岩登りが嫌いになった。いわゆるトラウマになったのかもしれない。それまでのスリルを

味わう岩登りから遠ざかり、冬山縦走などもつばら陰峻な尾根を歩くだけの登山を行うようになり、私は山岳部ではダメ部員になってしまった。

ラジオからユーミンのこの歌が流れて来ると、赤沢山のあの事故を思い出し、リュックサックが落ちていく光景が頭をよぎる。そしてあの時、事故が起きずにそのまま登攀を続けて山行が成功していたら、ますます危険な岩場へ挑戦し、命を落としていたかもしれない……。だから失敗してよかったのだと、都合のいい論理が思い浮かぶ人間に私はなってしまったことにも気づくのである。



木曽駒ヶ岳から見る八ヶ岳方面

裁判傍聴

廣澤 重穂

黒の上着に黒パンツ姿の、四十歳過ぎの女性検察官が、
衝立の向こうの証人に尋問する。

「Bさん(被害者)は電話で何と言っていましたか?」

「……、部屋に連れ込まれ、性的暴行を受けたって」

被害者の男友達だという証人は、もちろんこちらからは見えない。やや緊張したその声から、大学生らしき年頃を想像させる。

「性的暴行とは? 具体的に」

「……、服を脱がされ、下半身をいたずらされたって」

「挿入されたと言っていましたか?」

「……、いえ。いたずらされた後に、服に精液をかけられた、と言っていました」

口に出すものはばかられるような言葉が飛び交う。とはいえ検察官の物言いは、機械的で抑揚がない。

ここは「強姦・強姦未遂」事件公判が行われている東

京地方裁判所の第七二二号法廷だ。

十二月初旬のある冬晴れの日、霞が関にある東京地方裁判所に出掛けた。むろん当事者としてではない。掌編小説のネタ探しだ。

何を書くのか悩んでいると、ふと「裁判」の文字が浮かんだ。現実社会で最も人間臭がし、ドラマがありそうな場所だ。加害者に対する憎しみ、被害者の悔しさや無念、事件の陰に埋もれた涙の数々――。

しかし思い付いた方がいいが「物語」が浮かばない。ならば「行くっきゃない」というわけで、ここ東京地裁にやって来たのだった。

多くの公判の中から選んだのは「強姦・強姦未遂」事件。検事と弁護士との激しいバトル、被告人のふてぶてしい顔など、興味が尽きない。期待を胸に裁判所内を一時間はどろろついた後、定刻通り法廷内に入った。

定員五十名ほどの傍聴席は横長で、思ったより狭い。しかも最前列席からは、裁判当事者たちに手が届きそう。裁判初心者の私は遠慮がちに後方の席を陣取った。

さあ、どいつが被告人だ。いた、いた。弁護士席の前で、二人の拘置所職員にはさまれた男。極悪非道の風貌を想像していたが、黒縁メガネをかけた、三十五歳前後のサラリーマン風の男だ。ちよつとガツカリ。

やがて裁判長と二人の裁判官が入廷。書記官の「起立」の声。いいぞ、いいぞ、この緊張感。こうでなくちゃ。やがて検察官が尋問を開始した。

「あなたはBさん（被害者）とどのような関係ですか？」

「友達です」

「何時頃、電話がかかってきましたか？」

「朝の六時頃です」

しばらくして知ったことだが、すでに何回か公判が行われており、この日は検察側証人に対する尋問だった。

深夜に性的暴行を受けたという被害者が、明け方、証人に電話で相談したという。その内容を聞かれていたのだ。

検察の尋問が終わると、次に弁護側が質問に立った。

「なぜ、知らない男の部屋に行ったのか、それについて被害者の女性は何か言っていましたか？」

「自分は医者だと言って、一人で帰るのは危険だから

車で送る、と言われたそうです」

「以上です」

え、弁護士の尋問、もう終わり？ 被告人が医者？

事件全体が見えないだけに、何がやら分らない。

分らないままに裁判が進む。眠くなってきた。

検察官と弁護士の丁々発止もなければ、傍聴席も静かだ。さして重要とは思えない質問が繰り返され、そしていつの間にか閉廷。

消化不良のまま帰宅すると、その夜、法廷で得た情報をもとにネットで調べてみた。すると被告人は、ネットニュースに載るほどのプチ有名人だった。四十一歳の彼は葛飾区の眼科病院の院長とのこと。警察に同様の被害相談が寄せられており、他にも余罪があるらしい。

登場人物としては派手だが、このスケベ医師に「哀しみ」が見えてこない。「闇」を抱えるからこそその犯行だろうが、今日の法廷だけでは何もわからない。

どうやら掌編小説のネタ探しは、徒労に終わってしまったようだ。願わくば今日の体験が、いつの日か小説ネタとして活かされますように。そんな一日だった。

紙塑人形

田原 敬

一九九七年頃、私は趣味として人形作りをやっていた。紙塑人形である。昭和の初めに鹿兒島壽藏先生が創案したもので、テラコッタ（素焼き人形）は粘土で作るが、紙塑人形は和紙を用いる。和紙を含むために丈夫だからだ。鹿兒島先生は、何処の土地の和紙が良いのか、随分試して研究をされたと聞いている。

紙塑人形だけでなく、記録を見ると、昭和十一年上野の帝展（後の日展）で、後に人間国宝となる鹿兒島壽藏、平田郷陽、堀柳女などの人形が入選し、人形作家として芸術の世界へ大きく踏み出して、人形作品の芸術としての地位を高めたとある。

そしてその後、新しい素材や手法が取り入れられ、人形の持つ魅力を一層引き出し、その世界は多様な展開を見せるようになったのである。

二〇〇九年の展覧会の記事には、以下の様にある。

紙塑人形の独特な技法で重要無形文化財保持者に認定され、アララギ派の歌人としても活躍した鹿兒島壽藏（一八九八―一九八二）が昭和五七年に八三歳の生涯を閉じてから、既に四半世紀が過ぎ、生誕一〇〇年・没後十五年の記念展からもうすでに十年以上が経過した。東京ステーションギャラリーは、現在東京駅丸の内駅舎保存・復興工事により休館中のため、「旧新橋停車場 鉄道歴史展示室」を使用しての展覧会の企画で、壽藏芸術を見ることが出来る。

私が始めた頃、鹿兒島先生のお嬢さんの成恵さんが、その当時既に八十歳位で、練馬区豊玉に住んでおられ、毎年一週間、銀座の松坂屋別館で展覧会を開き、生徒全員が自作の品を出品していた。私は、この展覧会を見て是非人形をやりたいと思い、鹿兒島先生宅の成恵さんの教室へ通い始めたのであった。

同じ仲間と一緒にやっていた竹田秋男さんは、大変上手で、実に見事な作品に仕上げ、皆から高く評価されて

いた。彼の作品は、大変素敵で手際が見事、品格があり、
見ても飽きない。

永年宮内庁に勤務され昭和天皇の侍従をされたと聞いているが、人物としても人から好かれるタイプで、既に十年近くお逢いしていないが、電話での交流は続いている。

私は現役で働いていた当時、会社に労働組合が突然結成され、以来、ストライキが度々起こり、総務を担当している立場上、趣味の人形作りは諦めるしかなく、とうとう人形作りを止めてしまった。

成恵先生も亡くなられ、以来、人形作りは終わってしまった。

今でも人形には、大変、関心がある。



企業OBペンクラブ入会記

長尾 進一郎

三月〇日

会社時代の先輩から突然のメール、開くと「企業OBペンクラブ」なる集まりがあり、エッセイ、俳句、川柳など様々な分科会があって、各人が好きな分野で楽しんでいる。参加してみないか、というお誘いだった。

うーん、小学校時代、作文や読書感想文が大の苦手だった私にとっては無縁の世界ね、と思いつつも、一応ホームページを覗いてみる。プロの作家かと思うような論説、紀行文、俳句等々、これは逆立ちしても真似ができないと悟り、お断りしようと決める。

ところが別の自分が顔を出した。会社を退職して二年、人と話をする機会がめっきり減った。このままだと社会との繋がりが無くなってしまうかも……。とりあえず会員になって、気が向いた時に顔を出す位ならできるかもしれない（そういう中途半端なことではできないことが入

ってから分った）、そんな甘い考えで、入会を検討したいと返事をしてしまった。

三月△日

さすがに先輩も心配になったのだろう、まずは分科会のどれかを見学してみてはどうか、という話になった。写真を撮るのはまあまあ好きなので、「フォト句」の会を見学させて頂くことにした。

青少年センターに連れて来て貰ったのは三月度のフォト句会の日。お題写真に合わせて詠んだ「つけ句」と、自分の写真に句を添えた「自由句」が全員分、無記名で紹介され、メンバーが投票した上で批評する。それぞれ美しい写真と個性的な句のようだ。そして見学者の私にも投票と批評をせよとの突然の仰せ、良くわからないままエイと投票句を選び、思いついたことを言ってお茶を濁す。メンバーの方々が歯に衣を着せず、ずけずけと批評をされるのには少し驚いた。それだけメンバー同士が親密なのだろう。中村プロマネのコメントが、静かな口調ながら鋭く核心を突いていることに痛く感心。フォト

句会の楽しい雰囲気伝わってきた。

句会が終わった後は、場所を移して食事会。駅近くの中華店で料理とお酒を楽しみながら、昼間に増して話が弾む。皆さん歴史、国際、文学等々幅広い知識と人生経験が豊富なのにまた感心。隣席の中村プロマネが、フォト句会の成り立ちや活動の現状について懇切に説明してくださる。

食事会もお開きとなって会費を払おうとすると、見学者の私からは会費を徴収しないとのこと、これでフォト句に参加しないと言ったら、袋叩きにされそうだと酔いが醒める。

四月×日

とうとう覚悟を決めて正式に入会し、フォト句メンバーとなって初めての句会。つけ句と自由句を、それなりに時間をかけて考えてきたつもりだったが、投票結果はと見ると、自分の句には殆んど票が入っていない。句、写真とも、自分が意図したものは見る方にも分って頂けるかと漠然と期待していたが、言いたいことを明確に示さないと、人には伝わらないということを痛感した。

四月△日

初めての月例会に参加、入会の挨拶をする。何人かの方々にやさしく声をかけて頂いて有難い。別の先輩の「会員講演」を聴講する。いつの間にこんなに詳しい専門知識を勉強したのかと感心する。会員講演は有志の方だけがやるのかと思ったら、入会した者は全員がやるのだと聞いて唖然。

五月○日

今月のフォト句会で、私の自由句に三票が入り、初めてホームページの月別作品紹介に載せて頂く。添えられている中村プロマネのコメントにお褒めの言葉が入っている。「やったあ!」と思ってプロマネの解説文「フォト句作成の要点」を見ると最後の行に「本人の意欲を高めるために、過大に褒めることもある」……まさにこれだ! 肝に銘じよう。でも写真に合わせて句を考える楽しさが少しだけ分った気がした。フォト句に出会わせてくれた先輩、プロマネ、メンバーの方々に感謝。

「ペン」活動を楽しもう！【会員募集】

企業OBペンクラブとは

男女年齢を問わず、「書くこと」「読むこと」に興味ある人たちの集まりです。企業OBと冠していますが参加制限はありません。プロの作家集団でもありません。作品を楽しみ、意見交換を楽しむ人たちの集まりです。できた作品は当会のホームページにアップして広く一般に展示できます。月例会と分科会で構成されます。

（詳細は「企業OBペンクラブ」のHPをご覧ください）

月例会 各分野で活躍しているゲストの講演会や会員による講演等で研鑽を重ねています。

分科会 「800字で何でも書く」「エッセイを書く」「掌編小説を書く」「俳句」「川柳」「フォト句」（写真に句をつける）「写真」「文芸作品を読む」「英語を読む」「時事問題を語る」一人でいくつこなしても結構です。

懇親会 会後はたいてい懇親会です。これが楽しみで、という人もいます。

入会をお待ちしています。

活動場所

東京・代々木にある「国立オリンピック記念青少年総合センター」で主に活動。

詳細は (<http://nyc.nive.go.jp/>) をご覧下さい。

入会金、年会費

入会金はなし。

年会費は一万五千元。但し、首都圏以外は現在一万円。初年度はいずれも入会時期により減額。

月例会、分科会見学

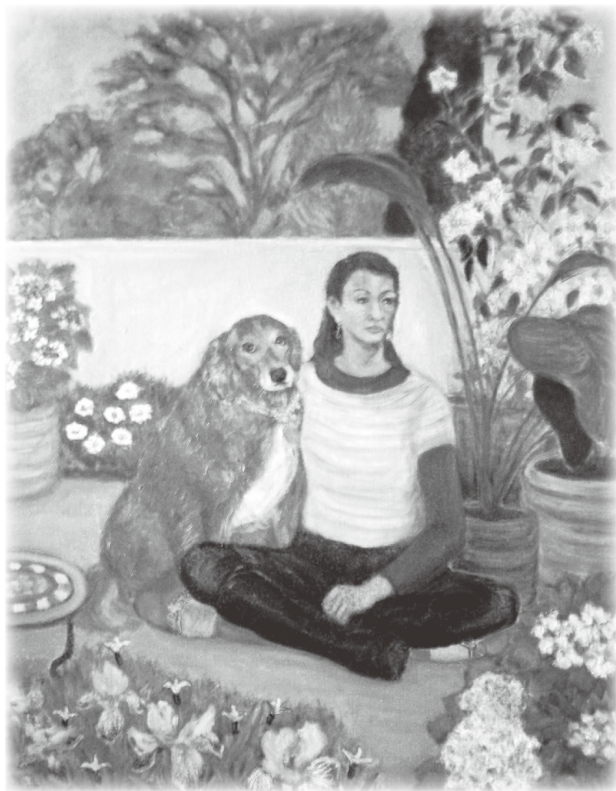
大歓迎です。ご自由に無料でご参加下さい。

希望される方は事務局長宛 (kgobpencilclub@gmail.com) にメールでお願いします。

入会希望

右記同様に事務局長宛 (kgobpencilclub@gmail.com) メールでお願いします。

創作短編



油彩画 福本 多佳子

鶴を折る人

馬場 真寿美

綺麗な指だった――。

細かい模様の入った緋色の千代紙を、角と角をきつちりと合わせ、両手の親指を左右にスーッと滑らせて折り線をつけると三角形ができる。そして、それをさらに半分に畳んで、今度は裏も表も正方形になるように開く。

佐和は、その流れるような手つきに見惚れていた。男にしては、華奢で綺麗な指である。

昔から、佐和は殊更、手の美しい男性が好きだった。佐和の頬にそっと添えられる手。佐和の手を引く温かな手。そして、熱い血の通った佐和の柔肌を優しく愛撫する手。それらを思い起こして陶然としていたのだった。

手際の良い器用な指さばきによって、千代紙は様々な形に変え、あるいははくると向きを変えられながら、瞬く間に一羽の折鶴に仕上がった。

最後に、その折鶴に命を吹き込むかのように、両羽を広げ、頬を膨らませてふうーっと息を吹き込むと、

「ほら母さん、できたよ。どう？ うまいもんだろ」

由紀夫は白い歯を見せ、佐和に向かってにこやかに微笑んでみせた。

返事こそしないものの、佐和は嬉しそうに少女のような笑みを浮かべている。傍らでベッドを整えていた沢木春奈だけが、目を丸くしながら、

「本当、ビックリ！ 柏木さんて、すつごく器用なんですわね」

と、声をあげた。

そんな春奈をニヤリと見返り、
「それでも外科医の端くれだからね。手先の器用さでは誰にも負けないつもりだよ」

そう言って、柏木由紀夫は肩を竦めてみせた。

「どれ、少し寒くなってきたみたいだ。そろそろ窓を閉めようか、母さん？」

夏も、もう終わりに近いのだろう。

陽が落ちれば気温はかなり下がってくる。佐和を気遣

い、由紀夫は、椅子の背に掛けてあった自分の上着をそつと母親の肩に着せかけると窓辺に足を向けた。

窓辺の花台には薄ピンク色のベチュニアが咲き乱れている。窓ガラスに手をかけながら、由紀夫は伏し目がちの一つ大きく息を吸い、そしてゆっくりと吐いた。

ここは東京郊外にある、丘陵地帯に建てられた介護付きの有料老人ホームの二階の一室である。比較的富裕層が利用する「高級な施設」という触れ込みで、入居費用もそれなりに高額だったこともあり、細部にわたってサービスは行き届いている。

由紀夫は東京にある大学病院に勤務医として勤めていた。毎日、時間に追われる忙しい身ではあったが、暇をみては、できる限り母親の見舞いに訪れるようにしている。

以前は、妻子と共に、由紀夫は世田谷にある屋敷で両親と同居していたのだが、父親が亡くなるとその喪失感によるものか、佐和に痴呆の症状が出るようになった。

しかし、痴呆といっても佐和の症状はごく軽いもので、その気があれば、自宅で介護することも決して不可能で

はないと由紀夫は思っている。しかし、佐和を自宅で看ることに、妻の聡子は頑として首を縦に振らなかった。世間一般の嫁姑の例に漏れず、佐和と嫁の聡子もまた折り合いが悪かったのである。

窓の外には、眼下に手入れの行き届いた中庭が広がっていた。中央には涼しげな噴水が配置され、周りには木製の白いベンチが並んでいる。形良く刈り込まれた植え込みと、そして、適度に枝を広げた緑の木々がベンチの上に心地よい木陰を作っている。

つい先ほど見下ろしたときには、日光浴を楽しむ入居者で溢れ返っていたというのに、陽が蔭ってしまった今、もうそこに人影はなかった。

「佐和さんは本当にお幸せな方ですね。息子さんがわざわざこうしてお見舞いに来てくださるんですもの」

ひと仕事を終えた春奈が、誰に向かって言うのでもなく、由紀夫の背後で溜息をつくようにつぶやいた。

「……そう？」

由紀夫が問い返すと、

「そうですね。柏木さんがいらっしゃるときは、佐

和さん本当に幸せそうですもの」

と、春奈が鼻にかかった声を出した。

「そうなのかな。僕は父によく似ていると言われることが多かったから、母はほくを通して、若き日の父を見ているのではないかと思っているんだ。実際、親父とお袋は、息子の僕から見ていても呆れるほど仲が良かったからね」

（それじゃ、佐和さんのご主人はずいぶん男前だったに違いないわ）

春奈は心の中で人知れず考えた。

（だって、目の前にいる柏木さんだって、五十も半ばを過ぎている年齢だろうに、こんなに恰好いいんですもの）

ときに、年齢を重ねたからこそ醸し出される雰囲気や魅力を持つ男がいる。柏木由紀夫にはそういった類の、若い男にはない余裕と豊富な経験に裏づけされるセレブ感があつて、それが若い春奈には眩しかった。

（佐和さんは、なんて幸せな女性なんだろう）

恍惚とした表情は、今は亡き愛する男性の面影を息子

の姿に重ねているからなのね、と春奈はひとり納得して感傷に浸っていた。

仕事を終えた春奈は帰り支度をしながら、同僚の上田敏子に、今日見聞きしたことを報告せずにはいられなかった。大学の介護学科を出て間もない春奈とは違い、敏子はこの道十五年の大ベテランである。夫と死別した後、介護士の資格を取って、女手一つで一人息子を育てあげたしつかり者である。

ところが、敏子は春奈の話を聞くや、感心するどころかこれを一笑に付してしまった。

「馬っ鹿ねえ。春ちゃんはまだ若いから分からないのよ。惚れた腫れたなんて言ってるの最初のうちだけよ。男なんてろくなもんじゃないんだから。あたしなんて、こう言っちゃなんだけど、死んでくれてせいせいしたわよ」

「ええっー！ それって、敏子さんの場合だけじゃないんですかあ」

春奈は口を尖らせた。

「ん、もう！ 敏子さんにはロマンつてもものがないん

だから……」

「ふふつ。……そうね。春ちゃんの夢をぶち壊しちゃったかしら？」

敏子はその春奈を横目で見てくつくつ笑いながら帰り支度をしていたが、その手をふと止めると、思い出したように語り出した。

「だけど、親子二人で折り紙をしていたんでしょう？」

だったら佐和さんは、まだ幼かった柏木さんとの思い出に浸ってたんじゃないのかしらね。うん、……絶対そう。あの柏木さんなら、子どもの頃はさぞかし可愛い男の子だったろうし。子どもを産んだことのない春ちゃんには分からないだろうけどさ、子どもって本当に可愛いんだから。男の子は特にね」

「そうなんですかあ……？」

春奈は間の抜けた声を出した。

「ええ、そう」

（ましてや、あんなに良く出来た孝行息子だもの）

話しながら、敏子は遠くを見るような目で昔を思い出していた。

初めて乳首に吸いつかれた感触。お乳を吸いながら私のお腹の辺りをあの子は小さな手でいつもまさぐっていたっけ……。幼稚園に上がるとき、小学校に入学したときは、どちらのときもすごく不安だったのか、敏子の手をギュツときつく握りしめていた。

「あーあ。だけど、男の子は結局、お嫁さん次第なのよね。こんな結構なところに入れてもらってたって、佐和さんだったまにしか息子に会えないんじゃないかな。うちのボンクラも、春ちゃんみたいに優しい娘に巡り会って結婚してくれたらいいんだけどねえ。さて……と、今日の晩御飯は何を作ってやろうかしら？」

それだけ言って、「お疲れさまー」とひらひら手を振りながら、疾風のごとく帰っていく敏子の後姿を、春奈はポカンとして見送っていた。

手の綺麗な男性だった――。

あの人は、最後に……、

特攻に出る前に、人目を忍んで私に会いに来てくれたのだ。佐和は折鶴を前に、思い出していた。

加納周平――。

忘れはしない。

初めて好きになった人だもの。

燃えるような熱い思い。

あの人は私をいきなり抱きしめて、

私の顔をそっと仰向かせ、唇を重ねてきた。

火傷しそうなくらい熱かった。

あの人が触れた唇。

佐和は左手の中指で、そっと自分の唇をなぞった。

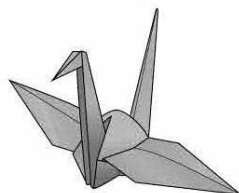
そして、こう言ったの。

「ごめん」……って。

だから、私は鶴を折った。

何羽も、何羽も……。

どうか、あの人が無事に私のもとに還って来れますように……と。



お爺ちゃん聴くわヨ

清水 勝

綾香の家は都心のマンションに親子四人で住んでいる。祖父母は国分寺の大手不動産会社が分譲した一戸建の家で悠々と老後生活を楽しんでいた。初孫である綾香は物心ついてからは遊びに行かなくなっていたが、大学生になって、キャンパスが八王子ということから、今日も両親の使い物を届けに祖父母の家に立ち寄った。

「ありがたいね。綾ちゃんが来てくれるようになって、私たちは少し若返ったようだよ。何んたって、綾ちゃんは可愛いし、氣立てがいいもの」

「綾ちゃんが俺の話を聞いてくれるのが嬉しいよ」

「あなたの話って、昔の仕事の自慢話ばかりじゃないの。私なんかは、また始まったかと避けてしまうのに綾ちゃんはしっかり聴くんだよ。感心ね」

「だって、お爺ちゃんの話って大学生では体験していない社会の動きや、会社の戦略のような話もあるから、

興味を持って聴いているのよ」

「そう言ってくれると嬉しいな。今までの体験をいっぱい話したいよ。実際のところ、綾ちゃん以外は余り興味を持って聴いてくれないんだ」

「そうなのよ。この間もお爺ちゃんに老人会からお話の依頼があったの。でもね、時間は三十分程度で、しかも年寄りが興味を持てるように話して下さいって、条件が付けられたの。張り切って準備して行つた割にはガツカリして帰ってきたのよ」

「お爺ちゃんは、どんな話をしたの？」

「今から三十五年ほど前、ドイツのデュッセルドルフに居たから、ベルリンの壁が崩壊した話をしたんだ」

「どんな反応だった？」

「みんなボカンとしていた。ベルリンの壁なんて知らなかったみたいだった。話していて、張り合いがなくてね。嫌になって途中で終わりにしてしまつたよ」

「じゃあ、お爺ちゃん。今日は三時までには大学に行けばいいから、老人会で話そうとしていたことを聴かせてよ。東西ドイツの合併って興味あるもの」

祖父は現在七十五歳。今から三十年ほど前に会社のドイツ駐在事務所長としてデュッセルドルフで三年間単身赴任していた。父の話によれば、祖父は役員になってもおかしくない程の仕事をしていたのに、運がなかったのか子会社の常務で終わってしまったらしい。

祖父は得意になって、ベルリンの壁について話し出した。もう止まらない。東西ドイツの話、ベルリンの壁が生まれた背景。そしてチェコスロバキアで「プラハの春」と言われる体制が生まれた話から、東欧民主化の流れ、遂には二十八年間存在し続けたベルリンの壁が民衆の自由への願いの下に崩壊した様子等々を力強く話した。祖父は話し終えると、部屋から小さな石の欠片を持ってきた。

「これがベルリンの壁だよ」

コンクリートの塊だが、片面にはペンキが塗られていた。ベルリンの壁に書かれた抗議の落書きの跡だそうだ。

「当時は、これが記念品としてベルリンの街角で売られていたが、私はね、ハンマーを持って壁の残骸を叩きに行ったんだよ。抑圧から自由化への願いを込めてね」

「お爺ちゃん、やるじゃない」

祖父はとても満足した様子だった。

「ありがとう。綾ちゃんが、うなづいたり相づちを打ってくれたから、気持ちよく話せた。いやあ、ついつい熱が入ってしまったな。さあ、今からで授業に間に合う？」

「大丈夫よ。貴重なお話を聴かせてくれてありがとうネ。戦争に負けたドイツが東西に分けられ、それから四十五年後にドイツが統一されたというのは、私の生まれる前の出来事だから殆んど知らなかったわ。それで思ったんだけど、韓国と北朝鮮もドイツのようになればいいのね」

「そうなんだよ。当時はドイツの例が朝鮮統一の教訓になると期待されていたんだが……」

祖父はもっと話続けたい様子だった。

「お爺ちゃん、ゴメン。じゃあこれから授業に向かうわ」

「そうか、頑張れよ。今日のお礼という訳ではないが、本代の足しにね」

「私の方こそいろんなことを教わたのに……」

「気にしなくていいよ。お爺ちゃんは綾ちゃんより小

遣いがたっぷりあるからな」

祖父の気持ちだと思ひ、封筒を遠慮なく受け取った。本代の足しにでも、と言っていたので二、三千円かと思つていたら、何と一万円札が入つていた。

三週間ほど経った頃に、母から祖母に渡して欲しいといわれた物を届けに国分寺の家を訪ねた。

「綾ちゃん、来ていたのか。ちよつとお願ひがあるんだけれど……」と、祖父が顔を出した。

「あの後でね、会社のOB仲間に会う機会があつて、ついつい綾ちゃんの自慢をしたんだよ。とっても可愛くて東西大学に通っている孫が時々訪ねてくれるって」

「恥ずかしいわ」

「ついでに、私のドイツ時代の話を真剣に聴いてくれたんだ、ということもね」

「そんなことも」

「随分羨ましがられてね。岡嶋君というのだけれど、彼の息子や孫は福岡に居るようで、話す機会もないから寂しがっていた」

「……………」

「そこでね、『湯本さんの優秀なお孫さんに会いたいのんだ。チョットは俺の話も聞いて貰えないかな』と、頼まれたんだ」

「あんた、バカね。綾ちゃんはあんただから、嫌々なのに無理して楽しそうに聴いてくれたのよ。他人の爺さんの話なんか聴きたくないのに決まつてるわヨ。綾ちゃん断りなさい」

「まあ、お前の言うのも判るが、岡嶋君は病気で元気がないんだ。人助けだと思つて会つて話を聴いてやつてくれないか。もちろんお爺ちゃんも一緒に行くから」綾香は困つたなと思つた。祖父よりも少し歳上でガンをも思つていて自宅療養中だとか。次に何かが起これば命にも関わるようだとのこと。

「彼はね、理系の人間だけれど、定年後は夏目漱石や森鷗外の作品研究に夢中になっているんだ。自費出版の本まで出している。これだよ」

先日、一万円の小遣いをもらった手前もあるし、祖父の大事なお友達の依頼でもあり、これも祖父孝行の一環かなと思つた。漱石も鷗外も興味のある作家だから、話

を聴いてみようという気になった。

「お爺ちゃん、いいわよ。勉強されている人の話だから、私にも役に立つと思うもの」

「ありがたい。岡嶋君の喜ぶ顔が眼に浮かぶよ」

その夜、祖父からメールが届いた。

——岡嶋君は大喜びだった。もう一度勉強し直すと言っていたよ。善は急げということで、来週の火曜日三時からお願いしたいとのこと。話のテーマだけれど、森鷗外の『舞姫』の話聞いて欲しいそうだよ——

——お爺ちゃん、メールありがとう。十五日の火曜日三時に日野駅の改札でOKよ。当日よろしく！綾香——

当日の岡嶋さんはまるで青年のような感じで、『舞姫』を書いた鷗外の気持ちを熱心に話した。

「実はこの小説に登場するエリスのモデルとなったエリーゼが、一八八八年に鷗外が帰朝した僅か四日後の九月十二日に、日本に来たのだよ。知っていた？」

「いいえ、凄いドラマですね。鷗外を追っ掛け、はるばるドイツから日本に来たエリーゼはどうなったんですか」
「二ヶ月近く日本に滞在していたんだが、その間に日

本の事情や森家の様子について説明を受け、泣く泣く傷心のままドイツに帰ったんだよ」

「でも、鷗外にとっては辛いドイツでのエリスの思い出を、わざわざ小説にしたのはどうですか？」

「さすが、いい質問をしてくれるね。日本の将来を囑望されたエリートとしてドイツ留学をした鷗外。その鷗外を追いかけてドイツ人女性が来日したという話は、明治の指導層・知識層に広まり、いわばスキャンダルとして何かと噂が流れていたんだ。頭脳明晰な鷗外は、現在の政治家のように『身に覚えがありません』と言うだけでは説得力がないと考えたんだね」

「それで、どんな言い訳をしたんですか？」

「鷗外の処女作『舞姫』にエリス＝エリーゼを主人公にして、その他の登場人物に細工を施したんだ。それも当時の有力者らしい人物を鷗外の味方のようにね」

岡嶋さんは、舞姫に込められた明治二十年頃の社会状況や森家の様子を語ってくれた。少し微に入り過ぎて解らないところもあったが、綾香は決して目を逸らさず聴き入った。

帰宅後、祖父からメールが届いた。

——岡嶋君は大喜びだったよ。今回のように女子学生に話を聴いて欲しいと思ってる知的老人いや知的高齢者はたくさんいるなという話題になり、二人で飲みながら語り合ったよ。その話の中で、知的高齢者と女子学生とを上手く組織化できれば、日頃退屈な知的高齢者は張り切って、自分の経験を踏まえた話を女子学生に受け入れられるように、さらに勉強もするのではないかという話へと発展したんだ。お爺ちゃんも協力するから、何かいい方法を検討してくれないか——

綾香は、祖父と岡嶋さんとの話を聴いた体験を基に考えてみた。

老人の方たちにもいろんな人がいる。老人クラブや地域でのお話し会には抵抗のある人もいるだろうし、知的満足度が満たされないと考えている人もいるだろう。また、高齢者が中心のカフェ的なものも盛んだと聞くが、老人が老人を相手に話をしているのでは張り合いがないのではないか。聴く方も話し手の過去話や自慢話なんて余り聴きたくないと思っっているだろう。

それと、昼間の図書館には知的高齢者がたくさんいて、凄く熱心に勉強している様子で、発表の場はそれぞれのホームページのようだ。でもそれでは一方通行だし、大して読まれているとも思えない。直接発表できる場が提供されれば意欲が倍加され、喜びになるに違いない。

話す相手が女子学生であれば、普段は縁が無いだけに張り切って話そうとするし、その反応に刺激を受け、若返るに違いない。女子学生にとっても、社会経験の豊富な知的高齢者の話には学ぶところもあるだろう。それに聴く力と相手に話させるコツが掴め、コミュニケーション力が鍛えられる。それにチョットした小遣いも期待できるかもしれない。まあ、これを目的にするのではなく、話したい、聴いて欲しいと願う知的高齢者へのボランティア活動と割り切ってもいいのではないかと思った。

こうして、綾香とその仲間はユニークな新しいボランティア活動を立ち上げる準備を開始した。

間もなく皆さんの所にも話を聴きたいと女子学生が来るかもしれませんよ。

私が作った女

内藤 真理子

今は昔、中国の殷の時代。六百余年にわたって継続した殷王朝の最後の王、紂ちゆうの御世のことでございます。

後の世の記述では、絶対的権力を持つ紂王は、淫蕩に耽り、過酷な政治を強いて悪逆非道の汚名を残したとございますが、『史記』には、

『帝紂は、弁舌さわやか、動作もすばしく、見聞きしてものごとの本質をつかむことに敏く、才能も腕力も人よりすぐれており、手で猛獸を打ち倒す事も出来た』とあります。すなわち、天性の雄弁家、行動は敏捷、見聞したことに對する理解力は鋭く、臣下のどんな諫言も言い負かすことができた。

紂王とは体力も知力も並外れた人物だったようでございます。

長く続いた殷王朝の現人神として天下に君臨していた

紂王は、その資質ゆえ向かうところ敵なし。酒と女を好み、驕り高ぶっていたのでございます。

一方、私がお仕えして居りました周公は、ひそかに天下を狙っておりました。彼は殷王朝の重鎮で、紂王にも意見が言える立場ではございましたが、思い通りに紂王の意識を操縦することなど至難の業。その上、紂王自身、己の愚かさに気づけば、賢君になるやもしれません。それではいつまで経っても周が天下を取る事など出来ないではございませんか。

周公は、一分の隙もない紂王を陥し入れるには女性を使う以外に策はないと考えました。そして情報を集めますと、有蘇ウソ氏の娘は絶世の美女だという噂に行きつきました。

〈美女の娘は美女であらう。美貌はそれ自体強力な武器になる〉

そのように思いました周公は、秘密裏に有蘇氏の元に赴き、まだ一六歳の未婚の彼女が結婚した後生まれであらう女の子を、養女に迎える交渉をしたのでございます。それは途方もなく遠大な計画でした。

美貌の娘は嫁に行き、やがて美しい女の子を生んだのでございます。そして周公はすでに約束してあった通り、その赤ん坊を引き取りました。すべてが秘密裏に行われたのでございます。

ここからが、周公が白羽の矢を立てた教育係、彼の側室である私の出番でございます。

女の子は、周公の名前、旦に女偏をつけて妲^だと、有蘇氏の姓の己^きをとりまして、妲己^{だき}と名付けられました。

それからというもの、周公は日々、紂王の一挙手一投足を観察し、思考、嗜好、習慣まで私に叩き込んだのでございます。周公自身は陰から見守るばかりで、妲己と直接会うことはございませんでした。彼女の成長に自分がかかわっていることを、紂王が知るのを怖れたのです。

私は周公の望み通りに妲己を教育いたしました。可愛らしい妲己は、生まれながらに憐憫の情を持つ賢い子供でございました。この子を見ていると人間の本质は善であると感じさせられます。ともすると私に甘え絡みつき、小さな手で私のおっぱいを探ったりも致します。乳母が居りますのに……。それでも教育係の私は心を鬼にして、

決して懐かせることはございませんでした。こんなに幼いころから、紂王に愛されるように、又、国を亡ぼすほど贅沢に、非情に育てなければならぬのでございます。

妲己は中肉中背、目鼻立ちも、きつすぎたり、優しすぎたりと言った特徴はまったく無く、すべてが整っているのでございます。ゆるやかな体の線も、引き締まった上品なお顔も、まるで芸術品のように光輝いております。やがて私の教育の甲斐あって、妲己は紂王と同じ思考や嗜好を持ち、美しい上に、声もしぐさも、紂王の心をとるかのような女性に仕立て上がったのでございます。そして周公の当初の計らい通り、妲己を有蘇氏のもとに返し、有蘇氏が紂王の機嫌を損ねるように仕向け、彼女を献上して許しを乞うたのでございます。

紂王は妲己を見て狂喜しました。

「これ程完全な女性がいるのだろうか、妲己こそが、私が求め、天が私につかせてくれた天女だ」

そう、彼女こそ紂王のために、紂王に好まれるように、天に代わって、私の主、周公が遣わせた女でございますもの。

姐己のとりこになった紂王は、彼女を悦ばせるために贅の限りを尽くし、毎日管弦や踊りを催し、酒や遊興に浸ったのでございます。姐己は思いのままに振舞い、華麗な宮殿を更に美しいものに造り替え、富を得るために税金を重くするよう提案しました。他のものがそのようなことを言おうものなら紂王は激怒して首を刎ねるのが常でございましたが、姐己が申しますと自分が今思ったことだと、更には自分の言葉だと錯覚するのでございます。まるで同一人物のように……。

当然でございます。姐己自身すら自分が作られた女だと知らされないで、紂王と同じ心を持つように教育されたのですから。

「もっとスケールの大きな楽しみは何かしら」

「そうだな、酒池肉林はどうだろう」

「では美しい踊り子を千人集めましょうよ。それから廷臣も同じ数だけ」

民、百姓は駆り出され、何日もかかって池を掘り、池の内部を石で固め、掘った土で山を築きました。

出来上がると、池に酒をなみなみと注ぎ、築山には木々

に見立てた串刺しの肉を立て、裸の男女を千人ずつ放ち、酒を飲み、肉を喰らい、男女が追いつ追われつ、絡み合い、酒池に落ち、と淫らな有様がこれでもか、これでもかと飽きもせずに続けられました。

又、姐己は残酷な事を異常に喜ぶのでございます。教育の成果でございましょう。

人民が重税と政治不在に苦しんだのは当然のことでございます。不平を言うものが出ると、姐己は「炮烙^{ほうらく}の刑」と称する恐怖政策を思いつきます。それは穴を掘り、中で炭を真つ赤に熾し、穴の上に油を塗った銅柱を渡してその上を、罪人に歩かせたのでございます。

「油をたくさん塗り過ぎるとすぐに落ちてしまうのでつまらないわ。真ん中まで歩かせて怯えながら落ちて行く顔を見たいわ。人間の肉がジュウツと音をたてるのを聞くのもワクワクするでしょう」

何とエキセントリックな言葉でしょう！

紂王そのものではございませんか。幼い姐己が持っていた、清純なやさしさは跡形もなく消え去っております。

贅沢をすればお金がかかる。民に更に重税や使役を強いる。現実に苦しんでいる人々の間に、王室で日々行われている、金に糸目を付けぬ淫乱な遊興の数々、残虐非道の「炮烙の刑」の有様、それを樂しむ紂王と妲己の噂が広まりました。

ひそかに噂を広めたのはもちろん周公だったのですが……。そして妲己の教育が期待以上の成果を上げているのをひそかに喜んだのでございます。

「天下の民がまた苦しめられている……」

周公は、民衆の前では苦し氣にそう言い、彼らの怒りを上手に煽り、期が熟するのを、氣長に待ったのでございます。

それから二年の月日が経ちました。

妲己の極悪非道はもう紂王を凌駕し、なканずく彼の活力すら削いでおりました。

「天は、紂王が政治をないがしろにして、私利私欲にしり、民衆を苦しめているのを怒っておられる。天になり替わって私が成敗してくれる」

時は来たれり！ 周公が意を決した時には、殷の民衆

は、或は酒池肉林の遊興で腑抜けになり、或は重税と使役に疲れ果て、又兵に駆り出される不平不満で、勢いはなく、寝返るものも続出して、殷軍は大敗したのでございます。

紂王は一人戦場から踵を返し、馬に鞭打って都まで逃げ帰り、贅を尽くした望楼に火を放って自ら命を絶ったのでございます。

周公はそれを見届けた後、

「妲己は良い働きをしてくれたが、もう役目は終わったのだ。自殺してはくれないものか」

と私を伴って城の中を搜したのでございます。彼女は城の奥深くに居りました。私たちが入って行くと、待っていたように、ひとと周公の顔に目を当て、

「私は立派に役目を果たせましたでしょう」

そう言った妲己の整った顔は、憎しみと残忍さを湛えた凄惨な美しさでございました。

「わかつていたのか」周公の顔に悔恨の情がかすかに浮かびました。何をいまさら……。

「ぞくぞくする程きれいだわ！」私はつぶやきました。

目の前の姐己は、私の中に棲んでいる悪魔を完璧に表現した見事な芸術作品だったのです。

周公は期待通りに役目を果たしたとは言え、陶醉している私が許せなかったのでしょうか。

「こ奴を斬れ！」

私は本望でございました。

参考資料

『史記』 上

吉田光邦 訳

平凡社

『新十八史略』 天の巻

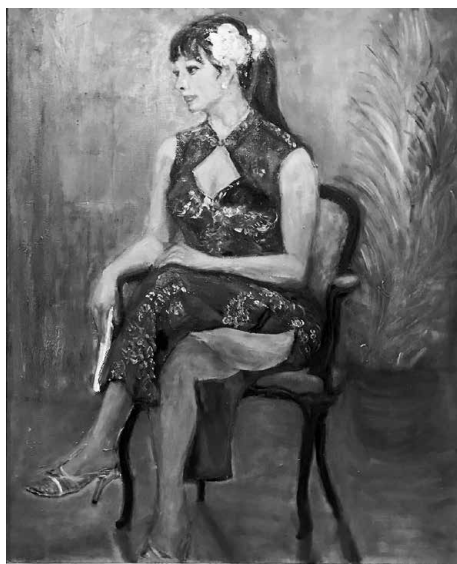
後藤基巳 他

河出書房新書

『小説 十八史略』

陳舜臣

講談社文庫



「赤い城」の夢

平尾 富男

子供の頃から聞きなれていた調べが鳴り響いている。

最初に聞いたのは父の書斎だった。『アルハンブラの想い出』のギター演奏を聴くたびに、夢多き青春時代を振り返る。いつかはあの「赤い城」、アンダルシアの宮殿に住んだ姫君たちの物語を身近に感じたい思いに、胸が膨らむのを禁じ得なかった。

今、中川健太郎は、そんな長年の夢がかなって、アルハンブラを訪ねている。近代ギター音楽の父と呼ばれるフランシスコ・タルレガが、曲の着想を得たと伝えられる憧れの宮殿の噴水を目の当たりにして、涙が出そうになる程の幸せを噛み締める。幼い頃からこの噴水を見知っていたような気さえする。さつき訪れたばかりの宮殿の噴水の迸りが、哀愁を帯びたエキゾチックで単調なギターのトレモロ奏法を想い起こさせる。

健太郎をスペイン旅行に駆り立てたのは、幼いときか

ら親しんだこの調べの記憶と、これまで実際に訪れることが叶わなかったアルハンブラへの想いだった。高校の化学の教師時代の知識を買われて親戚筋の中堅企業に転職した。以来何度も出張でヨーロッパに足を運ぶ機会がありながら、憧れの宮殿を訪れることはなかった。

ハーレム（後宮）という言葉の呼び起こす遙か遠い異国への甘酸っぱい憧れもずっと心のどこかで生き続けた。地中海を隔てたアラビアの『千夜一夜物語』の世界がジブラルタル海峡を経て、このアンダルシア地方に息を吹き返した。その夢物語は青春時代のひそかな恋慕の的だった。そのアルハンブラが、六十歳になった健太郎の目の前にやっと姿を現したのだ。

昔の教え子の真梨子が熱心に誘ったことも、健太郎の心に昔からの夢の実現に後押しをしたのだ。ひそかに健太郎に恋をした十五歳年下の女子高生も、今や写真を趣味とする熟女となっていた。真梨子もこの旅行には特別な思い入れがあった。学生時代に習ったスペイン語を生かせるからと、新婚旅行に選んだ先であったが、自尊心の強い夫が自分も自由に言葉を話せるオーストラリアへ

と変更してしまった。その後、子供が出来なかった真梨子を夫の両親が嫌っていたことも理由の一つとなって、同居していた夫の実家を飛び出してしまった。既に別居して自活するようになって三年も経っている。健太郎とは二年前に偶然に出会い、乙女心の淡い思い出が大人の女の思慕の対象となった。やがて、「先生」から「中川さん」、そして「健太郎さん」から「あなた」へと、真梨子からの呼び掛けも進化していく。

グラナダの市街からアルハンブラを望むと、丘陵の上に建つ宮殿の威容が迫ってくる。やっと手に入れた宮殿観光のチケットを手に、健太郎の体は嬉しさと震える思いがした。アルカサバと呼ばれる断崖の上に築かれた城塞が宮殿の西部に隣接されている。かつては城壁が二キロメートルも続き、兵士の宿舎が建ち並び三十以上もの塔が林立した難攻不落の要塞だったといわれる。現在は柱と土台が残るだけで、健太郎たち一般観光客は外から眺めるだけの存在ではない。

宮殿は、このアルカサバ城砦跡、イスラム建築の最高

傑作とされる王宮、そしてヘネラリーフェ離宮で成り立っている。順番待ちの長い列に並ぶ観光客が、グループごとに或る間隔を置いて入場を許可されると、まずは王宮に導かれる。その異国情緒豊かな建築構造の精緻さと思わず息を呑むほどだ。王宮は宮殿北側に位置し、歴代二十一人の王が四人の正妻や妾たちと生活を共にしたところである。使われた石材や木材はもちろん、その工法や装飾技術はその時代の最高峰を極めたものであったことが素人の目にもよく理解できる。

宮殿の東に少し離れて建つヘネラリーフェは、宮殿の主である王が政務から逃れて息抜きをしたり、或は王室の私的な楽しみのために十四世紀はじめに造られた夏の離宮であったという。庭園の美しさは今でもその名残を留め、噴水や池が効果的に配置されている。

感極まって胸の高鳴りを押えきれず歩を進めるごとに、新しい世界が開けてゆく。中でも全長五十メートルにわたって噴水が並んで配置されたアセキアのパティオ（中庭）は、アーチを多用した回廊とパティオの周囲を飾る一面の花との調和が実にみごとだ。どこまでも高く青々

と抜けるような空の下で、噴水の水が勢いよく回り一面に飛び散っている。

グラナダ市街のホテルのベッドの上で、今日自分の目で確かめた噴水の迸りを思い出しながら、いつしか在りし日の宮殿の姫君たちの物語を夢想しはじめていた。真梨子は隣の浴室でシャワーを浴びている。

晩秋の朝の太陽が昇り始めている。白い外壁が太陽の光に照らされ赤い色に染まる。

「赤い城」と呼ばれたアルハンブラ宮殿、南スペインの乾いた高地にあるグラナダのサラセン王のハーレムに朝が静かに訪れる。お妃の一人、ファヒマが溜息を漏らしながらつぶやいた。

「昨晚、私は夢を見たのですよ。昼間の太陽の熱を孕んだ乾いた空気を突き抜けて、降るような数多の星の間から、緋色のマントを靡かせながら一人の美しい若者が

白銀色の裸馬に乗って駆け下りてくるのを」

ファヒマの言葉を聞きつけた傍らの召使の女は、女主人の横顔を覗き込むように応じた。

「それは昨日謁見の間を二階の廊下からこっそり覗いていたときにご覧になった若者のことではありませんか。隣の国から使者で来た若君だったですよね。きりりとしたその横顔をほんの少しだけ格子の隙間から見ただけで、私も惚れ惚れしてしまいました。でも、こんなことを他の奥方たちに聞かれてはいけませんわ」

「あら、私の夢に出てこられた王子様は、昨日王様が謁見された方のことではありませんよ」と、ファヒマは顔を赤らめながら言うのと、いそいそと朝の身支度をその召使に促した。

——王様はもう一月もの間、あの光り輝く真珠と宝石をちりばめた大理石の寝台に私を呼び寄せてはくれないのだわ。今日こそ王様にお声を掛けてもらわねば。今日も王様は公務でお忙しいとはいえ、王宮の中にある幾つものパティオや、ハーレムの控えの広間にお顔を出す時間がないほどではないはずですよ——。

ファヒマは念入りに目の周りに墨で隈取りをし、腰には金襴の帯をめぐらす。絹と金の青い被衣を掛けて、いつなんどき王の目に留まってもいいように準備を整える。

百人を超す若い美女たちが、それぞれの召使の女たちと長閑な日々を過ごすグラナダの王宮は、まさにアラビアン・ナイトの世界だった。後宮の女たちには行動が限られていて、宮殿内で接する男といったら黒人の宦官の召使ばかり。四人の正室はもちろん、数多い側室たちも宮殿の外に出ることは禁じられているから、表向き仲良く一緒に過ごしてはいるものの、一人の男、いや王を巡る心中の競争は激しい。

それでも、宮殿の質素な外観と比べて王宮の内部は「閉ざされた楽園」と呼ばれていたように豪華そのものだ。内部は水と光と樹木ときらびやかな装飾に満たされ、各部屋がパティオを取り囲んでいる。宮殿の地下に張り巡らせた水路から取り込んだ水を流らせるパティオの噴水が眼と耳だけでなく、汗ばんだ体を涼しげに癒してくる。奴隷の身からハーレムに入った女たちはもちろん、ファヒマのように王族の出であっても衣食住に不満のあ

るはずもない。行動の自由とて、実家での暮らしの中でも若い女たちにとって自由らしい自由はなかったのだから。

グラナダは、標高七〇〇メートル近い山間に位置するために夏でも比較的過ごし易い。この街はまた、地中海との間に置かれたイベリア半島の最高峰三、五〇〇メートルの山を頂く雪の山脈（シエラ・ネバダ）を背後に置いているから、その豊富な雪解け水のおかげで肥沃な耕地に囲まれている。確かに、周辺都市からはほとんど砂漠状の荒野を通って峠越えてくると、ポプラの植林や様々な果樹園、野菜畑などの青々とした光景に旅人は目を奪われる。

スペイン旅行を思い立ってすぐに真梨子から仕入れた情報によると、アルハンブラ宮殿を建てたグラナダ王国はイベリア半島最後のイスラム国家であった。八世紀頃に北アフリカから進出してイベリア半島を席卷していた

イスラムの勢力は、十三世紀のムハンマド一世の治世の頃にキリスト教の国土回復運動（レコンキスタ）によって現在のグラナダ地方に追込まれ、ここで王国の造営を開始した。

それから一七〇年の間に宮殿の公的な区域や私的な部分で、塔、庭園などが少しずつ建築されていった。宮殿が最も大きな変貌を遂げたのはムハンマド五世の時代だという。

今日宮殿を訪れる多くの人の目を喜ばす「二姉妹の間」のモカラベと呼ばれる天井の鍾乳石飾りは、かつては彩色した上に宝石で飾られ、小窓から差し込む陽光を反射してキラキラと輝くようになっていたと歴史の記憶に留められている。今なお白い漆喰のままでも充分美しく、訪れる人に感動を与えてくれるのだが。

広間「二姉妹の間」は、伝説が物語るように「囚われていた敵の姫君の二姉妹が殺された部屋」ではなく、床石の二つの大理石に因んで名づけられたのが事実なのだ。健太郎が夢想したファヒマとアミナの美しい姉妹はこの

広間で殺されることはなかった。少なくとも健太郎の心の中では王と王族に愛されて生涯を過ごすことになる。

当時の広間は部厚い豪華なベルシャ絨毯が床に敷き詰められていたから、王宮に招かれた王族や賓客は絨毯の上に横たわって室内を眺めて楽しんでに違いない。健太郎をはじめとして、現代の観光客はその豪華な天井を立ったまま見続けるのだから首が痛くなる。

時にはこの広間で、美しく若いハーレムの女たちが顔をヴェールで覆い、広間での酒席の宴を盛り上げたのかもしれない。周囲の壁には、刺繍を施された極彩色の布が掛けられていたはずだ。

健太郎は数多の観光客の靴の下で磨り減った大理石の床を、あたかも自分が王族の客人として往時を過ごしているかのように歩き回ったことを思い出しながら微睡まどろんでいる。

真梨子のシャワーも終わったようだ。

白い大理石の道

福 本 多 佳 子

圭子が本棚の整理をしていると、コトンと音がした。落ちていたのは、昔読んだシュリーマンの『古代への情熱』。手にするとトロイ遺跡の説明をしているハンスの輝くような目と優しい表情が眼前に浮かんできた。

八十年代半ば、ドイツ事務所から「冬場のツアー・デステイナーションとしてトルコ旅行を取り扱っては？」という提案があった。下見役として圭子が日本からの直行便が無いイスタンブールへアテネ経由で入ることになった。早朝のアテネに到着、タクシーでホテルに向かい、荷物を置くなり、スニオン岬への観光バスに飛び乗った。ポセイドン宮殿の遺跡のそばで真つ青なエーゲ海を眺めている圭子に「昔はここからアレキサンドリアの夜の光明の光が見えたそうです」とガイド嬢が話しかけた。「昔の夜は暗いからだろうけど……見える距離なんだ……」と思いながら、古代エジプトに思いを馳せた。アテネへ

戻るなり圭子はアクロポリスへと向かった。パルテノン神殿を見上げていると、観光ガイドだと言う銀髪の男性が素晴らしい説明をしてくれた。彼おすすめのレストランへも行ってみた。渡されたメニューを見ると、隣のテーブルから声がかかった。アテネに住むイギリス人カップルとロンドン在住のギリシア人男性、食事を共にすることになった。翌朝イスタンブールへ飛ぶと言うとギリシャとトルコの比較で会話が賑わった。「トロイが楽しみ」と言う圭子に「では貴女がアテネに戻って来た時にトロイを攻めたミケーネに連れて行ってあげる」

「素晴らしい旅の締めになりそう」と再会を約した。

翌朝のフライトでイスタンブール空港に降り立った圭子 wait していたのはハンスという名の金髪の三十代の男性、ドイツ人ツアーをトルコに送り込んでいる。もう一人は銀髪の謹厳な顔立ちのトルコ女性。日本語ガイドだ。「私は東京生まれの代々木上原育ち。満州にもいました。「モスクの近くに住んでいたわけですね」と圭子が応えようと、柔和な表情に変わった。迎える車でブルーモスク

をはじめとする代表的な観光スポットを回った後、取引先となる会社の秘書嬢が趣ある白大理石の建物のトルコ風呂体験へと案内してくれた。翌日のガイドさんは満州生まれ、育ちはやはり代々木上原。昔のテレビタレント、ロイ・ジェームスの顔が浮かんでくる。話好きで朗らかな彼女は圭子を自宅に招待してくれた。「日本が大好きなの。私の息子たちはトルコ生まれなのにおせんべいが大好き！」

翌朝から銀髪のベテランドライバー、アルダと案内役であるハンスと共にトルコ周遊観光が始まった。柔らかな陽光に照らされたオリーブ畑を通り抜けると、アーモンドや杏の色鮮やかなピンクの花が畑の先に見えてきた。東京での慌ただしい日常とは打って変わった穏やかな時間、少女時代に漫画で読んだトロイが待ち遠しい。時代の異なる町が何層にもなっているトロイの遺跡、これは上水道、これが下水道と指差しながらハンスが各時代の説明をしてくれる。砂浜には大きな木馬……「この程度の大きさだったのかしら？」と思ひながら見上げていると、拡声器をとおしてミナレットからの祈りの声が流れ

てきた。不可思議な感じ、でも、今此地はトルコ、コランが現実の世界なのだ。

夕日が輝く丘の上のペルガモン遺跡に着くと、数人の観光客がいるだけだった。古代史の世界、宮殿や神殿、山の斜面には野外劇場もある。眺望を楽しみながらの観劇シーンを想像する。ハンスの説明を聞きながら古代史の舞台を歩いていると幻の世界に踏み込んでいる錯覚に陥る。草木が枯れた丘の道、真つ白な大きな牧羊犬二頭が車を追いかけてくる。まるで絵の中に入り込んだようだ。麓にある簡素なレストランの扉をあけると店の主人がドイツ語で話かけてきた。出稼ぎ労働者として長年ドイツで暮らしたという。

翌日のランチ場所はエフェソスへ向かう途中のクシヤダス、明るく気だるい感じの初春の港。レストランの店先に並んでいる新鮮な魚、貝類から好きなものを選ぶ。大きな生タラコのような魚卵をどう調理するのかと訊くと、衣をつけて揚げると言われ、注文した。素朴な白ワインに新鮮な魚のグリル、魚卵のフライにシャキとしたサラダ、のんびりとした地元のレストランでの爽やかで

シンブルな味わいを楽しんだ。午後は期待のエフェソス遺跡観光、白大理石の道に足を踏み入れると「この道をクレオパトラとアントニウスが歩いたんだよ。二人の姿が目の前に現れるような気がする」とある」とハンスが夢見るような眼差しで説明する。まさに昼間のまどろみの世界、こんな短期間で心が通じ合うと感じていること自体が夢幻の世界と感じていた。この白い道ぞいには「隣の人と議論しながら腰掛けていたのでは？」というトイレ跡、図書館の素晴らしい彫像、人気のないエフェソスでのそぞろ歩きは想像を大きく超える贅沢な時間だった。

イズミールのホテルに着くと、二人を乗せてきた車はアンカラへと向かう。アルダが「明日、空港で待っています。Good luck!」と言って出発した。穏やかな気候の夜の街、地元産のワインを売っている店が多い。薄明るい電灯の光、まるで人がいなくなった後の祭りの夜の散策といった感覚にとらわれた。手と手が触れあい、自然と手をつないで歩き始めていた。

翌日のアンカラ空港にはアルダの笑顔が待っていた。

博物館でヒッタイトの遺物を見た後、カッパドキアへと向かった。ここでは寒々とした冬の空を眺めながらのドライブ、キャラバンサライ跡と考える建物の前も通り過ぎた。着いたホテルは古びた簡素なものだったが、アルダを加えた三人で囲んだテーブルでの夕食、焼いたラムの素朴な美味しさが記憶に残った。

翌朝、浅く積もったシャキシャキとした感触の雪を踏みしめながら、きのこ形の奇岩の遺跡群、洞窟教会内部のフレスコ画を眺め、中腹の住居遺跡にも登ってみた。雪で白くなったカッパドキアを散策するとは予想外だった。アルダおすすめのパンとヨーグルトは手作りの優しい味、熱いチャイが身も心も温めてくれた。

イスタンブールに戻ると、ハンスに急ぎドイツへ戻らなければならない用事が発生していた。「トルコでは女性一人で食事に行っては駄目。秘書と行くか、僕らが手配しているドイツ人グループと一緒に食事に行くように」と、まるでコンコンと説教されているようだった。「わかった」と言ったものの、圭子は一人でレストラン探索と決めていた。ツアーに組み込めそうなレストランの下

見であり「この国の中華の味は？」という興味から、コンシエルジュに相談、タクシーに乗り込んだ。着いた店はモダンな洋風インテリアの高級中華レストラン、見渡すと、高価な衣服をまとった家族が一組、後はビジネスマンの商談の場といった雰囲気、女性客同士というのは皆無だった。バーで勧められたブランデーを味わいながらマネジャーと団体客を受ける場合のメニュー、値段確認から始まり、トルコ料理、レストラン情報へと話が弾んだ。

ハンスが言うように、国内線機内でもビジネススーツの乗客が殆どで女性客はごく少数、冬場で観光客が少なかったからかもしれない。見学したホテルも良かれ悪しかれ古色蒼然としていて、明るさに欠けていた。

十年後の九十年代の夏、圭子は交際相手デニスの家族を訪問するために東京からトルコ航空でイスタンブールに到着した。出迎えたのはアメリカから既に里帰り中のデニス。車窓から眺めていると、町にはモダンな高級ホテルが林立し、街行く人々の顔も明るくなっていると感

じた。訪問した家は皆、日本でいう高級マンション。正面玄関を開けると目の前に大理石の広いロビーと立派な階段があった。室内には二十畳以上と思われるリビングルームにトルコ絨毯が敷かれ、ゆったりとしたダイニングテーブルとソファークラセットが置かれていた。(当時の日本人留学生の手記には、狭いリビングルームの آپパート探しの方が難しいとあった)

この旅で先ず気づいたことはスチュワーデスが金髪でヨーロッパ風の顔立ちなのに、後ろから見ると、頭の形は日本的。歓迎ホームパーティーをひらいてくれたデニスのお姉さんの顔も欧米系、けれど後頭部は違う。トルコはまさにヨーロッパとアジアにまたがる国だと圭子はクスツと笑った。デニスもローマ兵の彫像を思い起こす顔立ちなのに、後頭部はフラット、いわゆる「絶壁」だ。(彼曰く、昔はベビーをずっとカゴの中に寝かせたままだった)興味深かったのは親戚の人々の顔立ち、ジーンズスカンの末裔という顔から欧米系まで様々である。西洋と東洋の混在だ。祖母がアルメニア人、祖父がギリシア人という話が聞こえてくる。

二度目のエフェソスは真夏のギラギラとした太陽で照り返されていた。ハンスと登った野外円形劇場には立ち入り禁止の札が立ち、清浄に見えた白大理石の道は世界中からの観光客で溢れかえり、旅情もノスタルジアも感じられなかった。「時間が足りない。ペルガモン遺跡はカット」とデニスが言う。「うん、これ以上、十年前のほのかな思い出をこわす必要はない」そうつぶやきながら、歩き始めた時、「ハンスー」という女性の呼びかけが聞こえ、自然と振り返った。大柄の金髪の男性とアメリカ人らしい女性のカップル。二人が暑さの中、不機嫌な口調で話しているのを耳にした。男性の英語にはドイツ訛りが……横顔を見上げると、その男性も圭子を見た。「まさか」と思いながらデニスの方へ足を早めた。暑さで息苦しい……。デニスに迫いついてから後ろを振り返ると、その男性もこちらを見ている気がした。「十年以上も前、全てがおぼろげ……」けれど……「ここはクレオパトラとアントニウスが船から降りて歩いてきた道なんだよ」という声が遙か遠くから聞こえたように感じた。

東京への飛行機の窓外は青空の上に白雲が敷き詰められたかのように、はるか遠くまで広がっていた。

「前回のトルコ旅行はミケーネへの一日も含め、会話が弾んで楽しい思い出ばかりなのに、今回の旅には感動が無い。何故？ 二度目だから？ 遺跡見学には暑すぎた？……彼の友人達との海辺での楽しいひとときはあった。彼の家族は温かく迎えてくれた……」

問題は二年間交際を続けてきた圭子とデニスにあると気がついた。

「二人のセクシャルな関係は悪くはない。でも、二人の間に真摯に向かいあつての会話なんて存在したのだろうか？ この旅でやっと、そんなことがわかったんだ……」

そう結論が出たことで、目の前のぼやけた世界が一気に開けて、陽光輝く白雲の上に一步を踏み出している自分の姿が見える気がした。

本を棚に戻すと、想い出の数々が霞のように薄れ、最後に大理石の道が現れ、消えて行った。

ドンタッチ 人形じゃないの
見るだけよ

平尾 富男



ペンフォト句

②

池の面に

恋する想い

花 篝



清水 勝



話途切れ

鴨の動きを 目で追いつ

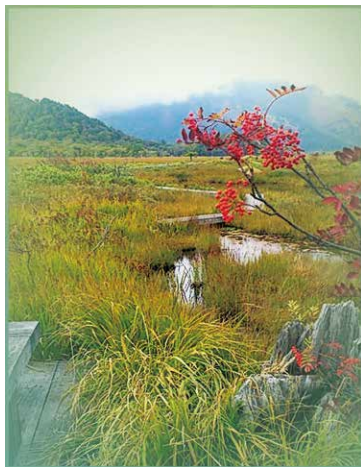


大月 和彦

啄んで

この実運べや

頂きへ



新田 由紀子

追悼の辞

都甲 昌利

高橋孝藏君が亡くなったと平尾さんからメールが届き吃驚した。

彼とは東京外国語大学で四年間ロシア語を学んだ仲だ。がっちりした体格であったためボート部に入部し活躍した。健康そのものの記憶があるので、まさかという思いである。

昨年十一月に同窓会があり、友人から彼がガンであることを知らされた。

積極性と冒険心に富んだ彼は四年生の時、夏休みアルバイトで北海道・根室から海上保安庁の巡視船に乗り込み通訳として働いた。その頃、北方四島付近で日本の漁船がソ連の巡視船に拿捕される事件が頻発していたため、ソ連側との折衝が急務だったのだ。

卒業した彼は丸紅に就職した。最初はソ連貿易を担当しモスクワにも駐在した。やがて映画関係の仕事をする

ようになり、これが縁で松竹の元社長・奥山融氏と知己を結ぶようになった。奥山社長に気に入られ、なんと丸紅を辞めて松竹に入社してしまった。同窓会で彼に会うと「俺は美しい女優に囲まれて仕事をしている。お望みなら会わせてやるぞ」と言うのが自慢だった。

平尾さんが企業OBペンクラブに入会したのも、学生時代の友人だった高橋君の紹介だ。ペンクラブのメンバーとして高橋君は活発だった。奥山社長も入会させてしまった。当時、社長は「日本映画史」を書いたため、「何でも書こう会」に熱心に出席され文章の研磨に精を出しておられた。松竹のお家騒動で社長を辞任された後、高橋君と共に中高年向けインターネット情報サイト「ベストライフ」を立ち上げた。我々も大いに投稿しこのサイトを利用した。奥山氏は二〇〇九年に亡くなられた。今頃高橋君は天国で奥山氏と映画の話でもしているだろう。実に残念な人物を亡くした。

合掌



活動報告



写真 平尾 富男

「何でも書こう会」は進化している

「何でも書こう会」は盛況だ。時々参加される会員を含めて30名前後いる。作品が20を超えると、4時間弱の討議時間では短いの、月に二度行うことにした。どんな結果になるのか危惧したが、結果として一開催20作品を超えることは殆んど無く、当初の目的は果たした。たまには15作品前後のこともある。そんな時はラッキーだ。一人一人の作品をじっくり吟味し質疑出来るので、想定外の効果もあった。

新入会員も増え、会員の平均年齢は少し下がり、作品は更に多岐に亘り面白くなった。最近は会員のパソコン技能の向上により、写真や挿絵などを挿入してある作品が多くなってきた。当初は写真の挿入等は邪道で文章のみで勝負すべきとの意見もあったが、画像の表現力はあるがたい。特に海外物には必須条件だろう。今後はスマホの普及で、音声や映像も作品と同時に発表されるだろう。スマホが従来の「書こう会」の殻を破るかもしれない。昨年は「ヒアリ」や「ノーベル文学賞」「ノーベル平

和賞」の関連エッセイがタイムリーに発表され、理解が更に深まった。これも月二度開催の効果か。

紀行文や仏教の研究等、連載物も楽しみだ。それらの連載作品をエッセイコラムに掲載している工夫が良い。作品は皆で読み合っている、文章レベルや内容は保証つき。しかも800文字の制限にこだわらなくてよい。

ホームページの著作者検索システムを使い、エッセイコラムの著作者をポンとクリックすれば、連載物が一堂に並び、読み手にとっては至極有り難い。

企業OBベンクラブ・ホームページの「著作者検索システム」の上手な使い方だ。

会員の進取の気性と工夫で「何でも書こう会」は進化発展し続けると思う。

(プロマネ 志村、三春、大越)

「掌編小説勉強会」 主な作品を紹介

PEN活動の一環として創作に挑戦。長編・短編より入りやすい「掌編小説」に取り組み、作品の合評会でメンバーが互いに切磋琢磨しています。研鑽の結果、各自公募入選レベルの小説作法を身につけることを目指しておりますが、目下のところ、佳作止まりなのが残念です。今年はまだかが入選しそうですよ！

この勉強会がスタートして十一年が経過し、勉強会も六十六回を数えています。その作品は会員専用ページで閲覧できます。当初の掌編を越える短編・長編も含め、その数は四百六十二編となりました。

最近の表題を挙げますと次のようになります。

・『兵站病院の医者』…戦争下の様子を若い人に伝えようとの力作です。

・『小説機関投資家』…長編物を連載中です。英国での研修と共に微笑ましい家庭生活も。

・『色男 石井宗謙』…シーボルトの娘と関係した幕末の医師石井宗謙の生き様を描いています。

・『消えた会話』…遊行期シリーズの一編で、老夫婦とスマホとラインのやりとり。軽妙洒脱！

・『神様お願い』…振り込め詐欺事件と思いきや老女の恋の物語。はて、どうなりますか。

・『深い淵から希望』…インドを舞台にその成長振りを、貧しかった幼児を例に語りかける。

・『ひとりにならない』…人の寿命が見える不思議な能力を持った女性が登場します。

・『あとは託した』…一枚の写真の背景は？ その写真から物語は大きく広がります。

・『葵千人夜話』…時代小説で、切腹の理由を女房族の井戸端会議から解いています。

・『卒業』…OL嬢は何から卒業するのか。折り紙教室でもあり、はたまた…

他、多数あります。

なお、昨年は新しい試みとして、共通テーマ「折り紙を折る男」を登場させた掌編小説に各自がチャレンジしました。

(プロマネ 内藤、廣澤、清水)

サロン21 活動報告

二〇一七年も、IOT、AIが牽引する第四次産業革命、トランプ新政権の登場による米国の政策転換、同政権の離脱表明によるパリ協定やTPPへの影響、アベノミクスの成果と人口減少や財政など日本の内政課題、不安定な東アジア情勢と憲法改正の是非など、サロン21の会員にとって関心の高いテーマが目白押しで、毎回活発な議論が展開されました。

また、外部より、財務省関東財務局の川瀬部長、上智大学の栃本教授、在野の憲法研究家、安田茂氏にお越しいただき御専門の立場からお話を聞く機会に恵まれました。

二〇一八年は上述のテーマが抱える問題点が一層顕在化し、国内外の情勢が大きく動く様相を見せています。それらを念頭に置きながら、テーマを絞って、さまざまな角度から数回にわたって深く考察するなどの工夫を加えて、会員相互の一層活発な意見交換と勉強に努めてまいります。

二〇一七年の各月のテーマとプレゼンターは左記のと

おりです。(敬称略)

一月	第四次産業革命と社会・政治	野瀬 隆平
二月	二〇一七年 重大ニュース予測	森田 晃司
三月	トランプ政策 米国第一	斉藤 征雄
四月	フィリピンビジネスについて	浅井壮一郎
五月	日本の財政の現状と課題	財務省部長 川瀬 透
六月	社会政策は社会政治	上智大学教授 栃本一三郎
七月	日本の人口減少と移民について	下山 健夫
八月	夏休み	
九月	憲法を守って国滅ぶの愚	憲法研究家 安田 茂
十月	地球温暖化説の真偽	森田 晃司
十一月	社長退任後の相談役・顧問について	上原 利夫
十二月	年末大放談会	(プロマネ 森田、下山)

俳句のこの一年

佳句鑑賞

西川 知世

昨今、テレビの番組で俳句が高視聴率を上げて俳句ブームだと聞く。私が地域で持っている句会でも、始めたと言って来られる方が増えている。子規以降の俳句を考えると、ブームというのは俳句とは切り離せない。芭蕉の不易流行の発見、子規から虚子へとホトトギスによる写生俳句の勃興、虚子からの離脱と無季俳句を含む新興俳句の分化、有季定型への信頼と破壊、俳句は絶えず時代の流れの中にある。五七五の世界一短かい詩であるから全ては言い尽くせない、読む人に半分は任せるという宿命の文芸である。それ故に、短いにも拘わらず、一句の情報量は作る人と読む人の数だけ増えることになる。奥深い懷を一句に持たせて、作り手と同じ感慨、あるいは同感を感じてもらえるにはどうするか、毎月の句会の七転八倒が続く。

ここに一年の佳句を並べるとその精進が思い起こされ、感慨深いものがある。今年の新人は、天津隆文さん（俳号・たかし）、八月から参加され、新しい風が吹いた。

吟行は、箱根一泊と横浜三溪園、井の頭公園。メンバ―の熱意を刺激とした一年であった。

二つ三つ群を離るる水芭蕉

西川 知世

山の氣を孕みて白き水芭蕉

向こう山に午後の陽溢れ富士桜

日影れば山の風来る座禪草

すくと蓮蕾む葉擦れの音の中

臥龍梅の幹がさがさと灼けてゐし

特別投句

玉山 和夫

三月来る我も白寿の仲間入り

神域に風の道あり花菖蒲

無花果やにっこり食べしぼけた母

病棟の長き通路や枯葉散る

永らえてなお思い出す開戦日

山門に逆光眩し冬紅葉

安藤 晃二

日の高き池面に幾輪鳩の波

藤房を隔て女の笑ひをり

階下より呼ぶ声多し三が日

春寒や茅舎の住みし丘下る

句会の開催に腐心してくださり、感謝である。一句目、

二句目は、絵を描かれる作者の視線がよく利いていて、

一読、句の中の光景が目には浮かぶ秀句。三句目からは人

事句。一読、軽快なりズムと句の中の空気感が句の特徴

である。これは、音楽好きの作者の功名である。

凍て風や腿逞しき鼓笛隊

上田 信隆

春眠やとぎれとぎれに原節子

轟るやまだあたたかきアスファルト

花は葉に影の濃くなる遊歩道

ダム放水折れさうなほど大き虹

時々俳句雑誌の投稿欄にお名前を拝見する。ご健吟の

様子なによりのことと拝見している。五句目、ダムの放

水で立つ虹を季語とするかどうか、は議論のあるところ

かもしれない。しかし、夏の空気感は句から強く感じら

れる。実感のある中七の措辞が句を支えている。

冬立つ日二羽の鴉の天翔ける

大泉 子泉

オベ成功術後の医師の目の牙ゆる

妻と来て新茶の甘き宇治の旅

ふるさとに兄妹集ひ靈祀る

相思樹の根元に燃ゆる曼珠沙華

二句目、「牙ゆ」は、寒さが極まって澄明感すら感じ

る冬的时候の季語。上五の喜びは、この季語でしか言い

表せない手術医への信頼である。相思樹はアカシアのこ

と。相思樹と使うことによって、台湾あたりの街路樹が

読み手に思い起こされ、旅心を誘われる。

女みな翳を宿せり夏帽子

大津たかし

バルコンへ朝の列車の遠汽笛

夏の果吾が句見ぬまま友逝けり

落葉掃く背ナより高き竹帚

冬の日や山より大きな山の影

一句目、ペン俳句デビューの句。夏帽子によって出来

た影を詠って、なお町行く女の個を詠っている。女たちの翳はひと色ではない。中七によってその翳に人生が生まれている。秀逸な句に出合った思いがある。五句目、景が大きい。山より大きな影を引く冬日を見てみたい。

.....

雪しんしん家族だれもが黙りゐる

斉藤 まさお

雛飾る妻と娘とその娘

人は皆都会に帰り秋の浜

秋深し時差とれぬ夜の赤ワイン

アルプスを見上げる村のななかもと

雪・月・花の句を毎年作ることは俳人の心がけること。

雪は冬の代表。雪の降った夜の静寂が眼目。その静けさに引き込まれた家族の静寂と温みが一句目の眼目。二句目、人が多く出る句は難しいが、雛飾るという季語にだけ語らせて、登場する人たちの声が聞こえる句になった。

.....

こはもての道祖神にも飾餅

志村 良知

水車飛沫も声もこどもの日

含め煮の丹塗りの椀の木の芽かな

腹ばひの老犬の目に夏深し

黒雲や残光集め黄の公孫樹

バラエティに富んだ五句が並んだ。作句は挑戦という

俳句の一方向を体言されている。一句目、道祖神は穏やかなものかと思っていたが：：そうでもないらしい：：けれど、村人に愛されている。そんな物語が生まれそうな句。二句目、飛沫も声もキラキラしていかにも幸せ感が横溢。

ちらちらとページに揺らぐ冬日かな 首藤しずを

梅の木の節くれだちて寒の入

浅間山でつかく描いて夏見舞

瓜棚を透けるて夜半の月の色

一帆のまた現れて秋の海

句会の採点係を担当されるが、最高得点者として披露の役も多々担われる。二句目、幹の節くれに寒の寒さを感じたがすでに芽立ちの準備が始まっている筈。春を迎える前の厳しい季語が効いている。五句目、中七によって秋の風を帆に集めて、スピード感のある句となった。

せせらぎの小石の震え春浅し 中村 晃也

剥き出しの命ひしめく蝌蚪の池

一匹が鳴いて全山蟬時雨

啞蟬の待つ啞蟬でなくなる日

浴衣の子風を遺して去りにけり

一時体調を崩されたが回復され、元気に句会に通つてくださる。二句目、上五が秀逸である。おたまじゃくしがひしめいている状態を、剥きだしの命と詠んだ詩心に感服。四句目は『角川・俳句年鑑』に掲載された句。啞蟬は発音器をもたない雌の蟬。発表は現代仮名づかい。

須佐男の故地を貫き春の川 森田 晃司

言霊の宿る校倉風光る

転げ行く帽子追ふ子や土手の夏

一本の幟は高し秋祭

姿なき音なき風の芒かな

一句目、須佐男は出雲で八岐大蛇を退治したと伝えられ、植林の道を教えたと聞く。その故地は樹木の緑濃い地が思われる。川は春の息吹の音をたてて流れる。雄大である。一転、五句目の句は見えず聞えぬ風が確かに芒を揺らしている。その風も神代から吹く風を思わせる。

二〇一七年「ペン川柳」勉強会の成果

川柳勉強会 世話人 平尾富男

平成十八年四月に発足した分科会の「ペン川柳」会は、昨年十二月に第四百十一回目の懇親・勉強会を開催しました。これまでに三回の商業出版（青蛙房）と、オンデマンド方式の出版実績がありますが、昨年は出版を断念しました。その代り金沢にて合宿勉強会を行うことが出来ました。この合宿勉強会が好評であったことで、本年は関西（箕面）での合宿を計画することになっています。ペン川柳メンバー以外の希望会員各位も大いに歓迎しますので、その節はお付き合いの程をお願いします。昨年のペン川柳メンバー精鋭（！）十三人による勉強会の成果（毎月之最優秀お題句）と世話人の無手勝流講評を以下にご披露します。

●一月 お題【響く】

一行の手書きが響く年賀状

（零門）
（れいもん）

印刷された文面の年賀状を受け取ることが多くなりましたが、たった一言でも手書きで近況が添えられていると心に響きます。

●二月 お題【店】

葬儀屋も花環飾るか新店舗

（零門）
（れいもん）

先月に続き最優秀に選ばれた零門句です。皮肉が効いた面白い川柳です。日頃から川柳心を忘れずに暮らしている素晴らしい川柳作者ですね。

●三月 お題【返す】

コストつめ返す刀でお前クビ

（だし）

見事なサラ川です。上司の命令で製品のコストダウンを徹底した挙句に、更なるコストカットの人減らしで自らがクビになってしまったという悲哀です。

●四月 お題【粉】

粉雪に花見あきらめ爛冷まし

（鬼瓦）
（おにがわ）

春は天候が変わり易く、お花見に出掛けたら粉雪に見

舞われてしまいました。「爛冷まし」が効いていますね。
風流な俳句のような川柳です。

●五月 お題【練る】

御神輿が軽トラで練る街になり

(明迷)

ほぼ満票の最優秀句です。確かに最近はこの風景を
眼にするようになりました。お題「練る」の使い方も的
を射ています。

●六月 お題【柱】

電柱が消えてワンコの夜尿症

(明迷)

景観を考慮して電柱を地中に埋める政策が少しずつ実
行に移されつつあります。全ての電柱が地下に埋められ
るには暫く時間がかかりそうですが、困るのは朝晩散歩
に連れ出される愛犬たちです。

●七月 お題【傾く】

東風吹かば西に傾く風見鶏

(火酒)

名人復活です。暑さにもめげずこんな川柳を詠めるの

は、才能と日頃の鍛錬なのです。リズムも切れも良く、「東
風吹かば匂い起こせよ」の本歌取りを見事な川柳で完成
させました。下五を「風見鶏」で締めるのも秀逸！

●八月 お題【星】

党の星失言つづきで任追われ

(我々好)

自宅休養（謹慎）中で欠席投句でしたが、川柳絶好調
の作者によるこの句の星は、作者の大好きな稲田朋衆
議院議員（早稲田大学法学部出身）のことです。

●九月 お題【流れる】

形見分け質に流れて親不孝

(酔深)

「質屋」という商売、昔は都心のあちこちにあつて繁
盛していました。それだけ需要があつた訳で、給料日前
のサラリーマンや家計を預かる奥方が重宝していました。
質流れ品もそれなりに高価なもの（形見分け？）が手頃
の価格で手に入るので、庶民にとってありがたい存在で
した。昭和は遠くにけり、ですね。

●十月 お題【宿】

甲斐性なし宿なしだよと女房吠え

(我々好^{ウイスキ})

「六十歳過ぎて(過ぎるずっと前から?)家も持てないなんて」と奥方に蔑まされるようになって、ペン川柳子が高得点で作者を励ましてくれます。好いクラブです。

(実は、作者には持ち家が三つもあるらしいです。)

●十一月 お題【寝る】

寝る時間削る頻尿憎いやつ

(零門^{れいもん})

年を取るとトイレが近くなります。困るのは寝てから何度も尿意を催してトイレに起きること。結果的に寝不足になるのです。頻尿を憎んだところでどうにもなりません。嗚呼！

●十二月 お題【布団】

残り香がしみる布団で夢漁り

(酔雅^{すいが})

「残り香」が大好きな作者は、毎晩布団の匂いを嗅ぎながら夢の中で昔付き合った数多の女性との思い出に浸っています。(イヤラシイ事この上ありません！)

二〇一七年の好成績川柳子は、三句選ばれた零門さん、そして今年躍進の我々好さんと明迷さんでした。尚、全ペン川柳子十三人による自薦、或いは世話人推薦の憂愁(！)五句を以下に。(順不同)

【酔雅^{すいが}】

(西川武彦)

「返す」…誤字脱字読み返すたび顔をだす

「傾く」…忖度を重ね傾くまつりごと

「星」…白星を重ねて戻る肌のつや

「流れる」…喜寿傘寿流れる時は速さまし

「蒲団」…残り香がしみる蒲団で夢漁り

【不言^{ふげん}】

(岩崎洋一郎)

「揉む」…「揉んでやる」夫の好意に「触らんで」

「盃」…盃を傾けあった友何処

「寝る」…よく寝る子育ちすぎだよ肥満体

「寝る」…この授業寝ていてOKと大人気

「返す」…厚恩を仇で返して知らん顔

【井波】^{いなみ}

(稲宮健二)

「盃」…返す盃縁に紅つけ片目閉じ
「粉」…白粉を流した素肌また眩し
「練」…筋を練りやすらぎの里ババ集合
「寝る」…あー寝てる習三時間で煙に巻く
「寝る」…寝もやらで変わる洩地下どの出口

【酔深】^{すいしん}

(平尾富男)

「練る」…構想を練った揚句の駄句一句
「傾く」…盃が傾き続き愚痴が増え
「星」…スターには成れず夜空の星の屑
「流れる」…形見分け質に流れて親不孝
「傾く」…屋台骨傾いてなお夢の中

【だし】

(大野 昶)

「店」…店に来て何をかうのかまた忘れ
「返す」…コストつめ返す刀でお前クビ
「柱」…茶室ではやはり巾きく床柱
「寝る」…寝ると言い勉強してる嫌な奴
「布団」…お隣りも前立腺か布団干す

【零門】^{れいちもん}

(松谷 隆)

「響く」…一行の手書きが響く年賀状
「店」…葬儀屋も花環飾るか新店舗
「宿」…食べるほど無口になるよ蟹の宿
「傾く」…三代目家傾くも省みず
「寝る」…寝る時間削る頻尿憎いやつ

【損得】^{そんとく}

(細谷 博)

「傾く」…くじ外れ家は傾き日は落ちる
「粉」…政治家の粉骨碎身言葉だけ
「星」…このホシは希望の星のなれの果て
「寝る」…不眠症原因探って寝不足に
「布団」…座布団を積んで剥がして笑い取る

【安兵衛】^{やすべい}

(山縣正靖)

「響く」…胸キュンと響いた君よ今いずこ
「返す」…金返せ籠抜け詐欺だと忖度省
「粉」…身を粉に貢いだ揚句袖にされ
「傾く」…やれ傾(かぶ)けアベの傾城三熟女
「宿」…加賀の宿夢にたゆたう主計町^{かすえまち}

【晃てるつゝ二】

(安藤晃二)

「宿」…宿六と呼び嬉しそに世話女房
「星」…北の星流れ襟裳の沖に消え
「布団」…金婚や階上階下に蒲団敷き
「店」…空蟬の水車蕎麦屋の広告塔
「寝る」…灘五郷麹寝かせて生一本

【火酒ウオツカ】

(三春)

「店」…目は霞み手が震えても店の顔
「返す」…嘘ばれて嘘で返すも男道
「柱」…人柱ブスでがっかり神様も
「傾く」…東風吹かば西に傾く風見鶏
「流れる」…漏らしても流れ出さなきゃほぼセーフ

【鬼瓦おにがわ】

(富田佳瑞)

「返す」…昭恵さん返すメールが命とり
「粉」…粉雪に花見あきらめ爛冷まし
「柱」…嘯むほどに酒が目覚める貝柱
「流れる」…お流れと乞われて注いで御説教
「布団」…枕投げ布団で防戦京の宿

【明迷めいめい】

(八木信男)

「響く」…鈴しも睦も響く安普請
「店」…まずくても美人女将で通う店
「練る」…御神輿が軽トラで練る街になり
「柱」…電柱が消えてワンコの夜尿症
「布団」…山小屋の恐怖年増と合布団

【我々好ウヰスキ】

(浜田道雄)

「寝る」…寝た子をば起す女の罪深さ
「宿」…甲斐性なし宿無したよと女房吠え
「粉」…傘寿には紅灯脂粉無縁なり
「返す」…返す金借りたときより多く見え
「響く」…つぶやきが世界に響きみな慌て



ペン・フォト句会

念願のフォト句作品集『フォト句で遊ぼう』が昨年四月に刊行された。前年後半の四カ月をかけた講習会で、自分の撮った写真に文字を挿入する技術を習得し、各人が過去五年間の作品からこれぞと選んだ力作を、プロの手を借りずに我々自身が各ページのデザインを検討し、冊子に纏めたものである。

A4版の洒落た表紙は誰もがページをめくってみたくなる。コンテンツは写真と句のみであり、直感的に作意が読み取れる手軽さが、この文芸に馴染みのない人にも直接的にアピールする。

反響は圧倒的で、毎年『悠遊』を進呈しても無反応だったご仁から「これはユニークで面白い。次号は何時でるのか」と聞かれた会員もいれば、この冊子を見て即座にペンクラブに入会を決めた人もいる。

なかでも嬉しかったのは、ペンクラブ会員の大西宏さ

んの会員談話室への投稿である。この方は多忙でクラブの例会にも年に数回しか出席されないが、投稿内容の一部を以下に転用させてもらう。

「俳画に代わるフォト句会では、運動面でも日本をリードしているようだ。『フォト句で遊ぼう』を読んでその文化性に驚いた。このような創造はそれ自体行動だ。フォト句会では例会後メンバーそれぞれがお気に入りのレストランに案内するという極上の快樂もあるらしい。好きなことをして、好きな人と会って、好きなものを食べる——これぞ自由人の極致であり、十代よりも『もつと青春』といってよい」

確かに句会のメンバーは全員生き活きとして句会と食事会を楽しんでいる。相互に刺激しいい作品のレベルも五年前とは比較にならないほど向上した。

これからも仲良く学びつつ、お互いに人間力を高めてゆくことにしたい。

(プロマネ 中村晃也)

英語を読もう会

当会は、英語で発信された文献をメンバーが輪番でプレゼンし、その内容について話し合い、英語表現の興味深いところも楽しめます。テーマは自由、昨年は時事、経済問題が多く選ばれました。皆さん是非ご参加下さい。

(プロマネ 大泉、安藤)

一月	デンマークの幻影	(富岡)
二月	トランプの衝撃	(安藤)
三月	ノーベル文学賞ボブディラン	(安藤、大泉)
四月	トランプ氏のツイッター	(野瀬)
五月	フィリピン 新大統領	(下山)
六月	東南アジアのイスラム教の歴史	(富岡)
七月	日米安保条約の見直し	(大泉)
九月	核戦争の脅威	(安藤)
十月	独再生エネの苦悩	(森田)
十一月	神戸製鋼の不正	(野瀬)
十二月	トランプ氏のアジア歴訪	(安藤)

Jan.	The Danish Illusion. What can we learn from Denmark?
Feb.	IMF predicts Trump Impact
Mar.	Blowing The Wind, Mr. Tambourine Man, etc
Apr.	Welcome to the pre-truth President
May	President Rodrigo Roa Duterte
June	History of Islam in Southeast Asia
July	The Constitution of The United States
Sept.	The Wrong Way to Prevent Nuclear War
Oct.	Germany' s Shift to Green Power
Nov.	Kobe Steel Scandal
Dec.	After a disciplined Week in Asia, Trump unload on Critics

「何でも読もう会」で気分爽快に

二〇一七年に読んだ作品は下記のとおりです。

昨年四月にスタートしました。「読もう会」としては、実績の長い「英語で読もう会」に次いで二つ目です。

当会ではエッセイや掌編小説、韻文（俳句など）を作っていますが、名作・名文を味わう機会はありませんでした。書くこと読むことが表裏であることは言うまでもありません。そういう思いのメンバーが集まって発足しました。

月に一回、四時間で二、三作品を読んでいます。小説と紀行随筆を半々で、という読み方です。気がかりだったけれど手つかずだった作者・作品を読めたという人、義務で読んだら意外に面白かったという人などいろいろです。気楽に読んで気楽に意見感想を述べあい、その後はお決まりの「お疲れさん会」です。ここでも議論が弾むのはもちろんです。本当に、よくぞこれほど楽しい面々が揃うものだと感じします。

四月	『北越雪譜』	鈴木 牧之
	『草枕』	夏目 漱石
五月	『北越雪譜』	鈴木 牧之
	『三四郎』	夏目 漱石
六月	『北越雪譜』	鈴木 牧之
	『それから』	夏目 漱石
七月	『北越雪譜』	鈴木 牧之
	『地獄変』	芥川龍之介
九月	『手巾』『偷盗』	芥川龍之介
	『逝きし世の面影』	渡辺 京二
十月	『古代への情熱』	シュリーマン
	『痴人の愛』『蘆刈』	谷崎潤一郎
十一月	『あ・うん』	向田 邦子
	『五重塔』	幸田 露伴
十二月	『にぎりえ』『大つごもり』	樋口 一葉
	『暗室』	吉行淳之介

（世話人 首藤静夫）

ホームページ関連

当クラブでは、月例会と各勉強会で、毎月何度か「国立オリンピック記念青少年総合センター」で集まりを持っている。

しかし、場所が東京代々木とあって九州、関西、名古屋居住の遠隔地会員が参加するのは難しく、東京近郊在住でも電車やバスを乗り継いで二時間余りもかかる人も多い。会員の高齢化という厳しい現実もある。そこで、ホームページは会の顔という役目の他に、会員が直接顔を合わせなくても集える場所としての役目もある。

ホームページには、公開ページの他に会員専用ページがあり、会員向けお知らせなどを掲載する他、意見交換の場所としての会員談話室がある。会員諸氏には掲載作品の忌憚の無い批評、旨い店・酒紹介、などでもっと会員談話室に集って頂きたいと願っている。

ホームページ全体のアクセス数は管理会社から毎月報

告頂いており、年間八万件余りである。これは特に相互リンクは張らず、特定フォローワの登録も無い単独のホームページとしては誇れるアクセス数だと思う。

アクセスの約六割は、当ホームページのトップページを経由せず、著作者検索システムや外部検索エンジンを使っての作品への直接アクセスである。会員にとっては

検索システムを使っていて読者に、自分の作品にアクセスして頂く、ということも日々の文章修業の目標になっている。

(プロマネ

志村良知)

企業OBペンクラブ
BUSINESS VETERANS PEN CLUB

文章を書いたり、句を詠んだり、写真を撮ったり…仲間と語り合って楽しんでいます。

具体的にこんな活動をしています

800字で書く	ユーモアを書く	俳句を読む	川柳を読む	フォト句を読む
字組小説を書く	サロニ21 (毎月第2回) を考える	邦語を読む	写真を読む	又山作品を読む

名品は「企業OB」となっていますが、会日は土曜、キャリアアワードや、お花畑に集まっていた方もいます。あなたも仲間になりませんか？ 企業OBペンクラブとは ▶

最新トピックス

■月例会 3月15日(木)
2時～3時 定例報告
3時～5時 会員講演
昨年入会された大津屋文さんに「お札あれこれ」と題してお話いただきます。

■何でも読もう会
3月10日(土) 13時～17時
①宮本常一 『忘れられた日本人』
②三島由紀夫 『金閣寺』

■英語を読む会・サロン21
3月20日(火)
＜英語を読む会＞ 13時～14時
今月は下山健夫さんの担当で、「トランプ大統領の『一般教書演説』」を読みます。
＜サロン21＞ 14時～17時
安藤昌二さんのプレゼンで「ロケットのいまと明日」です。

■2月版を振り返って

会員写真廊下

企業OBペンクラブ本年の歩み

平成二十九年（二〇一七年）

（会員への敬称略）

一、役員

前年度に引き続き、左記の役員が運営に当たった。

名誉会長	西川武彦
理事、会長	大越浩平
理事、副会長（総括）	安藤晃二
理事、副会長（財務）	清水 勝
理事、運営委員長	森田晃司
理事、事務局長	志村良知
理事、広報・渉外担当	首藤静夫
理事、副運営委員長	六戸三春
監事	山縣正靖
会計担当	松浦俊博

二、年度方針

戦後生まれ会員の獲得と上手な世代交代

- ①各プロジェクトの更なる活性化努力
- ②P・E・N活動結果の外部発信の多様化推進
- ③財務健全化の維持

三、各月の活動報告

一月例会（十九日）

・新春落語会Ⅱ三遊亭とん馬師匠

前座 麴屋サンバさん（女流）

『動物園』

とん馬師

中国小咄二題

三味線自演でかつぱれ、都都逸

三味線自演『稽古屋』

中入りⅡ質疑応答

『御神酒徳利』

・新年会（十九日）

会員…四十名、ゲスト七名参加

二月例会（十六日）

- ・ゲスト講演：藤田巖氏（訪問美容師）

演題：「人生百年時代をスマートに、

お洒落に楽しむ為の処方箋」

- ・二〇一七年版会員名簿確定配付 会員数六十八名

- ・第九回何でも書こう会熱海合宿（六、七日）

二十名が一泊の勉強・懇親に参加した。

三月例会（十六日）

- ・会員講演：山縣正靖（山縣経済研究所所長）

「経済漫談」

- ・新会員

安東英千代

長尾進一郎

四月例会（二十日）

- ・会員講演：児玉寛嗣「百年前の戦争」

遠い国で起こった事（第一次世界大戦）

- ・『悠遊』二十四号発行

- ・新しい勉強会「何でも読もう会」発足

記念すべき第一回は次の作品を読んだ。

『北越雪譜』鈴木牧之

『草枕』夏目漱石

以後毎月一回、だいたい二作品を読んでいる。

- ・ペンフォト句の会『フォト句で遊ぼう』刊行

各ページは作者自らがパソコンを操作して作った。

A4版フルカラー美麗本はあつという間に完売。

五月例会（十八日）

- ・『悠遊』二十四号合評会。

- ・新会員

田中みづえ

大森海太

六月例会（十五日）

- ・ゲスト講演：奥村秀雄氏（日本考古学会会長）

「奈良の大仏はどうやって造ったか」

— 巨大造仏に挑んだ人々のたたかい —

・ペン俳句、OGを迎えて三溪園吟行（二十三日）

七月例会（二十日）

・会員講演…志村良知「紙へのコピーの歴史と原理」

八月（夏休み）

九月例会（二十一日）

・会員講演…原田 信

「辺境を旅した二人の西欧の女性」

・新会員

大津隆文

十月例会（十九日）

・ゲスト講演…伊藤榮子（河原崎有稀）さん

当会として初めてお迎えした女優さん

夫君の故河原崎長一郎さんの思い出含めて回想

十一月例会（十六日）

・ゲスト講演…貝瀬弘子先生

「源氏物語を楽しむために」

・ペン俳句…井の頭公演吟行（二日）

・ペン川柳…金沢合宿勉強会（二十三～二十五日）

十二月例会（二十一日）

・会員講演…長尾進一郎

「鉄道の安全は如何にして向上してきたか」

―戦後日本の重大事故の教訓―

・年度末退会会員

安藤英千代、橋本政彦、皆川和徳

二〇一七年は新役員の第二年目。前年健康上の理由などで七名の退会者が出て新年度の会員数六十八名。会員の減少を懸念したが、少なくとも物ごころついたのは戦後という世代から五名の新会員を得て七十三名に。年度末に退会者三名があったものの、目標の七十名体制は維持できてほっと一息。

年金支給年齢引き上げ、定年延長の影響などで当会も六十代の新会員を獲得するのは難しくなっていくであろう。しかし合計では六百万人を越える団塊の世代が第二の就職先での定年を迎える頃、というわけでヘッドハントのチャンスとも言えよう。同人誌『悠遊』の内容充実と、各勉強会の成果発表の出版物は有力な会員獲得手段になると期待。

分科会活動

各分科会勉強会活動はプロマネ（世話人）の努力で活発に行われている。勉強会の後に行われる懇親会はさらに活発で、中には、そっちがメインなどという不屈き者（？）もいるが、それはそれで楽しい会になる。

四月に新しい勉強会として「何でも読もう会」が発足した。月一回、評論・ノンフィクションと古典の小説という組み合わせで進めている。

勉強会による出版では、ペンフォト句会がA4版フルカラーの美麗本『フォト句で遊ぼう』を出版。

企業OBペンクラブの活動を支えるホームページは、昨年稼働した「著者名検索システム」の月間アクセス数が昨年五十パーセント増しと好調で、ここをキーとして、各個別作品へのアクセスも活発であった。「会員談話室」は、一般公開ページの賑わいに比べ、会員の交流の場としてのホームページという観点からはやや低調であった。今年は、遠隔地会員や代々木のオリンピックセンターに來難い会員も参加しての交流懇親の場となるようホームページの活性化を図りたい。（事務局長 志村良知）



昨年新年会でのスナップ
三遊亭とん馬師匠も普段着で

	氏 名	出 身 会 社
田中みづえ	たなか みづえ	
田原 敬	たはら けい	和田製本工業
玉山 和夫	たまやま かずお	通産省、日英協会
塚田 實	つかだ みのる	日立製作所
都甲 昌利	とこう まさとし	日本航空
富岡喜久雄	とみおか きくお	フジタ（藤田組）
富田 佳瑞	とみた よしみつ	三菱商事
島海 博	とりうみ ひろし	山一証券
内藤真理子	ないとう まりこ	
長尾進一郎	ながお しんいちろう	東芝
中村 晃也	なかむら あきや	三菱化学
新山章一郎	にいやま しょういちろう	在日米国海軍基地
西川 武彦	にしかわ たけひこ	日本航空
西川 知世	にしかわ ちよ	三菱倉庫
新田由紀子	にった ゆきこ	シュプリング・ジャパン
野上 浩三	のがみ こうぞう	日本生命保険
野瀬 隆平	のせ りゅうへい	石川島播磨重工業
羽田 壽夫	はねだ ひさお	三菱重工業
馬場真寿美	ばば ますみ	ヤマハ
浜口須美子	はまぐち すみこ	稲畑産業
浜田 道雄	はまだ みちお	労働省
濱田 優	はまだ ゆたか	三菱化学
原田 信	はらだ まこと	NHK
平尾 富男	ひらお とみお	キヤノン
廣澤 重穂	ひろさわ しげほ	シータス
福本多佳子	ふくもと たかこ	日本航空、Creative Tours
藤原 道夫	ふじわら みちお	日本赤十字社（現職）
細谷 博	ほそや ひろし	日立製作所、日立メディコ
松浦 俊博	まつうら としひろ	東芝
松谷 隆	まつたに たかし	富士通
松田 昌康	まつだ まさやす	東芝
三 春	みはる	住友商事
村谷 卓一	むらや たくいち	明治安田生命（安田生命）
森田 晃司	もりた こうじ	三菱商事
八木 信男	やぎ のぶお	浪速学院高校（現職）
矢澤 正二	やざわ しょうじ	信金中央金庫
山縣 正靖	やまがた まさやす	三菱銀行

会 員 名 簿 (五十音順)

氏 名	出 身 会 社
浅井壮一郎	味の素
阿部 典文	石川島播磨重工業
新井 良侑	ダイセル化学工業
安藤 晃二	三菱商事
池田 隆	東芝
市川 忠夫	東芝
稲宮 健一	三菱電機
岩崎洋一郎	三菱レイヨン
上田 信隆	東芝情報システム
上原 利夫	住友商事
鵜飼 直哉	富士通
内田 満夫	神戸製鋼所
大泉 潤	三菱化学
大越 浩平	NEC インフロンティア (旧 日通工)
大津 隆文	大蔵省
大月 和彦	労働省
大西 宏	松下電器
大平 忠	三菱化学
大野 晃	三井物産
大森 海太	三菱化学
川口ひろ子	アトリエ・リヴィエール
川村 邦生	第一勧業銀行
木村 敏美	郵政省福岡地方簡易保険局
金京 法一	三菱商事、三菱総研
倉藤 金助	桜井会計事務所
児玉 寛嗣	東芝
斉藤 征雄	三菱化学
清水 勝	明治安田生命 (安田生命)
志村 良知	リコー
下山 健夫	サントリー、B-R31 アイスクリーム
首藤 静夫	三菱化学
杉浦 右藏	NTT、三菱電線工業

▽昨年の今頃はテーマの一つ「オリンピック」での競作に苦勞していましたが、今度はテレビから冬季オリンピック競技を観戦しながらの執筆です。今年の初めクラブ長老会員のお一人高橋孝蔵さんが病に倒れました。ご親友の都甲さんの弔文が掲載されています。(合掌)

皆々様には益々お身体を大切にお過ごし下さい。(平尾)

▽編集委員三年目、そして今号は記念すべき「二十五号」。いつも感じるのはわがクラブの面々が多士済済ということ。今号にも、それが全ページに滲み出ています。どこから読んでもおもしろいこと請け合いです。(斉藤)

▽「二十五号」から短編小説が従来の3ページという枠組みから5ページ以内へと変更。多くの方々が小説書きに初挑戦ではと期待したのですが、掌編小説勉強会関係者からの投稿に終わり「ページ数の大幅増加？」という懸念は杞憂に終わりました。次号での挑戦を！(福本)

▽募集開始時には、作品がいくつ集まるか毎号心配ですが、今号はほぼ全員参加。内容・分量ともに充実したのになりました。追い込み段階では、投稿にかける会員の氣迫を感じた今号でした。(首藤)

企業OBペンクラブ同人誌

「悠遊」第二十五号

二〇二八年四月十六日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

清水 勝

印刷所 株式会社 每栄

東京都千代田区一ツ橋一―一―(千一〇〇〇〇三三)
TEL 〇三―三三二二―〇四七九

連絡先 企業OBペンクラブ事務局

志村 良知

横浜市港北区大倉山五―三―一―八〇四(千二二二一〇三七)

Eメール: ryushinura@01.itcom.net
クラブURL: <http://www.obpen.com>

口座 三菱UFJ銀行海老名支店(409)

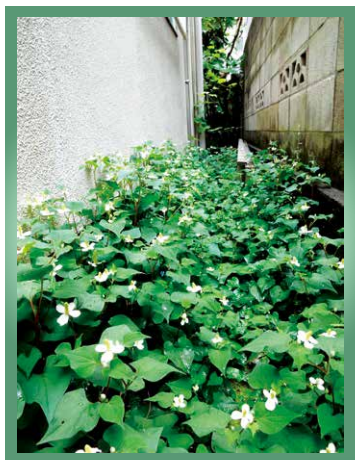
企業OBペンクラブ(普通) 1086096

アンニュイの

風に吹かれて 鰯雲

ほっといて 好きなの日陰

わたしたち



田中 みづえ



三 春

春の陽に
スタンダードの
赤と黒

下山 健夫



人知れず
朽ちる木の葉は 即身仏



大越 浩平

むらさきの
着物乱れて 白襦袢



松田 昌康



ろうけつ染 木村 敏美



タッカーホールへの道 安藤 晃二



棚田(写真を着色加工) 野瀬 隆平



のんちゃん 塚田 實



Cafe Bar in Ginza 福本 多佳子